

一般国道
10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第5集

鎚先遺跡

福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡の調査

1995

福岡県教育委員会

一般国道10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第5集 鋤先遺跡

正誤表

本文中に誤りがありましたので以下のように訂正致します。

	誤	正
P15 第9図	3号土壌測図の74	74を削除
P33 第23図	スケール [1 _{mm} ⁰	スケール [1 _{mm} ⁰
P59 第45図	(1/3)	(1/2)
P60 第46図	(1/3)	(1/2)
P94 第72図	(1/250)	(1/300)
P110 第85図 84	(1/4)	(1/2)
押図目次 第11図	実測図 (1/3)	(1/3, 2/3)
第20図	(1/100)	(1/60)
第45図	(1/3)	(1/2)
第46図	(1/3)	(1/2)
第72図	(1/250)	(1/300)
第85図 84	(1/4)	(1/2)



黒先遺跡全景と黒川中流域



1. 1区全景空中写真



2. 2区全景空中写真



1. 3区全景空中写真



2. 0区全景空中写真

鋤先遺跡

福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡の調査

序

一般国道10号線椎田道路は、平成2年12月25日に全線供用が開始されました。

この椎田道路に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和61年度より発掘調査を実施して平成2年度までに終了をみています。

本報告書は、平成元年度と平成2年度に実施しました、京都郡豊津町大字徳永字鋤先^{スサギ}を中心に所在した遺跡について発掘調査の成果をまとめたものです。

本書を、歴史研究に、教育の場に、広く活用いただければ幸甚です。

なお、発掘調査にあたっては、協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に深く感謝いたします。

平成7年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

1. この報告は、1989・1990年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道10号線椎田道路建設予定地に係わる埋蔵文化財の発掘調査の記録である。
2. 本書は、椎田道路関係埋蔵文化財調査報告の第5集目で、^{スサギ}鋤先遺跡である。
3. 遺物の実測には久富美智子、棚町陽子、坂田順子、藤原さとみ、副島邦弘が行ない、挿図、図版作製、製図には、小池史哲、杉原敏之、豊福弥生、原カヨ子、土山真弓美、関久江と副島が、遺物の復原作業は岩瀬正信の指導の下に九州歴史資料館復原室で実施した。
4. 遺物写真については、石丸洋、北岡伸一、遺構の写真は調査担当者の副島が、空中写真は稲富が実施した。
5. 人骨の分析には、中橋孝博、古賀英也先生（九州大学比較社会文化研究科）、六道銭の分析には櫻木晋一先生（九州帝京短期大学経営情報科）の手を煩わした。
6. 題字は草場宗彦氏にお願いした。
7. 本書の執筆は、IV-(1)を中橋・古賀先生、IV-(2)を櫻木先生、他は全て副島が担当し、編集も行なった。

本文目次

序

I. はじめに	1
(1) 調査の経過	1
(2) 調査の組織と関係者	3
II. 位置と環境	6
III. 発掘調査の記録	8
(1) 発掘調査の概要	8
(2) 遺構と遺物	11
IV. 考察	159
(1) 福岡県京都郡豊津町 ^{スサギ} 鋤先遺跡 出土近世人骨について	161
(2) ^{スサギ} 鋤先遺跡および福岡県下の 出土六道銭について	173
(3) 徳永遺跡群の中の ^{スサギ} 鋤先遺跡について	187
V. おわりに	192

図 版 目 次

巻頭図版 1	鋤先遺跡全景と祇川中流域	
2	1. 1区全景空中写真	2. 2区全景空中写真
3	1. 3区全景空中写真	2. 0区全景空中写真
図版 1	1. 鋤先遺跡周辺航空写真	2. 調査前の鋤先遺跡(北から)
図版 2	鋤先遺跡調査区全景	
図版 3	1区全景空中写真	
図版 4	1. 1区1号土倉	2. 1区1号土塼
図版 5	1. 1区3号土塼	2. 1区4・5号土塼
図版 6	1. 1区4号土塼	2. 1区5号土塼遺物出土状況
	3. 1区5号土塼	4. 1区完掘後の5号土塼
図版 7	1. 1区1～3号溜	2. 1区1号溜
図版 8	1区出土遺物	
図版 9	2区全景空中写真	
図版10	1. 調査前の2区	2. 2区調査前の土塼
	3. 完掘後の2区	4. 2区土塼の調査風景
図版11	1. 2区1号住居跡	2. 2区2号住居跡
図版12	1. 2区土塼(1)	2. 2区土塼(発掘前)
図版13	1. 2区土塼の石積.1	2. 2区土塼の石積.2
図版14	1. 2区土塼の石積.3	2. 2区土塼の石積.4
	3. 2区土塼の石積.5	4. 2区土塼の石積.6
図版15	1. 2区土塼の盛土状況.1	2. 2区土塼の盛土状況.2
	3. 2区土塼の盛土状況.3	4. 2区土塼の盛土状況.4
図版16	1. 2区土塼下のピット群.1	2. 2区土塼下のピット群.2
	3. 2区土塼下で発見された1号住居跡	
図版17	1. 2区土塼下で発見された土塼.1	2. 2区土塼下で発見された土塼.2
図版18	1. 2区ピット.1	2. 2区ピット.2
	3. 2区大甕使用の溜状態.1	4. 2区大甕使用の溜.2
図版19	1. 2区基礎6.状態	2. 石臼等取上げ後基礎.6
	3. 2区基礎	
図版20	1. 2区厩.1	2. 2区厩.2

- | | | |
|------|--|--|
| | 3. 2区厩. 3 | 4. 2区厩. 4 |
| 図版21 | 1. 2区大正溝
3. 2区大正溝遺物出土状況. 2 | 2. 2区大正溝遺物出土状況. 1 |
| 図版22 | 1. 2区大正溝遺物出土状況. 1
3. 2区大正溝遺物出土状況. 3 | 2. 2区大正溝遺物出土状況. 2
4. 2区大正溝遺物出土状況. 4 |
| 図版23 | 1. 2区1号中世墓. 1
3. 2区2号中世墓 | 2. 2区1号中世墓. 2
4. 2区3号中世墓 |
| 図版24 | 1. 2区1号配石遺構. 1 | 2・3. 2区1号配石遺構状況 |
| 図版25 | 2区土器等出土遺物 | |
| 図版26 | 2区基礎・大正溝出土遺物 | |
| 図版27 | 2区大正溝出土遺物 | |
| 図版28 | 2区大正溝等出土遺物 | |
| 図版29 | 3区全景空中写真 | |
| 図版30 | 1. 3区1・2号墳全景 | 2. 3区1号墳全景 |
| 図版31 | 1. 3区1号墳周溝と2号墳
3. 3区1号墳周溝内馬具の出土状況 | 2. 3区1号墳周溝内遺物出土状況 |
| 図版32 | 1. 3区2号墳全景 | 2. 3区2号墳石室 |
| 図版33 | 1. 3区2号墳石室閉塞状況 | 2. 3区2号墳石室仕切部 |
| 図版34 | 1. 3区2号墳石室下部床面 | 2. 3区2号墳石室除去後の掘方 |
| 図版35 | 1. 3区3・4・6号墳と5・7号溝
3. 3区5号墳周溝遺物出土状況 | 2. 3区4号墳と5号溝 |
| 図版36 | 1. 3区3・6号墳 | 2. 3区6号墳石室 |
| 図版37 | 1. 3区7号墳全景. 1 | 2. 3区7号墳全景. 2 |
| 図版38 | 1. 3区7号墳墳丘と周溝
3. 3区7号墳石室閉塞状況 | 2. 3区7号墳石室 |
| 図版39 | 1. 3区7号墳石室左側壁
3. 3区7号墳石室基底部 | 2. 3区7号墳石室仕切部分
4. 3区7号墳石室除去後の掘方 |
| 図版40 | 1. 3区20号土墳墓全景 | 2. 3区20号土墳墓遺物出土状況 |
| 図版41 | 1. 3区1号土倉と1号土墳墓 | 2. 3区1号土倉内部と1号土墳墓 |
| 図版42 | 1. 3区2号土倉全景
3. 3区2号土倉閉塞部断面 | 2. 3区2号土倉閉塞部 |
| 図版43 | 1. 3区2号土倉内部 | 2. 3区2号土倉内部と排水溝 |
| 図版44 | 1. 3区3号土倉全景 | 2. 3区3号土倉 (完掘後) |

- | | | |
|------|----------------------|---------------------|
| | 3. 3区4号土倉全景 | 4. 3区5号土倉全景 |
| | 5. 3区3号土倉と8号土墳墓 | |
| 図版45 | 1. 3区2・3号土墳墓 | 2. 3区7号土墳墓 |
| | 3. 3区8号土墳墓 | |
| 図版46 | 1. 3区9号土墳墓 | 2. 3区13号土墳墓 |
| | 3. 3区2号配石遺構 | |
| 図版47 | 1. 3区大溝集石状況(1) | 2. 3区大溝集石状況(2) |
| | 3. 3区大溝集石状況(3) | |
| 図版48 | 1. 3区完掘後の大溝 | 2. 3区完掘後の大溝 |
| | 3. 大溝の東北端部 | |
| 図版49 | 1. 3区5号溝(南西から) | 2. 3区完掘後の5号溝(北東から) |
| 図版50 | 1. 3区7号溝(東から) | 2. 3区9号溝(西から) |
| 図版51 | 1. 3区近世建物跡 | 2. 3区調査風景(左奥は川の上遺跡) |
| 図版52 | 3区1・2・5・7号墳出土遺物 | |
| 図版53 | 2区・3区出土遺物 | |
| 図版54 | 3区11・13・20号土塙と土倉出土遺物 | |
| 図版55 | 3区大溝出土遺物 | |
| 図版56 | 3区大溝等出土遺物 | |
| 図版57 | 鋤先遺跡0区全景空中写真 | |
| 図版58 | 1. 0区全景(西上空から) | 2. 表土除去後の0区(南から) |
| 図版59 | 1. 0区1号落とし穴 | 2. 0区6号落とし穴 |
| | 3. 0区3号落とし穴 | 4. 0区3号落とし穴(完掘状況) |
| 図版60 | 1. 0区2号落とし穴 | 2. 0区4号落とし穴 |
| | 3. 0区5号落とし穴 | 4. 0区20号近世墓下の7号落とし穴 |
| 図版61 | 1. 0区1号横穴墓 | 2. 0区1号横穴墓閉塞状況 |
| 図版62 | 1. 0区1号横穴墓内部 | 2. 0区完掘後の1号横穴墓 |
| 図版63 | 1. 0区2号横穴墓 | 2. 0区2号横穴墓閉塞状況 |
| 図版64 | 1. 0区2号横穴墓内部 | 2. 0区完掘後の2号横穴墓 |
| 図版65 | 1. 0区3号横穴墓 | 2. 0区3号横穴墓閉塞状況 |
| 図版66 | 1. 0区3号横穴墓内部.1 | 2. 0区3号横穴墓内部.2 |
| | 3. 0区完掘後の3号横穴墓.1 | 4. 0区完掘後の3号横穴墓.2 |
| 図版67 | 1. 0区4号横穴墓内部 | 2. 0区完掘後の4号横穴墓 |
| 図版68 | 1. 0区土倉の上 | 2. 0区土倉の内部 |

- | | | |
|------|--|--------------------------------------|
| 図版69 | 1. 0区3号土坑
3. 0区石組遺構内の甕出土状況 | 2. 0区石組遺構全景(西から) |
| 図版70 | 1. 0区大溝 | 2. 0区カマド遺構 |
| 図版71 | 0区近世墓群空中写真 | |
| 図版72 | 1. 0区近世墓群全景(東から) | 2. 0区完掘後の近世墓群全景(東から) |
| 図版73 | 1. 0区14・15・27・29・30・32~34号近世墓付近 | 2. 0区25・26・36号近世墓付近 |
| 図版74 | 1. 0区4・8号近世墓
3. 0区14号近世墓付近 | 2. 0区13号近世墓 |
| 図版75 | 1. 0区93号近世墓
3. 0区36・81・91・95号近世墓付近 | 2. 0区61号近世墓 |
| 図版76 | 1. 0区27号近世墓数珠玉出土状況
2. 0区5号近世墓六道銭出土状況 | 3. 0区54号近世墓葬出土状況
4. 0区近世墓群発掘風景(1) |
| 図版77 | 1. 0区近世墓群発掘風景(2)
3. 0区2号経塚供養塔(現在果願寺中) | 2. 0区1号経塚供養塔(現在果願寺中) |
| 図版78 | 1. 0区1号経塚一字一石経出土状況 | 2. 0区1号経塚一字一石経堆積状況 |
| 図版79 | 1. 0区完掘後の1号経塚 | 2. 0区2号経塚盛土 |
| 図版80 | 1. 0区2号経塚内部の石積 | 2. 0区2号経塚一字一石経出土状況(1) |
| 図版81 | 1. 0区2号経塚一字一石経出土状況(2) | 2. 0区完掘後の2号経塚 |
| 図版82 | 0区横穴墓・土倉等出土遺物 | |
| 図版83 | 0区石組・近世墓・経塚出土遺物 | |
| 図版84 | 0区4(上)・4・5・6号墓出土六道銭 | |
| 図版85 | 0区8・10・11・13・16号墓出土六道銭 | |
| 図版86 | 0区18・22・25・27・29号墓出土六道銭等 | |
| 図版87 | 0区30・31・32・34・35号墓出土六道銭 | |
| 図版88 | 0区36A・36B・36C・38・41号墓出土六道銭等 | |
| 図版89 | 0区42・55・57・62・63号墓出土六道銭等 | |
| 図版90 | 0区65・66・69・74・77A号墓出土六道銭 | |
| 図版91 | 0区77B・78・80・81号墓出土六道銭 | |
| 図版92 | 0区82・86・87・88A・88B号墓出土六道銭等 | |
| 図版93 | 0区88C・90・92・94・95号墓出土六道銭等 | |
| 図版94 | 0区1・2号一字一石経塚・東側大溝出土六道銭 | |

挿 図 目 次

第1図	開通した北大道路（平成6.12.15朝日新聞夕刊）	2
第2図	鋤先遺跡の位置と周辺主要遺跡（1/50,000）	7
第3図	鋤先遺跡周辺地形図（1/2,000）	9
第4図	鋤先遺跡発掘区配置図（1/2,000）	10
第5図	鋤先遺跡地形測量図（1/200）	付図
第6図	鋤先遺跡遺構配置図（1/1,000）	付図
第7図	鋤先遺跡1区遺構配置図（1/250）	12
第8図	1区5号土壇出土遺物実測図（1/5）	14
第9図	1・2区礎壇置土壇実測図（1/20）	15
第10図	1・2区遺物（大甕）実測図（1/6）	17
第11図	1区表土・Pit出土遺物（近代）実測図（1/3）	18
第12図	鋤先遺跡2区遺構配置図（1/300）	21
第13図	2区・3区住居跡実測図（1/100）	22
第14図	2区土塁断面土層図（1/40）	23
第15図	2区土塁等出土遺物（石器）実測図（1/3）	24
第16図	2区土塁出土遺物（土器）実測図.1（1/3）	25
第17図	2区土塁出土遺物（中世期）実測図.2（1/3）	26
第18図	2区土塁等出土遺物（陶磁器類）実測図.3（1/3）	29
第19図	2区土塁等出土遺物（瓦類）実測図.4（1/3）	30
第20図	2区土塁下遺構実測図（1/100）	31
第21図	2区Pit出土遺物実測図（1/3）	32
第22図	2区Pit5号出土遺物実測図（1/2）	32
第23図	2区Pit13号遺構実測図（1/20）	33
第24図	2区Pit13号出土遺物実測図（1/3）	33
第25図	2区4号土壇出土遺物実測図（1/3）	34
第26図	2区基礎6遺構実測図（1/20）	37
第27図	2区基礎6出土遺物実測図（1/5）	37
第28図	2区大正時代溝出土遺物（石器）実測図.1（1/3）	38
第29図	2区大正時代溝出土遺物（陶磁器）実測図.2（1/3）	39
第30図	2区大正時代溝出土遺物（陶磁器）実測図.3（1/3）	40
第31図	2区大正時代溝出土遺物（陶磁器）実測図.4（1/3）	41

第32图	2区中世1号墓实测图 (1/20)	46
第33图	2区中世2·3号墓实测图 (1/30)	47
第34图	2区中世3号墓出土遗物实测图 (1/3)	47
第35图	2区1·2号配石遣物实测图 (1/60)	48
第36图	配石遣物出土遗物实测图 (1/2)	49
第37图	2·3区出土遗物(石鏡) 实测图 (2/3)	49
第38图	2区試掘時出土遺物实测图 (1/3)	49
第39图	2区表土出土遺物(銅製品) 实测图 (1/2)	50
第40图	鐏先遺跡3区遣物配置图 (1/300)	52
第41图	先土器時代出土遺物实测图 (1/2)	55
第42图	3区1·3~6号古墳实测图 (1/100)	56
第43图	3区1号古墳周溝遺物出土狀態实测图 (1/30)	57
第44图	3区1号古墳周溝中出土遺物实测图 (1/3)	58
第45图	3区1号古墳周溝中出土遺物(鉄製品武器等) 实测图 (1/3)	59
第46图	3区1号古墳周溝中出土遺物(鉄製品馬具) 实测图 (1/3)	60
第47图	3区2号古墳石室实测图 (1/30)	63
第48图	3区2号古墳出土遺物(須惠器) 实测图 (1/3)	64
第49图	3区2号古墳出土遺物(玉器) 实测图 (1/1)	64
第50图	3区6号古墳石室实测图 (1/30)	65
第51图	3区7号古墳实测图·墳丘土層断面图 (1/601/30)	66
第52图	3区7号古墳石室实测图 (1/30)	67
第53图	3区5·7号古墳墳丘周溝出土实测图 (1/3)	68
第54图	3区20号土墳墓实测图 (1/20)	70
第55图	3区20号土墳墓出土遺物实测图 (1/3)	71
第56图	3区1号土倉·1号土墳墓实测图 (1/40)	73
第57图	3区2号土倉实测图 (1/40)	75
第58图	3区土倉等出土遺物(石器) 实测图 (1/2)	76
第59图	1区·3区土倉出土遺物实测图 (1/4)	77
第60图	3区3号土倉实测图 (1/20)	78
第61图	3区4号土倉实测图 (1/40)	79
第62图	3区5号土倉实测图 (1/20)	80
第63图	3区2·3·4号土墳墓实测图 (1/20)	81
第64图	3区6·7·8号土墳墓实测图 (1/20)	82

第65図	3区11・13号土墳墓実測図(1/20)	83
第66図	3区中世土墳墓出土遺物実測図(1/3)	84
第67図	3区大溝出土遺物(石器)実測図.1(1/5)	84
第68図	3区大溝出土遺物(石器)実測図.2(1/5)	85
第69図	3区大溝出土遺物(土器)実測図.3(1/3)	86
第70図	3区大溝出土遺物(中世)実測図.4(1/3)	90
第71図	3区溝5覆土出土遺物実測図(1/3)	92
第72図	鋤先遺跡0区遺構配置図(1/250)	94
第73図	0区縄文遺構(1~4号落し穴)実測図(1/20)	96
第74図	0区縄文遺構(5・6号落し穴)実測図(1/20)	97
第75図	0区横穴1号墓実測図(1/30)	99
第76図	0区横穴2号墓実測図(1/30)	101
第77図	0区横穴2・4号墓出土遺物実測図(1/3)	102
第78図	0区横穴3号墓実測図(1/30)	103
第79図	0区横穴3号墓出土遺物実測図.1(1/3)	104
第80図	横穴3号墓出土遺物実測図.2(2/3)	105
第81図	0区横穴4号墓実測図(1/30)	105
第82図	0区1号土倉実測図(1/30)	108
第83図	0区1~3号土壇・23号近世墓実測図(1/30)	109
第84図	0区4号墓出土遺物実測図(1/4)	110
第85図	0区大溝出土遺物(近世)実測図(1/4)	110
第86図	0区石組遺構実測図(1/60)	111
第87図	0区石組遺構出土遺物実測図.1(1/3)	112
第88図	0区石組遺構出土遺物実測図.2(1/4)	113
第89図	0区石組遺構出土遺物実測図.3(1/2)	113
第90図	0区カマド遺構実測図(1/20)	117
第91図	0区カマド遺構出土遺物実測図(1/3)	117
第92図	0区桶入土壇実測図(1/30)	118
第93図	0区近世墓配置図(1/100)	付図
第94図	0区近世墓遺構実測図.1(1/30)	123
第95図	0区近世墓遺構実測図.2(1/30)	124
第96図	0区近世墓遺構実測図.3(1/30)	125
第97図	0区28号近世墓出土遺物実測図(2/3)	126

第98図	0区54号近世墓出土遺物実測図(2/3)	126
第99図	0区近世墓覆土中出土遺物実測図(1/4)	126
第100図	0区近世墓(副葬品)出土遺物実測図(1/4)	126
第101図	近世墓出土六道銭実測図.1(1/1)	126
第102図	0区近世墓出土六道銭実測図.2(1/1)	132
第103図	0区近世墓出土六道銭実測図.3(1/1)	133
第104図	0区近世墓出土六道銭実測図.4(1/1)	134
第105図	0区近世墓出土六道銭実測図.5(1/1)	135
第106図	0区近世墓出土六道銭実測図.6(1/1)	136
第107図	0区近世墓出土六道銭実測図.7(1/1)	137
第108図	0区近世墓出土六道銭実測図.8(1/1)	138
第109図	0区近世墓出土六道銭実測図.9(1/1)	139
第110図	0区近世墓出土六道銭実測図.10(1/1)	140
第111図	0区近世墓出土六道銭実測図.11(1/1)	141
第112図	0区近世墓出土六道銭実測図.12(1/1)	142
第113図	0区近世墓出土六道銭実測図.13(1/1)	143
第114図	0区近世墓出土六道銭実測図.14(1/1)	144
第115図	0区近世墓出土六道銭実測図.15(1/1)	145
第116図	0区1・2号一字一石経塚実測図(1/30)	146
第117図	0区2号一字一石経塚出土遺物実測図(2/3)	147
第118図	0区1号一字一石経(写真).1	149
第119図	0区1号一字一石経(写真).2	150
第120図	0区2号一字一石経(写真).1	151
第121図	0区2号一字一石経(写真).2	152
第122図	0区2号一字一石経(写真).3	153
第123図	0区2号一字一石経(写真).4	154
第124図	0区2号一字一石経(写真).5	155
第125図	0区2号一字一石経(写真).6	156
第126図	福岡県六道銭6枚セットセリエーション	181
第127図	出土六道銭写真	183
第128図	出土六道銭拓影(1/1)	184
第129図	出土銭形製品拓影(1/1)	185
第130図	高塚古墳と横穴古墳配置図(1/350)	188

第131図	土屋南西コーナー状況	189
第132図	果願寺墓地配置図(平成元年建設者提供)	190

表 目 次

表1	一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財一覧表
表2	鶴先遺跡近世墓計測表
表3	鶴先遺跡近世墓出土遺物一覧表
表4	鶴先遺跡出土土人骨一覧表
表5	鶴先遺跡出土近世人骨の性別・年齢構成
表6	鶴先遺跡出土近世人骨の上肢骨計測値(男性)
表7	鶴先遺跡出土近世人骨の上肢骨計測値(女性)
表8	鶴先遺跡出土近世人骨の下肢骨計測値(男性)
表9	鶴先遺跡出土近世人骨の下肢骨計測値(女性)
表10	鶴先遺跡出土近世人骨の推定身長と比較
表11	鶴先遺跡出土六道銭一覧表
表12	福岡県近世墓六道銭出土遺跡一覧表

I. はじめに

(1) 調査の経過 (第1図)

一般国道10号線は、本州からの玄関口である北九州市を起点とし、東九州の主要都市（行橋市・豊前市・中津市・別府市・大分市・延岡市・宮崎市・都城市等）を経て鹿児島市に至る延長約450kmの大動脈であり、東九州地域の経済・社会・文化活動に重要な役割を果たしている。

特に北九州から大分市に至る区間は、今後一層の発展が予想される地域であり、その発展を図るために、交通体系の整備が急務となっている。

このような状況に勘案して計画が進められているのが、北九州市と大分市を結ぶ北大道路である。この北大道路も平成6年12月15日には中津市から大分市まで供用がなされた。行橋バイパス・椎田道路・椎田バイパスを経て豊前バイパスそして中津バイパスそして別大道路にて大分市まで結ばれることとなったわけである。

椎田道路建設の歴史をふり返ると、近年、行橋市から豊前市に至る間は、北九州市のベッドタウンとして脚光をあい、人口増加の著しい地域で国道の交通量は増加の一途をたどり、飽和状態に達しています。このため、幹線道路の機能を失いつつあり、沿線住宅の日常生活にまで影響をおよぼしていました。

そのために椎田道路が計画され、国道の交通混雑を解消し、地域の健全な発展に寄与するため、北大道路の一端として（全延長約16.2kmを、建設省5.9km、日本道路公団10.3km）計画された。昭和54年12月22日事業許可申請が建設大臣あて行われ、昭和55年2月8日に事業許可となる。同年10月21日には、椎田道路及び日本道路公団が施行する椎田バイパスを含めて路線の発表がなされた。

これに伴って、福岡県教育委員会は建設省分の椎田道路について、5工区（行橋市・豊津町）と10工区（豊前市松江）とを現地踏査による分布調査を実施した。

椎田バイパスの建設を行う日本道路公団の方が用地買収が先行したので、発掘調査については、用地買収が終了した椎田町域を昭和61年5月から開始し、昭和62年度には豊津町分を実施した。建設省についても、行橋バイパスと接合する5工区の行橋市辻垣地区について、用地解決したので、踏査を実施し、その結果を受けて、昭和62年度より本格的な発掘調査を実施することとなった。

これに先行して、昭和61年5月に福岡県教育委員会は発掘調査事務所を、椎田道路を中心に、北に行橋バイパス・南に豊前バイパスと北大道路に関係する発掘調査が進行することとなった。

ため、椎田町に県文化課椎田事務所を設置させて、発掘調査の円滑化をはかった。この椎田事務所も平成6年11月末日をもって閉じた。

当該地は、一般国道関係埋蔵文化財一覧では第3地点の徳永Bとして上げられ、古墳・土塁・近世墓地として上げられ、面積は5,700㎡であった。地籍は豊津町大字徳永1960・1961・1963・1964・1965・3102・2003・2004・2005・2006・2007・2008-1・1986・1990等の番地で、小字は居屋敷（イヤシキ）とスサギ（鋤先）であった。土地の人はスサギ地区（1960～1965番地）を鋤先と称していた。物の本（註）によれば、鋤先の鋤は耕作を意味し、小倉藩では新田開発に労力を提供して、その土地に特別権利を保証された農民、あるいはその農民の住地を意味する。この小字スサギは、これがなまったものと考えられる。

この地区には古墳群がみられ、遺構の集中がみられた。居屋敷とスサギの境に土塁（近世）がその字境界となっている。この第3地点の名称を鋤先（スサギ）遺跡と称することとした。

発掘調査は平成元年7月～11月迄4,300㎡の用地を、解決しなかった寺院の部分1,400㎡を平成2年8月～10月にかけて発掘調査を実施した。

遺跡は古墳時代の墓地区と近世土塁・近世墓地を主体とするものであった。

平成6年度に整理・報告書を作成する事となった。

現在当該地の上には車が流れて、発掘調査当時を思いおこすすやがない。

（註） 福岡県『角川日本地名大辞典 40 福岡県』 角川書店 1988年

第1図 開通した北大道路
（平成6.12.15朝日新聞夕刊）



(2) 調査の組織と関係者

平成6年度における一般国道稚田道路関係発掘調査報告書は、

第4集 「徳永川の上遺跡」

第5集 「スサギ(鋤先)遺跡」

の2冊を刊行することとなった。

北大道路も平成6年度の平成7年3月末日には豊前バイパスも供用が開始され、北九州市から大分市までが完全に一本につながり、2時間半で結ばれる。設計速度は時速80km。一日当たりの車両はこれまでの2倍の1万台程度を見込んでいる。これによって高速交通化が一部進んだことで、大分県や北九州市では、地域間交流促進と経済の活性化に期待されるものである。

最後になったが、調査の組織と関係者は、下記の通りである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

	平成元年	2年	6年
所 長	高橋 松男	森 久	大内栄吉郎
副 所 長 (技術)	久谷 秀明	久谷 秀明	平川 輝義
建設専門官	田中 睦憲	田中 睦憲	安部 純弘
建設監督官	中川 博勝	田中 常美	古賀 義隆
	桃坂 繁	児玉 孝夫	田中 敏則
工務課長	衛藤 但利	溝上 利毅	中川 博勝
工務係長	諏訪 憲二	諏訪 憲二	徳重 栄紀
調査課長	久良木 裕	松崎 安則	田中 光助
調査係長	田中 敏則	荒瀬 美和	柴田 智
技 官	井上 敏彦	井上 敏彦	田辺 稔

福岡県教育委員会

	平成元年	2年	6年
総括 教育長	御手洗 康	御手洗 康	光安 常喜
教育次長	河上 雄平	濱地 甫伯	松枝 功
指導第二部長	月森清三郎	月森清三郎	丸林 茂夫
文化課長	六本木聖久	六本木聖久	松尾 正俊
文化課参事	森本 精造	森本 精造	柳田 康雄
文化課長補佐	平 聖峯	安野 義勝	清水 圭輔

文化課技術補佐	宮小路賀宏	石松 好雄	
文化課参事補佐	中矢 真人	中矢 真人	井上 裕弘
	柳田 康雄	大塚 健	橋口 達也
	井上 裕弘	池原 脩二	川述 昭人
	石山 勲	松尾 正俊	木下 修
		柳田 康雄	磯村 幸男
		井上 裕弘	児玉 真一
		石山 勲	馬田 弘稔
		濱田 信也	池辺 元明
		副島 邦弘	
庶務	文化課管理係長 池原 脩二	池原 脩二	杉光 誠
	事務主査 和田 健作	東 勇治	安丸 重喜
	主任主事 澤田 俊夫	澤田 俊夫	久保 正志
			高田 裕康

調査及び整理報告

文化課調査班総括	柳田 康雄 (兼)	柳田 康雄 (兼)	橋口 達也
総括補佐	井上 裕弘	井上 裕弘	副島 邦弘 (現 福岡)
参事補佐		副島 邦弘 (調査担当者)	県立美術館)
技術主査	副島 邦弘		
主任技師	緒方 泉		
技 師		小川 泰樹	
調査員		中橋 孝博	中橋 孝博
		[九大 (医) 講師]	[九大 助教授]
		土肥 直美	櫻木 晋一
		[九大 (医) 助手]	[帝京短大 助教授]

なお、調査中には、一川淳江・川本義雄・宮本工・浜島三司諸氏の指導助言を得、人骨の取上げには九州大学医学部第2解剖教室の中橋孝博先生・土肥直美先生に指導を得た。

発掘作業には、下記の人々から協力を受けた。

岡 崇 (宗像市教育委員会)・植村利道・小野志夫・山本喜美子・泉恭子・坪根美佐子・原田美紀子・溝辺慶子・荒上敬子・森脇勢津子・三井恭子・末松浅枝・竹本美由起・末永泰子・林和子・下田スミ子・宮本チツ子・下田文子・城戸数枝・奥村洋子・末永ツタエ・木本民子・馬場清子・横山康子・中原三重子。

整理報告書作成のおりには、遺物整理については岩瀬正信が統括し、豊福弥生・原カヨ子・

土山真弓美・関久江・坂田順子・久富美智子・棚町陽子・藤原さとみ諸氏の協力を受け、六道
銭関係については帝京短期大学の櫻木晋一先生の協力を受けた。

記して感謝の意を表す。

表1 一般国道10号 椎田道路関係埋蔵文化財一覧表

平成7年3月

箇 所 名	地 点	遺跡名	遺跡の概要	(当初面積) 調査面積・㎡	調査完了 年 月
一般国道10号 椎田道路 (5工区)	1	辻垣	環濠集落	(33,400) 34,500	S62, S63
	2	徳永A 居屋敷	竪穴跡	(980) 1,050	H1.3
	3	徳永B 竊先	古墳群	5,700	H2.10
	4	徳永C 川の上	墳丘墓群	(11,250) 12,500	うち7,500㎡ H1.4期 H2.10期
椎田道路(5工区)合計				(51,330) 53,750	100%完
一般国道10号 椎田道路 (10工区)	5	山浜	推定地	1,000	H1.11
	6	石丸A	推定地	(3,000) 0	
		石丸B	縄文集落	3,500	S63.12
	7	中村A	散布地	7,700	うち6,000㎡ 平成63.12期 H1.5期 試掘結果 遺跡ナシ
	8-A	中村B	推定地	(3,000) 0	
	8-B	中村B	推定地	(6,800) 150	完了
	9-A	黒峰尾	古墳群	(14,780) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	9-B	黒峰尾	古墳群	(5,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	10	遷仏寺	推定地	(1,050) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	11	東舟入	推定地	(600) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	12	広山	推定地	(9,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	椎田道路(10工区)合計				(55,430) 12,350

II. 位置と環境

行橋市を中心とする京都平野は、北から長狭川・今川・祇川の3本の河川によって、つくられた沖積平野である。

当該地区は、祇川中流域右岸の丘陵突端部に位置する。

行政地区では、福岡県京都郡豊津町大字徳永地区である。町の北東端部で、西は祇川を境に田中、北・東は行橋市、南は皆見に接する。祇川東岸の低丘陵上に位置する農業地域。

地区内は県道節丸新川原停車場線が南北に貫通している。また集落北端に五社六神社、西部に成就山浄土宗果願寺がある。この果願寺が椎田道路にまともに路線内にはいったため、新たに直線で400m西へ移動している。

江戸時代の徳永は、元和8年(1622)には徳永村、332石余・23人・牛3匹・馬1匹と「人畜改帳」には記録されている。(註1)この徳永地区は、家臣知行地である。

享保の飢饉では、多くの犠牲者を出した。また、天保でも同じ様な犠牲者を出した。これを供養するために果願寺に一字一石経塚を築いている。これを今回の発掘調査で検出された。

周辺の遺跡を見ると、中世の河口ぐちの今井は港町として栄え、鋳物師大工の集団が専業に梵鐘を造っていた。この地区にも行橋バイパスの調査(註2)によって、発掘がなされたが、中世の遺構や遺物等の検出は見られた。祇川を渡った対岸に津留遺跡(註3)がある。清の中

から方格規矩鏡の破片が検出しているもので弥生終末から古墳時代の生活遺構を検出している。同時期には、辻垣高田・長通・マサマル遺跡と、徳永鋤先(スサギ)・川の上遺跡等が名高い。古墳群では、徳永鋤先・川の上遺跡と、居屋敷横穴群が目をはひく、最古級の須恵器を焼いた窯跡である居屋敷窯跡が、椎田道路建設に伴って発見されている。重要な遺跡群が発見され、発掘されているわけで、弥生～古墳時代に関する分野に大きな足跡を残している。

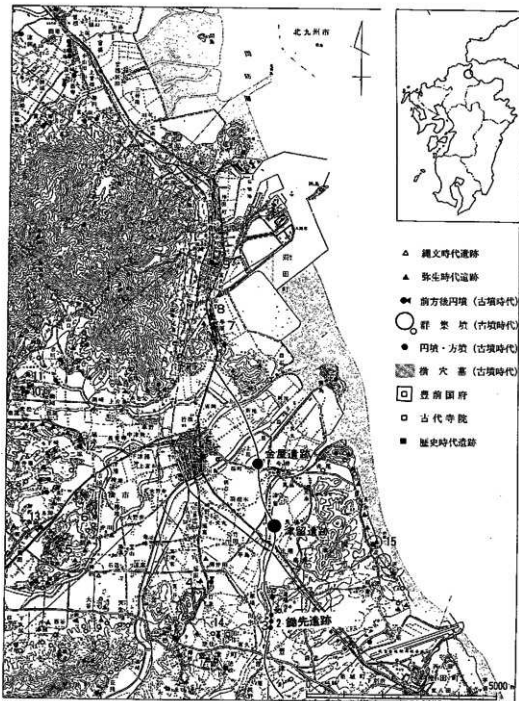
豊津には、古代に国府や園分寺・園分尼寺が造営され、豊前国の中心地区がこの祇川流域である。中世以後、河口地区には沖積地が広がり、今井で代表される港町が開かれ、当該地区は普通の、農村村落を形成したと考えられる。その流れは現在までいたっているが、椎田道路の建設によって、周辺部は完全にさまがわりしていつている。

註

註1 『角川日本地名大辞典 40 福岡県』 角川書店 1988

註2 副島邦弘「金屋遺跡」「行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集 1992

註3 副島邦弘「津留遺跡」「行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1991



第2図 鶴先遺跡の位置と周辺主要遺跡 (1/50,000)

- | | | |
|------------|------------|-------------|
| 1. 徳永居尾敷遺跡 | 6. 前田山遺跡 | 11. 大丸古墳 |
| 2. 鶴先遺跡 | 7. 御所山古墳 | 12. ヒツノクワ古墳 |
| 3. 徳永川の上遺跡 | 8. 香塚古墳 | 13. 庄屋塚古墳 |
| 4. 竹老遺跡 | 9. 石塚山古墳 | 14. 惣社八幡古墳 |
| 5. 下柳田遺跡 | 10. 徳永丸山古墳 | 15. 石並古墳 |

III. 発掘調査の記録

(1) 発掘調査の概要 (第3～6図、図版12)

当該遺跡は、平成元年度に1・2・3区を平成2年度、いわゆる果願寺の寺域を0区として、2ヶ年をかけて調査を行った。

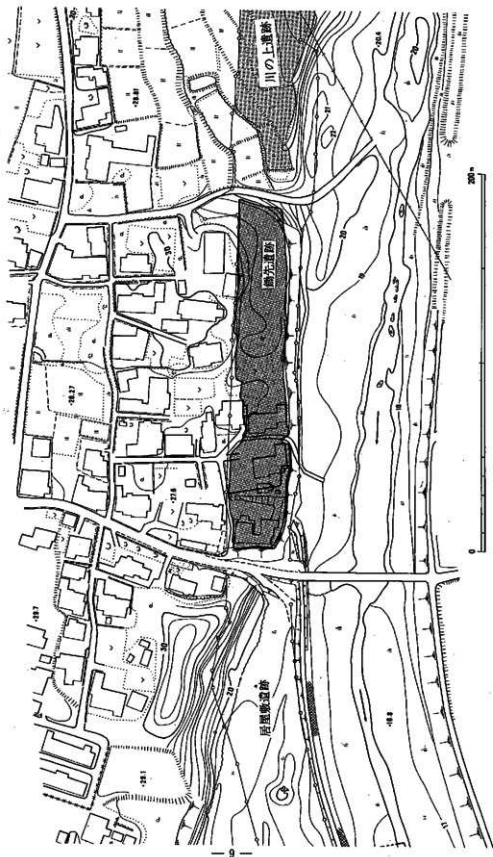
当該地は、椎川道路の第3地点で全体が上がっていたため、地籍は大字徳永字居屋敷と字サギ(鋤先)となっている。

地区では、3区が字ササギ(鋤先)で、0・1・2区は字居屋敷にはいる。

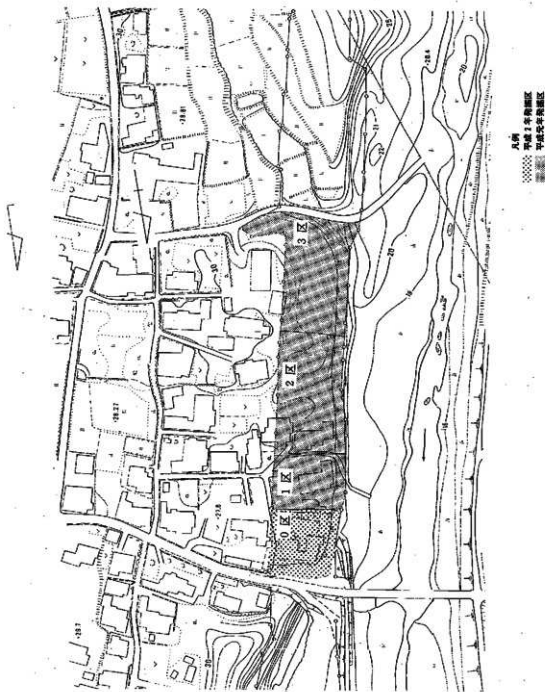
しかしながら、遺構の中心は3区が中心であるため、遺跡の名称を字名をとって鋤先遺跡と称することとした。これは、第2地点が0区と道をはさんだ地区で、横穴群と竈跡(須恵器)がある居屋敷遺跡として上がっていたためである。

平成元年に調査された分(1・2・3区)から検出された遺構は、

1区	土倉	1	(近世)
	土塙	6	(近世)
	井戸	1	(近世)
	池状遺構		(近世)
	溜舟遺構		(近世)
	柱穴群		(近世)
2区	先土器		
	土塙・柱穴		(弥生時代終末期)
	住居跡	2	(古墳時代初頭)
	土塁		(近世 江戸後半 字境)
	建物	1	(大正期のものか)
	道路遺構		(近世・近代)
	溝状遺構	10	(近代 大正期)
3区	先土器・縄文期遺物		
	住居跡	1	(弥生時代終末)
	古墳	7	(高塚式のもの 古墳時代後期)



第3図 備前遺跡周辺地形図 (1/2,000)



第4图 鲜风道居民区配置图 (1/2,000)

土壇墓	1 + α	(古墳時代後期)
土倉	5	(歴史時代中世)
土壇墓	13	(歴史時代中世)
溝状遺構	6	(古墳時代～中世まで)
柱穴	多数	

平成2年に調査された果願寺分(0区)から検出された遺構は、

0区	落し穴遺構	6	(縄文時代)
	横穴墓	4	(古墳時代後期)
	溝状遺構	1	(弥生時代～古墳)
	土倉	1	(中世期)
	井戸	1	(近世)
	カマド遺構	1	
	墓 地	95基	(近世 江戸中～近代 大正期)
	経 塚	2基	(一字一石経)

近代基礎(果願寺)

以上が、検出された遺構の主要なものである。一口に言えば、古墳時代の高塚と横穴墓と江戸後半の墓地群としてまとめることができる。

以下、項を新ためて説明を付加する。1・2・3区、そして0区とする。

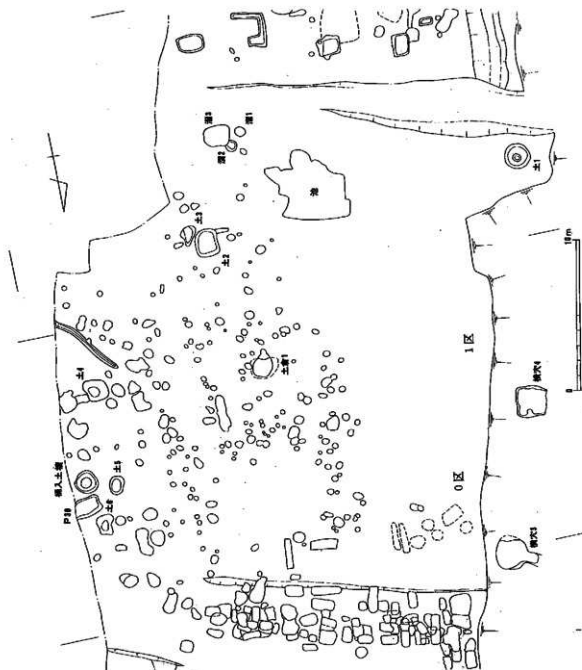


图7 商代遗址1区清理平面图(1/250)

(2) 1区の遺構と遺物 (第7~11図、図版3~8)

旧果願寺の南側で、南側に小径をはさんだ900mについてを1区とし、第6図の様に表示す。表土層は、現代の基礎等によって、混乱が全体にはいつている。家が建てられた部分は完全に破壊されていた。母屋と倉庫風の小屋とが東位を入口とし、川崖面ぎりぎりに建てられている。第3図は調査前の地形図で、第7図は発掘調査の遺構配置図である。これから見ると検出された遺構は東側の空間部分である。東北端部に土塙・井戸状遺構、南側の中央部に池・溜弁状の遺構・柱穴等が検出されている。主に近代の遺構が中心である。建物等を考えると、明治期後半の建物2棟分が柱穴等を中心に考えることができる。柱穴の埋土の土層等からである。この中に、ほぼ中央部分に土倉1区-1号が検出されている。出土遺物は中世の火舎である。

土倉1区-1号 (第7.59図、図版4)

平面形は不整形を呈し、120cm×150cmで、深さ100cm前後計測する。断面は、東側はほぼ直に落ち、西側は内傾しながら袋状を呈している。いわゆる地下式土倉となるもので、3区の地下式土倉と同じ型態である。

出土遺物 (第59図 ①・②)

①・②は覆土の下層から出土したもので、瓦質の火舎である。①は胎土に3mm以下の砂粒を多く含み、色調は灰茶色から黄味おびた茶褐色で、復原底径31.0cmで、よく使用されたものと考えられる。②は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色から黒味をおびた茶褐色を呈し、復原底径は34.2cmで、内面に煤が付着している。焼成は両者とも良好である。

土 塙 (第7図、図版4~6)

1号土塙 (第7図、図版4)

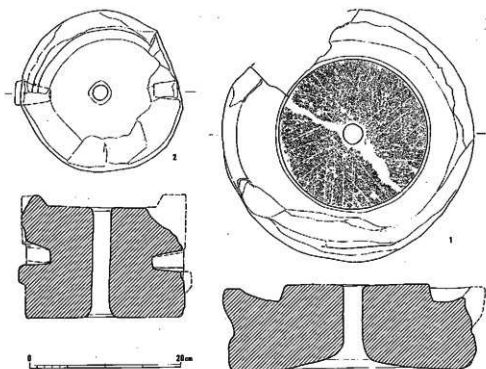
両端の崖面ぎりぎりにあるもので、平面形は円形で、底面の中央部に径30~40cm、深さ32cm柱穴1個をもっているもので、内法は径1m40cmの円形で深さ40cmを計る。断面は摺鉢状を呈するもので、底面も平面形も円形を呈し直径120cmである。

出土遺物 (第11図 ①、図版8)

覆土中から出土したもので、近世・近代の陶磁器の破片が検出された。

①は陶器の底部破片である。小盞の茶碗で胎土に雲母片を含み、漉れた精良な粘土を使用し、色調は黄褐色で、釉は土灰釉である。濃茶色を呈している。焼成は良好である。高台径4.15cm、残高台高1.1cm。

②は磁器の茶碗で、口径10.6cm、底径4.4cm、器高5.0cm、胎土は精良な粘土を使用し、



第8図 1区5号土壌出土遺物実測図 (1/5)

色調は灰色で、釉調は黄味をおびた白釉である。焼成は良好である。③は磁器の染付の向付である。胎土は精良なる粘土を使用し、色調は灰色を呈する。口径10.8cm、残高は7.3cmである。④は磁器の向付である。胎土は精良なる粘土を使用し、色調は灰白色を呈し、釉調は透明釉である。焼成は良好で、見込みにビン跡が残っている。復原口径9.2cm、器高2.0cm、底径は4.0cmで、上手物である。

2号土壌 (第7図、図版3)

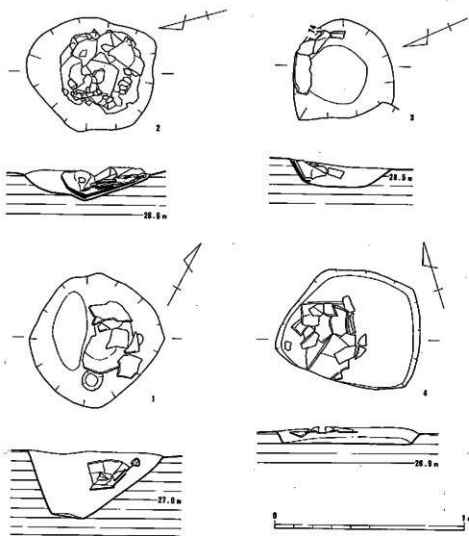
中央より東に、平面形は隅丸方形で150cm×130cm、深さ92cmを計る。

3号土壌 (第7図、図版5)

2号土壌の東にあって、平面形は不整形を呈し、110cm×50cm、深さ85cmを計る。河原石を底面に敷石されている。

4号土壌 (第7図、図版5)

東北部の東に位置し、平面形は隅丸方形を呈し、120cm×120cmで、深さ162cmを計る。底面形は不整形を呈し、井戸として使用されたものである。覆土中より陶磁器類破片が出土している。



第9図 1・2区発掘遺土坑実測図 (1/20)

出土遺物 (第11図 ⑤-⑧、図版8)

覆土中から出土したもので、井戸として機能が終了した際に廃棄されたもので、陶磁器類が主体で、子供が遊んだと思われるオハジキが検出されている。⑤は磁器の染付の向付で、口径9.4cm、底径3.9cm、器高2.6cmで、胎土は精良なる粘土を使用し、釉調は透明釉で、色調は乳白色である。見込みの部分は重ね焼のため、釉のかき取りがなされている。⑥は筒形のもので、染付の蓋物と思われる。胎土には精良なる粘土を使用し、色調は灰白質のもので、釉調は透明釉で、復原口径は10.8cm、底径は11.0cm、器高6.8cmで、上手物である。⑦は落し蓋付のもの

で、胎土には精良な粘土を使用し、色調は薄茶色で、釉調は透明釉である。焼成は良好で、器面に非常に細い貫入がはいっている。⑧は御弾（オハシキ）で、材質はガラス製で、表にはじゃん拳のはさみ形を表示している。径は15.0～16.5mm、厚さ0.20～0.35mmである。

5号土壌（第7図、図版6）

東北端にあって、平面形は楕円形を呈し120cm×80cmで、深さ31cmを計る。家の基礎として使用されたもので、石臼2個が敷石とされていた。

出土遺物（第8図、図版6）

石臼（①・②） ①は粉挽き臼の下臼で、目は5分画のものである。火を受けて黒変している。石材は熔結凝灰岩である。胴部に固定するため凹を有している。使い込まれたものである。②は上臼で、側方打込みの挽き臼で、石材は熔結凝灰岩で、赤味をおびている。目は6分画である。いわゆる小形のもので、茶臼にでもよいものである。重量は①12kg、②9.5kgである。

粉食にとって欠くことのできない道具で、目刻んだ2個の円形の石を重ね合わせ、上臼を回転させながら、上臼に設けた孔から穀粒を少しずつ入れて粉碎し粉とするもので、一軒に一組はなくてはならない道具である。

土師器（第11図⑨、図版8）

⑨は、土師器の器台で、復原口径は25.1cm、底径20.8cm、器高8.38cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は良好、胴部に2個対の穿孔をもっている。時期的には、井戸以前のもので古墳期の所産である。

Pit 26号（第7図、図版3）

中央部より西に、平面形は不整形を呈し、直径が30cm前後で、深さ25cmのもので、覆土中より摺鉢が出土している。

出土遺物（第11図⑩、図版8）

摺鉢（⑩） 覆土中から出土した破片で、復原口径29.6cm、胎土に細砂を含み、色調は茶褐色、焼成は良好で、楕円単位数は7本で、小形なもので一般家庭用である。

竈埋置土壌（第9図、図版7）

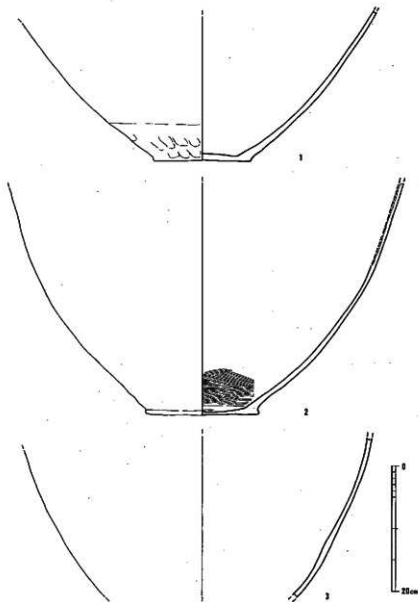
トイレと思われるものについては溜（たまり）という記号を使用した。1区と2区にこれがある。

溜1（第9図、図版7）

平面形は不整形を呈し、直径70cmで、深さ35cmで竈の底部の部分だけが検出された。

出土遺物（第10図、図版8）

竈（①） 大形竈の底部である。胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色、焼成は良好で、



第10図 1・2区遺物(大甕)実測図(1/6)

底径は15.5cmである。器面の調整はナデで指圧痕が残る。所謂、尿甕である。

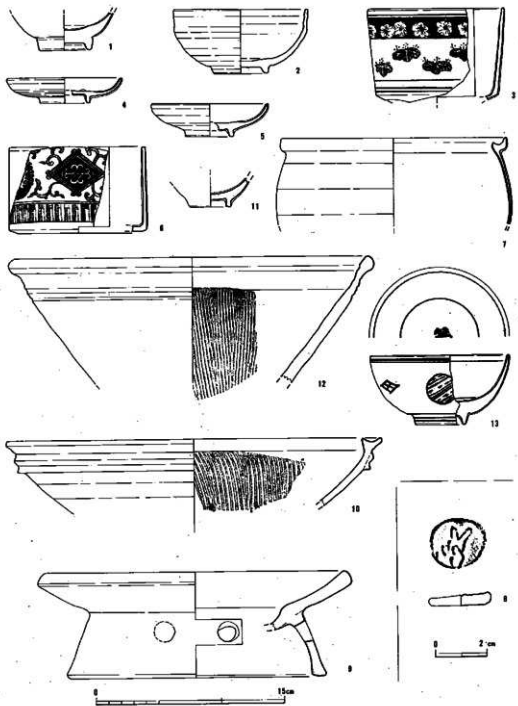
溜2 (第9図、図版7)

平面形は不整形円形をなすもので、60~70cmで、深さ10~15cmで、底部破片のみ検出されたものである。溜1の北側、溜3の西横である。

出土遺物 (第10図、図版8)

甕② 大形甕の底部である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色である。焼成は良好で、底径17.85cmである。器面の調整はナデで内面の底部付近にハケメが残っている。

溜3 (第10図、図版7)



第11图 1区表土·Pit出土遗物(近代)实测图(1/3)

平面形は隅丸方形を呈し、床に河原石を敷いたもので、180cm×150cm、深さ120cmで、P-27号をあてている。トイレ遺構である時期は近代のものである。溜1・溜2とセットになるもので、大便の方の後架である。

2 区溜1 (第12図、図版9)

P-13の東側にあるもので、平面形が円形をなして、直径50cmで深さ10cm、底部破片しか残っていないかった。

出土遺物 (第10図)

甕 (③) 大形甕の底部である。胎土に細粒砂を多く含み、色調は灰色である。焼成は良で、器面の調整は、内面がナデで外面マメツ気味で不明である。

以上がトイレ遺構の説明であるが、この大甕は小使用の尿甕である。近世・近代にかけて、尿甕と糞尿甕とは若干相違するところもあるが、この豊前地方ではどうだったかは民俗例を調べるわけであるが、今回はそれまで手がまわらず今後の宿題としたい。ただ、肥前地方の山村では、尿甕は家の前面の納屋横にある。大便とは別にである。後架は内にある。この後架には大・小便はいっしょになる。

表土 (第11図①~③、図版8)

近世・近代の陶磁器を中心に出土しているが、ここでは、代表的なものを上げている。

①は小振茶碗の底部破片、胎土には精良なる粘土を使用し、色調は黄味をおびた灰色を呈し、釉調は緑に近い色で発色している。器面には貫入がはいっている。②は摺鉢で、復原口径29.0cmで、胎土に細粒砂を多く含み、内面の櫛目の数は7本が一単位となっている。焼成は良好で、一般家庭用品である。③は染付の茶碗で、いわゆる「くらわんか手」のものである。復原口径11cm、器高5.5cm、復原高台径4cm、高台高0.8cmで、胎土には精良なる粘土を使用し、焼成は良好で、色調は灰白色で、釉は透明釉で、日常雑器である。文様は簡略化された○◇等をアレンジしている。

櫛 (図版8表土) セルロイド製の整髪具、髪を束ねた上に差すもの。

(3) 2区の遺構と遺物 (第12~39図、図版9~28)

北は小径から南は土塁線までの1.400㎡を2区とした。出土遺構については、メインの字境の土塁の築築年代が問題である。他は近代の家跡等であった。発掘調査で検出した遺構は前述の(1)の概要の通りである。

小径の南側に一世代前家屋の土台跡が検出している。家の基礎に石臼を入れて土台としている。これが特長である。家屋自体は明治末期から、大正のはじめに建築されたものである。建てかえられて、現代の建物になっている。現代のものは基礎にはセメントを使用している。

基盤面には弥生時代後期の遺構(住居跡・柱穴・土塙等)が残っていた。土塁についても、発掘調査によって旧地表から盛土の中から各時代の遺物が混入して出土しているため、近世の後期の所産と考えられることとなった。

住居跡 (第13図、図版11・28)

2区では2軒の住居跡が出土している。西寄りに検出しているもので、2区1号住は崖面ぎりぎり半ばは崖にカットされている。2区2号住はその東側にあって、1/3は崖で切られている。

2区1号住居跡 (第13図③、図版11)

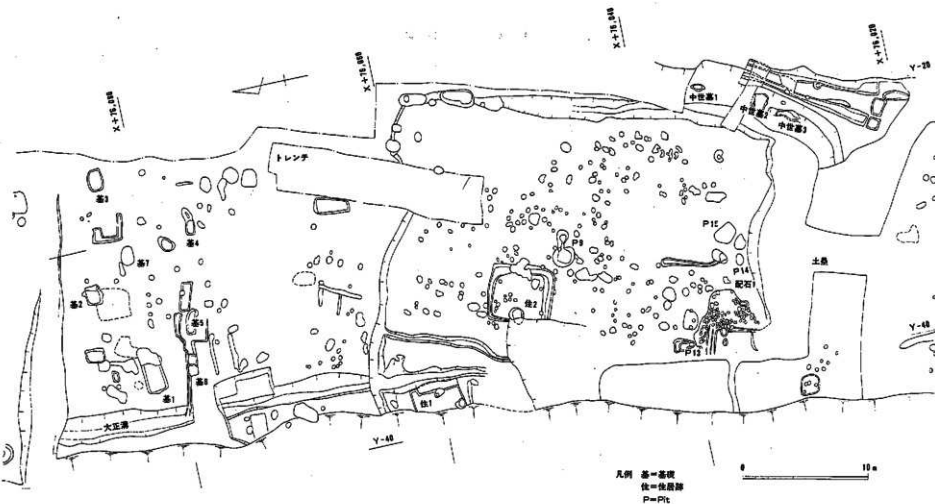
半分に崖面でカットされているもので、平面形は長方形を呈し250cm×180+αcm、東側にベッドを有する住居跡である。主柱穴は2本柱であると思われるが、東側1本がベッド遺構の中央分に見られる。南辺のほぼ中央部に貯蔵穴と思われる土塙を有している。床面の状態はバリバリの状態の床であった。東側には、南位方向への小溝が流れている。住居跡の壁高は北側で最大40cmを計測し、南側で12cmを計測する。住居跡の時期は遺物等から古墳期に所産する。

出土遺物 (第21図①、図版28-①)

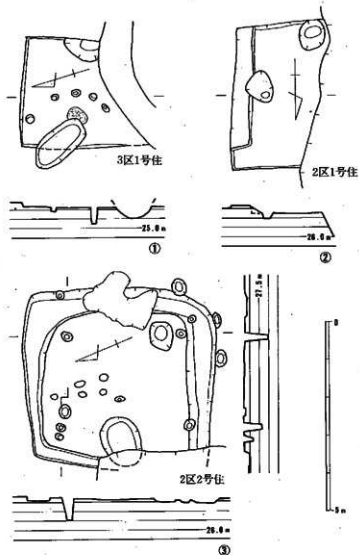
杯(第21図①)南側の柱穴P2より、須恵器の杯の破片が検出されている。胎土に細粒砂を含み精良なる粘土を使用し、色調は灰白色で焼成は良好である。器面の調整は外面はヨコナア、下部は回転ヘラケズリで、内面はナデ仕上げである。

2区2号住居跡 (第13図、図版11)

平面形は正方形を呈し、350cm×340cmで4本柱のもので東側中央部辺に焼土がみられるが、周囲に擾乱が走っている。壁高は10cm前後で、周溝が一周している。溝の幅は東側で40cm、西側で10cm内外である。1/3が西側辺が欠落している。一応ここでは4本柱として組んでみた。



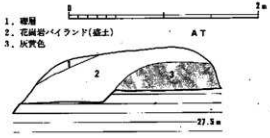
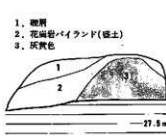
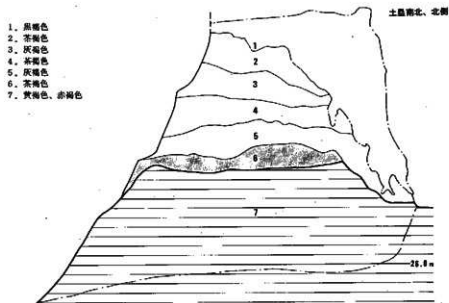
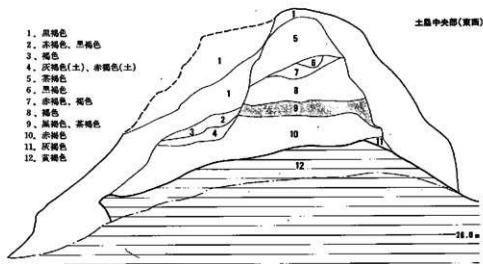
第12図 備前道跡2区遺構配置図 (1/300)



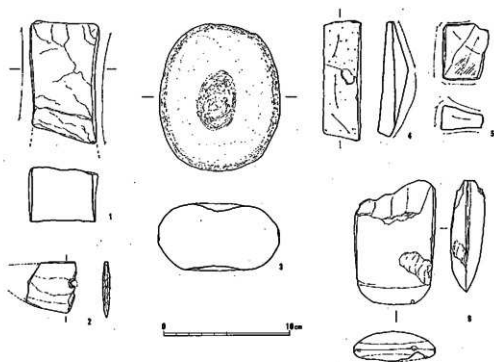
第13図 2区・3区住居跡実測図(1/100)

出土遺物 (第15図 ⑥、図版25)

石斧 (第15図⑥) 周溝中より、磨製石斧が出土している。⑥は石材を蛇紋岩製で、中央部から破損しているもので、よく使用されたものである。



第14図 2区土層断面土層図(1/40)



第15図 2区土壘等出土遺物(石器)実測図(1/3)

土 壘 (第12図、図版12~16)

東側は一段高くなって、丘陵状になっている。その端部に崖面に直角に3m幅で土壘をつくって、高さ2m強を計測する。東西方向へ、そして崖面に至って直角に北側に崖面に沿う様に60m前後が残っている。規模的にみると、築壘する土量は、2区・3区全体から取って盛土したものである。これには、3区の古墳群と2区の表土を20cm~30cm内外カットしている。それは土壘下の遺構をみれば理解できる。

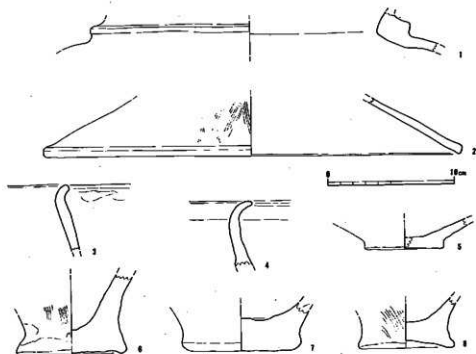
層位 (第14図、図版15)

基本になる層は旧地表である。黒味をおびた灰黄色砂質土で、網目の部分がそれである。この土壘から検出された遺物は一部に弥生・土師器、中世・近世の遺物が混入している。土壘の築壘年代は、近世後期に結論付けられる。土壘の基盤面直上には弥生後期の遺構面となっている。

出土遺物 (第15~19図、図版25)

土壘中より出土した遺物は石器(砥石・石包丁・石鏃等)と土器・陶磁器・瓦類であった。

石器 (第15図、図版25)



第16図 2区土屋出土遺物(土器)実測図1(1/3)

砥石 (第15図 ①・④・⑤)

盛土の表土下から出土したもので、①は天草石の中砥である。④も砂岩質の仕上げ砥、⑤は粘板岩製の仕上げ砥である。

石包丁 (第15図 ②)

立岩製の輝緑凝灰岩で、基部の破片。両面穿孔の紐通し孔である。

磨石 (第15図 ③)

安山岩製で充分に使用されたものである。叩き石としても使用されている。

石鎌 (第37図 ④・⑤)

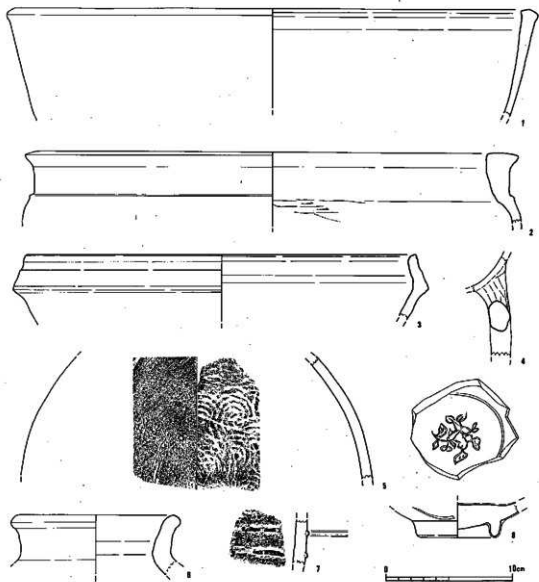
両者とも三角鎌である。④は姫島産の黒曜石である。断面はD字形である。⑤も姫島産の黒曜石で、先端部が欠損している。剥離は丁寧に行われている。重量0.7～2gである。

土器 (第16～18図)

中世期のものを中心と近世のものをまとめてみた。一部には、弥生・土師器小破片も含まれていた。

中世期遺物 (第17図)

土師質のものと瓦質のものがあるが両者はこの時期のもので、その他に陶器及び中国製青



第17図 2区土屋出土遺物(中世期)実測図2(1/3)

磁が見られる。

土師質土器 (第17図 ①・⑤)

①は火舎として使用されたもので、復原口径は40.8cm、胎土に細粒砂を含み、色調は黒味をおびた茶褐色で、焼成は良で、器面の調整はナア仕上げである。⑤は壺形土器の胴部破片で、

瓦質土器の軟質のものである。器面の調整は表が格子のタタキ、裏面は青海波である。

瓦質土器 (第17図 ②・③・④・⑦)

②は火舎として使用される大型の変形土器で、胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色を呈している。焼成は良好で、器面の調整はヨコナデが中心である。③は中形が甕形の口縁部破片で、胎土には精良の粘土を使用し、色調は灰青色を呈し、焼成は良好で、器面の調整はヨコナデである。④は三足の鼎の脚部で、底部にあたる部分は煤の付着がみられる。胎土には細粒砂を含み、色調は灰黒色である。焼成は良好で、器面の調整は脚部であるためケズリを入れている。⑦は菊花文入りの火舎の破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は黒味をおびた灰色で、2条の細い凸帯をもつものである。焼成は良である。

陶器 (第17図 ⑥)

小形甕の口縁破片である。胎土には砂粒を多く含み、表面には灰釉が淡灰黒発色している。いわゆる備前産のものか、素地は茶褐色である。焼成は良好で、器面の調整はヨコナデ仕上げである。

磁器 (第17図 ⑧)

中国の龍泉系の青磁の茶碗である。見込みに芙蓉の文様を入れている。発色はウグイス色に近い草色で、胎土に精良なる粘土を使用し、焼成は良好で、釉も厚くかかっている。

陶磁器 (第18図)

日常雑器として使用されている近世(摺鉢・茶碗・仏具類)のものである。

摺鉢 (第18図 ①~⑧)

中世のものと(③・⑥)、他は近世のものである。③は櫛目の単位は4本で、口縁部の破片である。胎土に細粒砂を多く含み、色調は黒茶褐色で、焼成は良好である。⑥は胎土に細砂を含み、色調は青灰色から茶褐色を呈し、焼成は良好である。①~⑧は近世・近代のもので、櫛目の単位が7本・8本・9本の三種類ある。⑦・⑧は7本のもの、①は8本のもの、⑤が9本のものである。⑤以下は底部で、①~④までは口縁部破片である。胎土は細粒砂を多く含み、色調は茶褐色である。口径は25~28cm内外もの口唇部の受け口に特長をもっている。

仏具 (第18図 ⑨・⑩)

⑨香炉でのもので、復原口径は10.4cm、器高6.65cm、復原高台径4.8cm、胎土は粗い粘土を使用し、素地は茶灰色で、釉調は緑味をおびた灰色である。全体に貫入がはいっている。表面には松木文が描かれている。焼成は良好である。⑩は御仏飯入れて、口径6.6cm、器高4.3cm、底径3.4cmで、胎土に精良なる粘土を使用し、色調は灰茶色、釉調は乳白色である。焼成は良好で、小形のものである。

茶碗 (第18図 ①)

底部の破片で高台径は5.05cmで、いわゆる上野系のパケメで、釉は透明釉である。全体に貫入がはいっている。胎土は精良なる粘土を使用し、素地は灰茶色を呈し、焼成は良好である。

瓦 (第19図、図版25)

表面直下に、丸瓦が2点出土していた。

丸瓦 (第19図 ①・②) ①は胎土に精良なる粘土を使用し、色調は木褐色で、内面は布目をもち、側辺部の切り込みは歪んでいる。焼成は良で、軟質である。②は①よりもあまい焼成である。胎土には精良なる粘土を使用し、内面は布目である。色調は黄白色を呈している。近世の瓦である。

以上のことから、土塁については近世後半に築営されたことが、出土遺物等で理解できる。

土塁下遺構 (第20図、図版16)

土塁の南西端には第131図の様に人頭大の河原石が幅2m、高さ1.50cmの石が盛られていた。その上に土を盛って築営したものである。

このことは、この人頭大を中心とする河原石は、3区古墳の石室の石材と考えられる。興味深い一例である。

その下に弥生終末期の遺構が検出されている。土塁状に上がった状態で見られる。

これは、周辺部の表土層をカットして、盛土として使用しているものである。

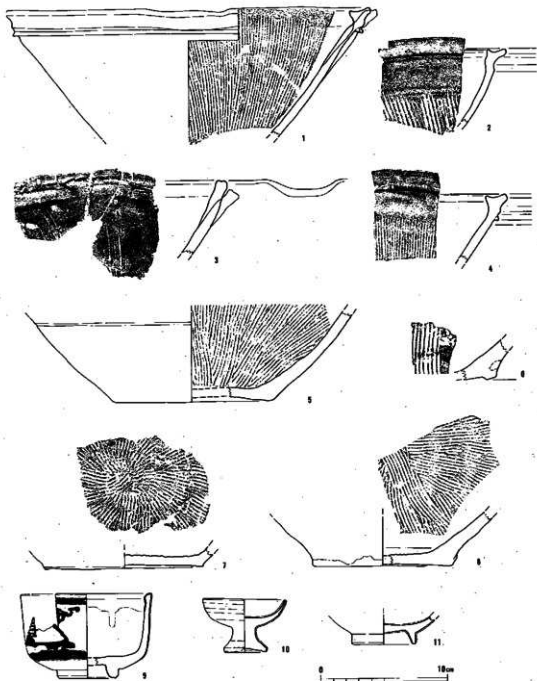
遺構は方形の土壇と柱穴であった。

土 壇 (第20図)

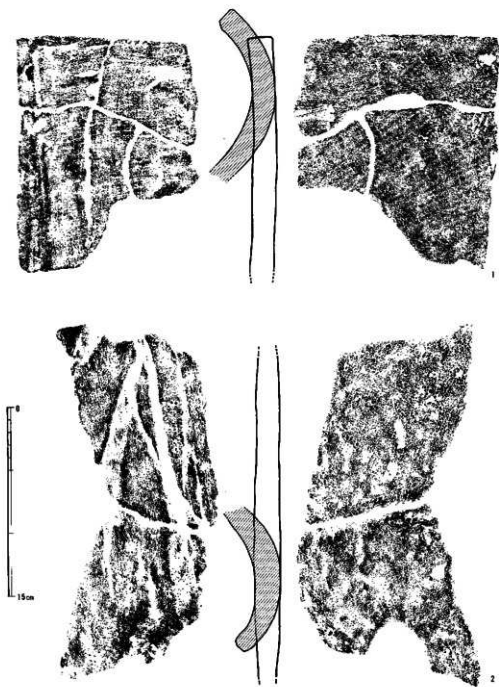
平面形は不整形を呈し、150cm×140cm前後で、深さは10cmである。これに伴う出土遺物はみられなかった。覆土中より弥生後期のものが中心に出土している。

出土遺物 (第16図)

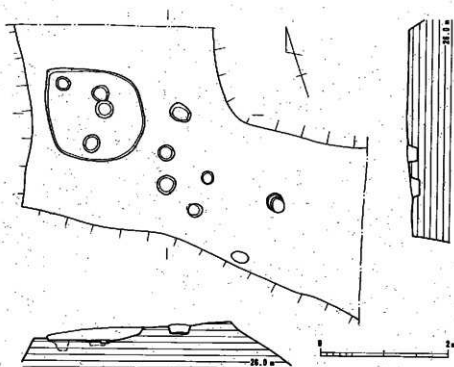
土塁下のもの中心に集めた。①中形甕の破片である。胎土に砂粒を含み、色調は黄茶褐色、焼成は良好である。頸部に凸帯を有している。器面の調整は磨滅して不明。②は笠蓋形のもので、胎土に細砂を含み、色調は褐色で、焼成は良好である。③は小形甕の口縁部で、胎土に砂粒を多く含み、色調は黒灰色、焼成は良好である。④は口縁部破片で、砂粒を多く含み、色調は黄茶褐色で、器面の調整は、口唇部はヨコナアがみられ、他は器面が荒れて不明。⑤は壺形土器の底部破片で、復原底径は6.2cm、胎土に細粒砂を含み、色調は黒色で、焼成は良好、底部に黒斑をもち、器面の調整は磨滅して不明。⑥も壺形土器の底部で直径8.8cm、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黒茶褐色から赤褐色を呈し、二次的に火勢を受けている。焼成は良好である。



第18图 2区土垠等出土遗物(陶磁器类)实测图3(1/3)



第19图 2区土窟出土遺物(瓦類)実測図4(1/3)



第20図 2区土層下遺構実測図(1/60)

⑦は底部破片で、復原底径は9.4cmで、胎上に砂を多く含み、色調は赤褐色である。焼成は良で、器面調整は不明である。⑧底径7.6cm、若干上げ底気味で、胎土に砂粒を多く含み、色調は赤褐色で、二次的に火を受けている。焼成は良で、器面の調整はハケメ仕上げである。

土層の盛土からもこの期土器の破片も出土している。

Pit 遺構 (第12図、図版18)

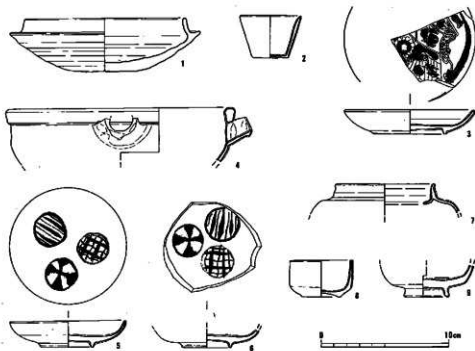
2区のPit遺構については第12図の様に多くの柱穴・Pitがある。その中で遺物の出土したものについて説明を付加する。

Pit 5号 (第12図、図版18)

Pit 9号の横にあって、平面形は円形のもので、直径が50cm前後である。深さ20cmで、中からキセルの吸口が出土している。

出土遺物 (第22図)

真鍮製で、7.5cmで、径が1cm、一部にラオ竹が残っている。近代のもので、大正期か。



第21図 2区Pit出土遺物実測図(1/3)

陶磁器 (第21図、図版28)

②は猪子口の磁器で復原口径4.7cm、器高3.35cm、胎土に精良なる粘土を使用し、色調は白色で、釉調は透明釉をかけている。焼成は良好。③は肥前系の下手物の赤絵の小皿である。内面には印判に彩色されている。赤・黄・緑・金等である。胎土は精良なる粘土を使用し、釉調は透明釉である。焼成は良好。復原口径は10.3cmである。



第22図 2区Pit 5号出土遺物実測図(1/2)

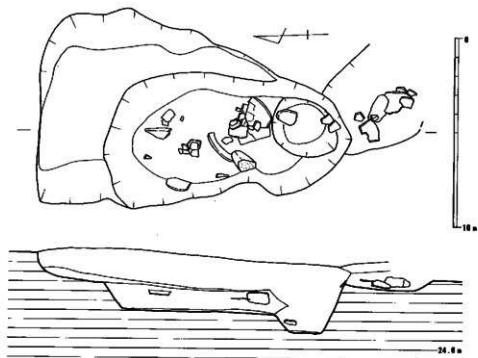
Pit 13号 (第23図、図版18)

土塁西側の横にあって、平面形は不整楕円形(160cm×100cm)で、中央部に柱穴をもち、壁は2段階状に上がっている。弥生中期後半のもの(甕・甍形土器)を中心に出土している。この遺構の時期は弥生中期後半である。

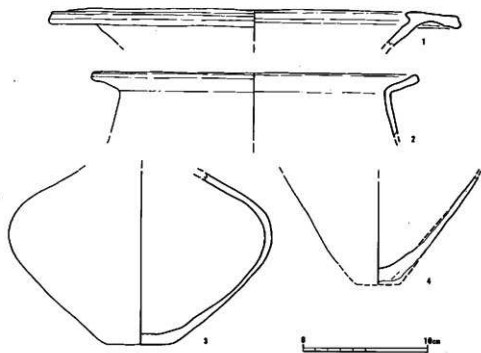
出土遺物 (第24図)

若干浮いた状態で出土したもので、弥生中期後半の土器が検出されている。

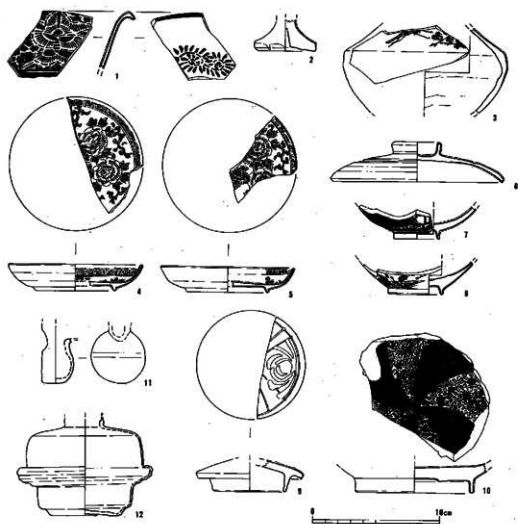
①は大型甕形土器の口縁部破片で、鋤先口縁をなしているもので、復原口径は33.2cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は黒灰色を呈し、焼成は良好である。器面の調整はヨコナデを中心に仕



第23图 2区Pit13号遺構実測図(1/20)



第24图 2区Pit13号出土遺物実測図(1/3)



第25図 2区4号土壇出土遺物実測図 (1/3)

上げられている。②は菱形土器の口縁部破片で、復原口径は25.9cmで、口縁部は「く」の字状をなし、胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色で、焼成は良で、器面の調整は頸部にヨコナアが見える。③は壺形土器の下半部である。底径は5.6cmで、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黒味をおびた茶褐色で、黒斑が見られる。焼成は良である。④は菱形土器の底部、胎土に細粒砂を含み、赤味をおびた黄白色で、2次的に火を受けている。器面の調整は磨滅気味で不明である。

土鍾 (第36図 ⑥)

胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色で、重量58である。中央部に指痕が残っている。

Pit 17号 (第12図、図版9)

平面形は長方形のもので、大正期の家屋の基礎である。覆土中から片口の破片が出土している。

出土遺物 (第21図④)

陶器の片口で、胎土に精良なる粘土を使用し、色調は灰色で、釉調は透明釉で焼成は良好で、復原口径は18cmである。

Pit 19号 (第12図、図版9)

西端部にある家屋の基礎になるもので、平面形は長方形をなしている。覆土中より近代陶磁器が出土している。

出土遺物 (第21図、図版28)

⑤・⑥は磁器の小皿、⑦は土瓶、⑧は陶器の猪口子である。

小皿 (第21図 ⑤・⑥)

同じ手のもので、いわゆる肥前系の染付である。直径も、器高を同じである。焼きは⑤の方が良く、⑥は見込みにハリピン痕が残っている。胎土は精良なる粘土使用し、色調は灰青色で、釉調は染付である。口径9.2cm、底径4.1~4.3cm、器高2.1cmで、部分的に釉溜がある。見込みの文様は☉・⊕・⊗を組んでいる。焼成は良好である。

土瓶 (第21図 ⑦)

口縁部の破片で胎土は精良なる粘土を使用し、色調は乳白色で、釉調は透明釉である。復原口径は7.8cm。

猪口 (第21図 ⑧)

陶器で、小振りのものである。口径5.0cm、底径3.2cm、器高2.9である。胎土に細粒砂を含み、色調は茶色で、釉調は灰白釉である。

Pit 28号 (第12図、図版9)

東北端部に位置するもので、平面形(100cm×50cm)は方形を呈するもので、深さ20cmを計測する。

出土遺物 (第21図 ⑨)

覆土中から出土したもので、茶碗の底部破片である。胎土には精良なる粘土を使用し、色調は乳白色で、釉調は透明釉である。焼成は良好で復原底径3.25cmを計る。

土壇4号 (第12図、図版9)

試掘のトレンテの横にある平面形が方形を呈するもので、200cm×100cmで、深さ52cmを計

る。家屋の基礎となったものと考えられる土壌である。その中に廃物を入れたものである。出土遺物はガラス製品、陶磁器等である。

出土遺物 (第25図、図版28)

覆土中から検出したもので、磁器物が中心に出土したものである。ガラス製品として、インク瓶とランプ瓶が出土している。

陶磁器 (第25図、図版28)

日常雑器として使用されているもので、染付の鉢物・小皿・蓋物・大皿等が検出されている。①・④・⑤は印判手のものである。①は鉢物で④・⑤は見込みにバラの文様をアレンジしている。同じ手の小皿である。⑤は口唇部が赤黄色に彩色している。⑥にはない。②は仏具で、灯明台の脚部である。胎土には精良なる粘土を使用し、釉は乳白色で、底部に釘差し孔がある。焼成は良好である。③は燗徳利の上半部の破片で、直筒ができる形態のもので、胎土に精良なる粘土を使用し、色調は淡青味の白色で、釉調は透明釉、素地は呉須で、吉祥図(鶴・亀・松・竹・梅)文様が印判されている。④・⑤は同じ種類の印判手の小皿である。内面に牡丹文様をスタンプしている。胎土には精良された粘土を使用し、色調は白の素地に黒味がかかった緑色で、焼成は良好で、釉調は透明釉である。見込みにハリビン跡が残っている。五枚一組の皿である。⑥土物(陶器)の小鍋の蓋である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄味をおびた白色で、焼成は良好、釉調は透明釉である。⑦・⑧は小振の磁器物の染付茶碗である。両者とも呉須にて山水面を描いている。胎土には精良の粘土を使用し、色調は白青色をなし、釉調は透明釉を掛けている。見込みを⑧は釉を掻き取っている。両者とも焼成は良好である。

⑨は土物(陶器)の茶瓶の落し蓋である。胎土には細粒砂を含み、色調は赤味がかかった灰色で、釉は現代釉の緑がかかった灰色で、白で菊花文を浮彫させている。焼成は良好である。

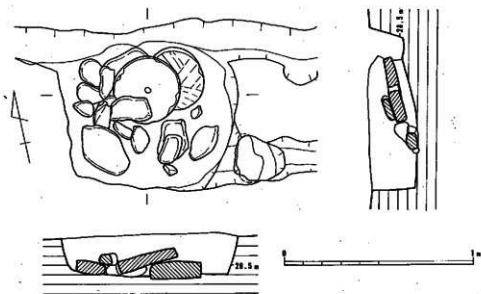
⑩は磁器の大皿の底部破片で、胎土には精良の粘土を使用し、色調は灰青色で、素地に呉須で風車と笠松をアレンジしている。日常品として使用されたものである。季節ごとの祭日には使用されたと思われる。

ガラス製品 (第21図 ⑪・⑫)

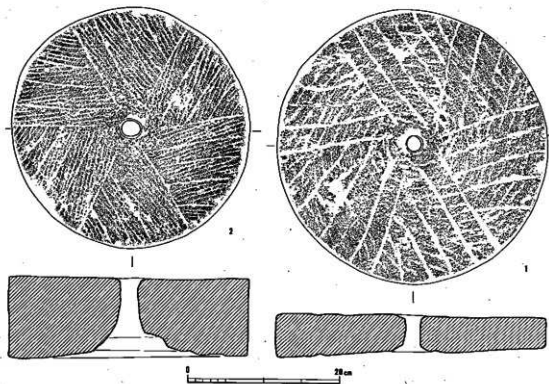
⑪はインク瓶でスタンド式のものと考えられる。⑫はランプの油瓶である。底径5.5cm、最大胴部径が10.7cmで、透明度の高いガラスである。金具の一部が残っている。1世代前の所産品である。

家屋 (第12図、図版9)

道の横に現代の建物があつたが、その基礎はコンクリート製のものであつた。それ以前の大正期の建物(家屋)の基礎として、土台に石臼を使用したものがあつた。もう1棟は南側の土



第26图 2区基础6 遗精夹测图(1/20)



第27图 2区基础6 出土遗物夹测图(1/5)

墨ぎわにたっていたと推定される。

基礎 6 (第26・27図、図版19)

西端の大正時代の溝から3m前後東の位置にあって、平面形の正方形(90cm×90cm)で、深さ20cm前後である。底面に密着する様に河原石とともに2個の石臼が入っていた。No. 2が底面に密着し、その上に半分持たせかかる様にNo. 1が出土し、その周辺部に栗石を敷いていた。家屋土台としては立派なもので、土台に石臼を入れる民俗例を聞いたことはない。

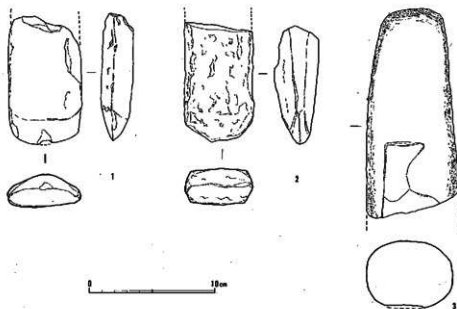
出土遺物 (第27図、図版26)

①がNo. 1で、②がNo. 2である。底面に密着した状態で検出されたもので、両者とも凝灰岩製である。①は直径35cm、厚さ約5cmで、若干左右で相違する。溝の刻目は6分画である。穿孔2cm前後を計る。重量9.8kgで手頃の重さで、よく使用されている。②は直径が31.5cm、厚さ10cmで、溝の刻目は6分画である。中心の孔は軸がづれたのが楕円形となっている。長軸は3cm、短軸は2cmである。①よりも刻目は細目である。重量は19kgである。

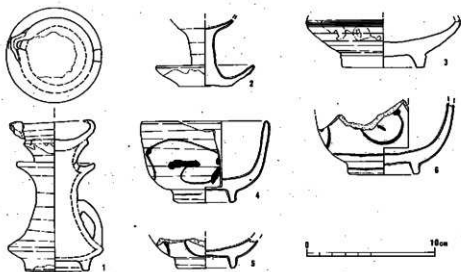
両者とも下臼で、挽き臼は一軒に一組はなくてはならないものである。

大正時代の溝 (第12図、図版21・22)

家屋の西端部に、南北方向へ幅2m、長さ35mで、土塁の手前の川へ降る小径によってカットされている。深さは南が浅く、北に行くほど深くなっている。20cm~70cmである。幅につい



第28図 2区大正時代溝出土遺物(石器)実測図1(1/3)



第29図 2区大正時代清出土遺物(陶磁器)実測図2(1/3)

でも北は広くなり、南は狭くなる。断面はU字形をなすものである。出土遺物は弥生から近代(大正期)までが混在して出土している。その中心は近代・現代にかけての陶磁器類である。一応ここでは大正時代の清として上げている。

出土遺物(第28~31図、図版26・27)

石器(石斧)・陶磁器としてまとめてみた。

石器(第28図、図版26)

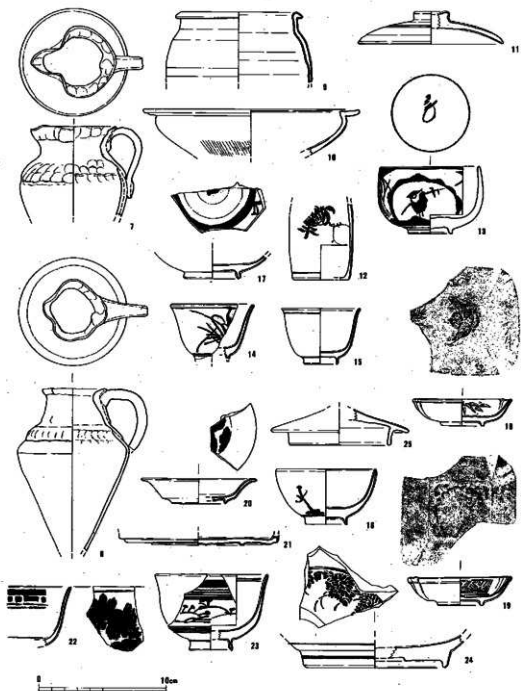
すべて石斧である。①は磨製石斧の先端部を入れた半欠品である。石材は蛇紋岩で蛤刃である。刃部が欠けている。②は打製の石斧で、風化した玄武岩を使用している。先端部から基部の半分が欠損している。磨製石斧をつくる第2工程と思われる。时期的には弥生期であろう。③は刃部が欠損したもので、基部が残っている。石材は玄武岩で、弥生時代所産の磨製石斧である。刃部は蛤刃となる。

陶磁器(第29~31図、図版27)

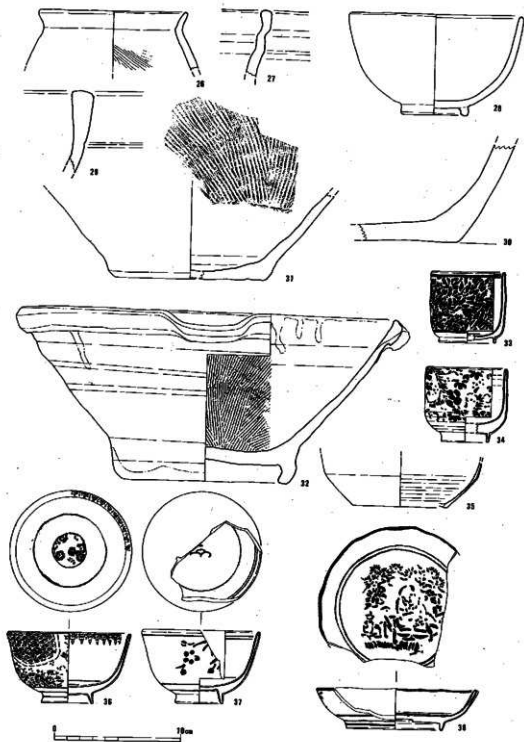
日常用の雑器類で、近世・現代の灯明具・茶碗・摺鉢・皿・小皿等が見られる。その他に中世、土師器の混入物も、組み入れている。

灯明具(第29図①・②、図版27)

①は灯明具としては立派なもので、下部に筒状の油入の瓶をもち、上部に皿を置くもので、銅辺に把手をもっている。油瓶には前と後に孔を1個づつもっている。胎土に細粒砂を多く含み、色調は淡茶で、釉は黒釉である。底径5.1cm、口径は5.8~6.7cm、器高11.8cmである。焼成は良好である。携帯用でもある。②はあんどんと一対になるもので、ともし油を入れた皿で



第30图 2区大正时代清出土遺物(陶磁器)实例图3(1/3)



第31图 2区大正时代清出土遺物(陶磁器)実測图4(1/3)

ある。胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色で、釉調は褐釉で、焼成は良好である。底径は4.2cm、受け部直径は7.8cm、上部皿は計測不可能、下部の皿より一まわり小さい。器高については7cm前後である。受皿部には煤が多く付着してよく使用されている。

①・②とも陶器である。

茶碗 (第29図 ③・④・⑤・⑥)

③は陶器の大振の茶碗である。胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色で、釉調は白色釉で、焼きは良好である。復原高台径は6.4cm、高台高さは1cmである。④・⑤・⑥は半陶半磁器の物である。④はぼてとした重さを感じるものである。胎土に細粒砂を含み、色調は灰色で、釉調は透明釉であるが、全体に貫入がはいっている。口径10.0cm、器高6.4cm、底径5.0cmである。高台内面まで掛けられている。表面に水草文が描かれている。⑤は底部破片で、復原高台径は4.9cm、高台高さは0.85cmで、胎土には細粒砂を多く含み、色調は灰緑色を呈し、釉調はねずみ志野似たもので、焼成は良好である。高台内面まで釉が掛けられている。器面全体に貫入がはいっている。表には弧線文がアレンジしている。⑥もぼてりとした重量感のある茶碗で、胎土に細粒砂を含み、色調は灰白色を呈し、釉調は青灰色に発色している。器全体に貫入がはいっている。焼成は良好である。高台内面まで、釉がかかっている。底径5.7cmで、器表面には水草文が描かれている。

花瓶 (第30図 ⑦・⑧・⑨、図版27)

⑦・⑧・⑨は陶器である。⑦・⑧は現代の花瓶で西欧の皮袋。形の壺を模したものである。器形的には同じである。⑦は口径5.7~6.7cmで、胴部最大径は8.5cmである。胎土にはよく濾された粘土を使用し、色調は茶褐色で、焼成は良好である。いわゆる素焼きに近いもの。⑧も素焼きのもので、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄土色で、焼成は良好である。口径4.7cm~5.2cm、最大胴径は8.9cmである。器面調整は内面は布目で、外はナデ仕上げである。⑦も同じ調整をおこなっている。⑦・⑧は一対になるものと考えられるもので、一輪挿しである。⑨は胎土に雲母・細粒砂を含み、復原口径は10cmで、色調は赤褐色、釉調は木灰釉を掛けたもので、発色は黄褐色に白が所々に出ている。ここでは花生・花瓶として上げておく。

土鍋 (第30図 ⑩)

小形の土鍋で、豆を炒るためのものである。胎土に細粒砂や雲母を含み、色調は黄褐色で、釉調は内面にはうろうびぎ(いわゆる瀬戸びぎ)で、外面は褐釉である。外面は一部煤が付着している。焼成は良好である。

蓋 (第30図 ⑪)

土鍋とセットになるもので、落し蓋の形態である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄味を茶色で、釉調は透明釉をかけて、全体には黄味多い緑である。器面には貫入がはいっている。復原口径は10.3cm、器高2.55cm、撮み復原径は2.7cm、撮み高は0.85cmである。現代の陶器。

徳利 (第30図⑭)

磁器のもので猪子口とセットになるものである。復原底径は4.25cmで、胎土に精良な粘土を使用し、色調は灰白色で、釉調は透明釉である。表には草木をアレンジした染付である。焼成は良好。現代のもの。

茶碗 (第30図⑬・⑭・⑮)

⑬・⑭・⑮は小振の磁器茶碗をまとめてみた。「くらわんか手」のもので、胎土には精良なる粘土を使用し、色調は灰白色で、釉調は透明釉で、呉須にて人間と草・竹を描いている。見込みには寿を略文字化している。⑬径7.8cmで若干歪んでいる。器高5.2cm、底径3.4cmである。日常雑器である。2世代前のもので、⑭は口縁部破片で、表面には略された花文様で、葉とも見えるもので、呉須の感じから新しい。⑮は⑬と同時期のもので、復原口径は8.7cm、復原高台径は3.3cmで、器高6cmである。表面には水草文が描かれている。呉須の感じは⑬と同じである。

猪子口 (第30図⑭・⑯・⑰)

徳利とセットになるもので、⑭・⑯盃と⑰ぐい飲みである。⑭・⑯は呉須の感じから現代のもので、⑰は2世代前のものである。⑭は復原口径は6.5cmで胎土に精良なる粘土を使用し、色調は灰白色で、釉調は透明釉である。器面に呉須で木賊を描いている。よくある捺柄である。⑯は復原口径6.1cm、復原底径2.5cm、器高4.4cmである。胎土、色調、釉調は⑭と同じである。器面には捺柄なしで、線を入れているのみ。⑰は製品として不良品である。復原口径は7.7cm、高台径は3.2cm、器高4.4cm、高台高0.5cm、胎土には精良なる粘土を使用し、色調は淡黄灰色で、釉調は透明釉であるが、焼成が不良のため発色がうまくいっていない。呉須の発色も今一である。器面の捺柄は梅木か、⑭・⑯より古手のものである。

小皿 (第30図⑰・⑱・⑲・㉑)

⑰～㉑は小形の皿で、向付として使用されている。㉑も中形のものである。⑰は現代のもの、⑱・⑲は四角の向付である。⑱は復原口径7.9cm、器高2.15cm、高台径3.5cm、高台高0.3cmである。胎土には精良なる粘土を使用し、色調は白色で釉調は透明釉である。型抜きのもので、見込みには笹に雀である。焼成は良好。一世代前のもので、⑲は角向付で、口径8.2cm、器高2.3cmで、高台径3.6cmで、高台高0.3cmである。型抜きのもので見込みの文様は菊花と四葉ををあしらっている。胎土、色調、焼成は⑲におなじである。㉑は見込みに呉須で松葉文を描いている。呉須の感じからは新しいもので、醤油入れとしての向付である。製品としては上手のもの、復原口径は8.7cm、器高2cm、高台径は4.2cm、高台高は0.3cmである。胎土等については⑲と同じである。㉑は中形の向付の底部である。復原底は7.1cm、胎土には精良の粘土を使用し、色調は灰白色で、釉は透明釉である。焼成は良好。

大皿 (第30図 ㉔)

印判手のもので、呉須の感じは新しい。1世代前のもの。底部破片である。復原底径10.8cm、胎土には精良なる粘土を使用し、色調は灰白色で、釉調は透明釉を施し、見込みの文様は草花を入れている。

蓋 (第30図 ㉕)

急須の落し蓋で、現代のものである。復原口径7.6cm。

土師器 (第31図 ㉖)

古墳時代の変形土器の口縁部破片である。復原口径11.8cm、胎土に砂粒や雲母片を含み、色調は灰黄色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は内面にハケメが残っている。

瓦器 (第31図 ㉗・㉘)

中世期の遺物である。㉗は脚付の鼎の口縁部破片である。胎土に細粒砂や雲母を含んでいる。色調は灰黒色で焼成は良好である。㉘は大振りの椀形土器である。復原口径13.8cm、器高7.9cm、高台径5.3cm、高台高0.8cmである。胎土を細粒砂を若干含んでいる。色調は灰黒色で、焼成は軟質であま焼きである。器面の調整は不明。

素焼甕 (第31図 ㉙)

大形の甕である。中世期～近世期かけてのもので、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色で、焼成は良好である。

陶磁器 (第31図 ㉚～㉜)

陶器は㉚・㉛・㉜、他は磁器㉝・㉞・㉟・㊱・㊲である。

大形甕 (第31図 ㉚)

甕の底部破片・胎土に細粒砂を含み、色調は黒褐色に近い赤褐色である。焼成は良好である。備前産のものと思われる。

摺鉢 (第31図 ㉛・㉜)

㉛は古手のもの、㉜は新しいもの現代製。㉛は底部破片である。胎土に細粒砂を多く含み、色調は茶褐色で、焼締めのものである。滑の摺目の単位は7本である。復原底径は12.0cm。㉜は口径31.5cm、器高13.5cm、底径14.5cm、器壁は0.5～1.0cmである。内面の摺目数は10本が単位である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄白色で、釉調は褐釉である。

磁器 (第31図 ㉝・㉞・㉟・㊱・㊲)

㉝・㉞は筒形茶碗。㉟・㊱は茶碗。㊲は中皿の向付である。

筒形茶碗 (㉓・㉔)

印判手のものである。小形の部類にはいる。呉須の感じからも近代の大正期のものと考えられる。㉓は復原口径5.9cm、復原高台径4.6cm、器高5.55cm、高台高0.4cm、胎土に精良なる粘土を使用し、色調は白色で、釉調は透明釉で、焼成は良好である。器面には葉文様が全面にプリントされている。㉔は復原口径は6.5cmで、器高5.85cm、高台高0.75cmである。胎土は細粒砂を含み、釉調は透明釉である。器面には草花文様を呉須で描写されている。

茶碗 (第31図 ㉕・㉖)

印判手のものである。㉕は丁寧にプリントされている。口径9.8cm、器高5.6cm、底径4.1cmである。胎土には精良なる粘土を使用し、釉調は透明釉で、焼成は良好である。染付の文様は梅花文を中心に波状文をいれている。見込みには菊花文をアレンジしている。口唇部には三角文を施している。時期的には近代の明治末～大正期のものと考えられる。㉖は現代のもので、復原口径9.2cm、器高は5.8cm、高台高0.75cmである。器面には呉須で、梅花文をアレンジしているが、印判手のものである。見込みにも寿の略字を入れている。胎土には精良なる粘土を使用して、色調は青味がかかった白色で、釉調は透明釉である。下手物の手である。

向付 (第31図 ㉗)

復原口径は12.4cmで、器高3.3cm、高台高0.65cmで、胎土には精良なる粘土を使用し、色調は灰白色で、釉調は透明釉である。器面には草花文様で、一對をアレンジしている。手を抜いている。見込みの文様についても印判手で草花文様と人物・松を入れている。4個のハリ跡が残っている。非常に手抜を行った染付で、日常の雑器である。

中世墓 (第32～34図、図版23)

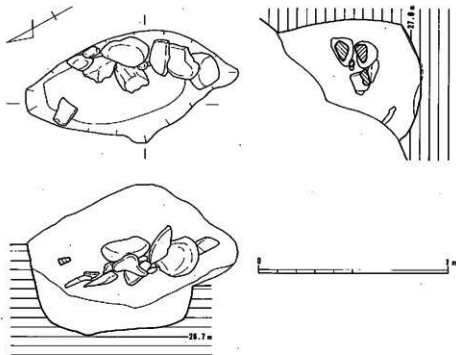
河岸段丘の2段の崖面寄りに、3基の土壇を検出した。北から1号・2号・3号へと番号を付した。

中世1号墓 (第32図)

平面形は100cm×60cm、楕円形を呈し、上面には河原石を立石として集石していた。断面は深さ70cm前後直角に落ちて、底面に50cmのフラットな面をもっている。一応ここでは墓域として上げた。出土遺物は皆無であった。

中世2号墓 (第33図(上)、図版23)

平面形は長方形を呈し、崖面を掘っていたもので、人工的なものであった。大きさは160cm×100cmで、深さ140cm前後を計る。断面はほぼ直である。出土遺物はなし。



第32図 2区中世1号墓実測図(1/20)

中世3号墓 (第33図(下)、図版23)

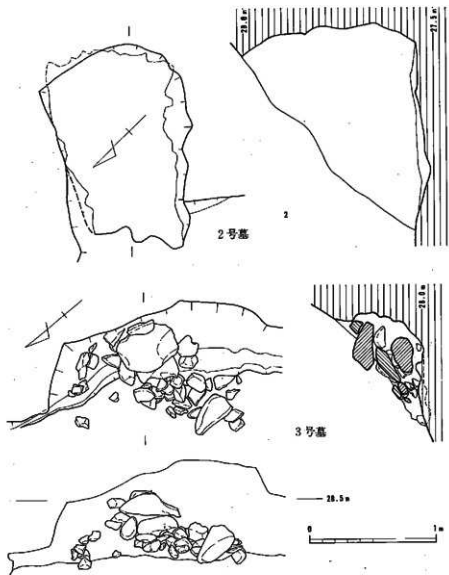
河原石がケルン状に組まれたもので、崖面にそっているために、墓としたが、平面形は楕円形で100 cm×60 cmで、深さ50 cmであった。河原石が立石として組まれているために、古墳・横穴墓の残存したものかと思われたが、五輪塔の破片もない。底辺から摺鉢の口縁部が出土している。

出土遺物 (第34図)

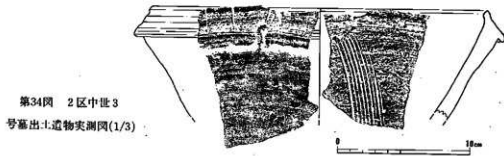
摺鉢の口縁部破片で、中世期末のものである。胎土に細粒砂を多く含み、色調は茶褐色で、焼締めのものである。口唇部には灰かぶりの跡がある。内面の櫛目の数は6本が単位である。復原口径は26.7 cmである。

配石遺構 (第35～36図、図版24)

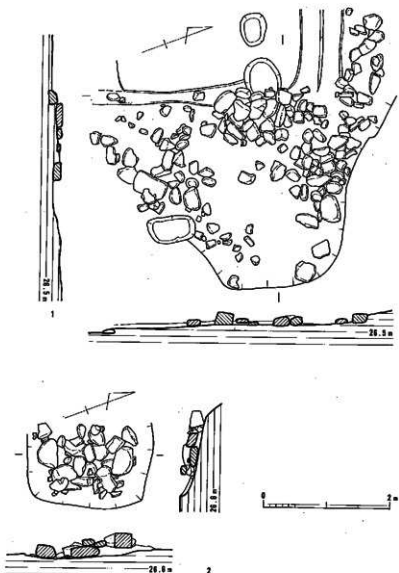
土塁コーナー寄りに配石があった。人工的にまとまるものがあった。この配石を1号とした。河岸段丘の崖面よりのフラットな面に2号配石がある。(第35図を参照)



第33图 2区中世2·3号墓实测图(1/30)



第34图 2区中世3号墓出1.道物实测图(1/3)

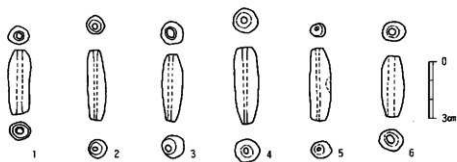


第35図 1・2号配石遺構実測図(1/60)

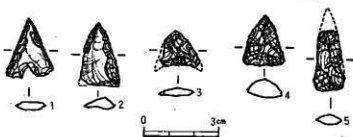
1号配石遺構 (第33図 (上)、図版24)

河原石が人工的に集まるどころが3ヶ所ほどある。断面をとってみると組まれた様子も見られないので、排水する折り利用したものと考えられる。土塁との関係からである。しかしながら出土遺物は土鍾が4点出土している。

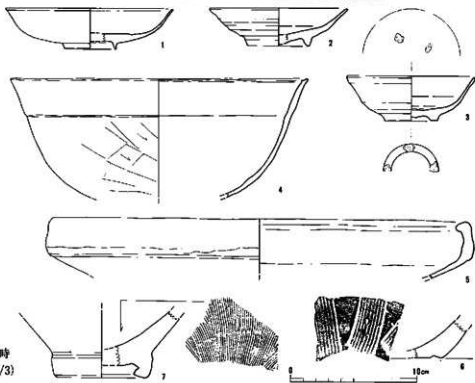
出土遺物 (第36図 ①~④)



第36图 配石遺構出土遺物尖刺筒实测图(1/2)

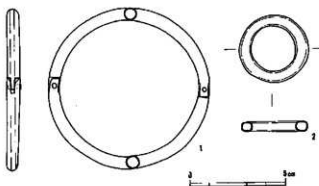


第37图 2·3区出土遺物(石鍼)实测图(2/3)



38图 2区試掘時
土遺物实测图(1/3)

第39図 2区
表上出土遺物
(鋼製品)実測
図(1/2)



土錘 ①-④) 配石遺構の北側から付近で2点と中央部で2点出土している。①は北側から出土。太めのもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黒褐色で、焼成は良好である。指痕が残っている。②は全体的に細身のもので、焼成は軟質である。③は配石の中から出土したもので、胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色で、二次的に火を受けている。焼成は軟質である。④は胎土に細粒砂を含み、色調は黒色で、焼成は良好である。4点の中で一番大きいものである。土錘は網のおもりとして使用されたものである。

2号配石 (第35図)

石棺の破壊されたものかと考えられたが、河原石をケルン状に積み上げたものである。人工的に組まれたもので、時期は不明、出土遺物もない。

試掘調査 (第38図、図版26)

試掘調査の折り出土した遺物の中で、朝鮮半島からの貿易陶磁器が出土している。ここでは表土層として上げている。その中で主なものを図示する。

白磁 ①)

2区東側表土から出土したもので、復原口径13.2cm、器高3.2cmで、高台高0.45cmである。胎土には精良なる粘土を使用し、色調は乳灰色で、釉調も透明釉で、乳白色に発色している。李朝系の白磁である。見込みは軸をかきとっている。

陶器 ②・③)

両者とも小皿である。胎土に細粒砂を含み、焼成は良好である。②は復原口径11cm、底径5cmである。高台内面まで釉が施されている。釉は透明釉で、色調はネズミ色である。③はトレンチの2から出土したもので、胎土に細砂を多く含み、色調はネズミ色で、釉調は透明釉である。口径10.2cm、器高3.5cm、底径は4.3cmである。李朝系のものである。目上が2ヶ所に残っている。全部では4個となる。両者とも李朝系の陶器である。

土師器 (④・⑤)

古墳時代の所産のものが④の浅鉢と⑤は近世期の焙烙である。④はトレンチの2から、⑤は表土層から出土している。④は復原口径23.4cmで、胎土に細粒砂を若干含み、雲母や角閃石がみられる。色調は黒褐色で、内面は茶褐色である。外面には全体に煤が付着している。煮焚に使用したもので、鍋・釜の用途であろう。煤がこびりついて使用回数が多かったものである。器面調整は、内面ナデ仕上げ、外面は煤にて不明である。口唇部は若干外傾している。⑤は焙烙で、茶焼きの平たい土鍋である。復原口径は33cmで、胎土に細粒砂を少量含み、色調は黄褐色で、煤の付着によって灰黒色を呈している。器面の調整はナデ仕上げである。焼成は良好である。所謂現代風に言うとフライパンである。

甕鉢 (⑥・⑦)

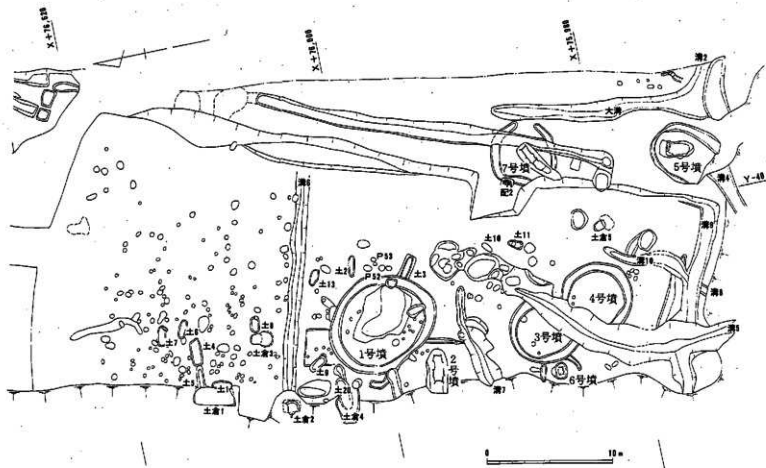
調理器具であるもので、⑥は近世の所産で、⑦は近現代の所産である。両者とも底部破片である。表土層の出土。⑥は底部に高台をつくらないもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好で、若干あまいが、焼締めもある。内面の櫛目状の溝は7本である。器壁は厚い。⑦は底部破片で、高台をつくっている。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、釉調は褐釉で、茶褐色の発色である。内面の櫛目は10本が一単位である。目は細かい。高台の登付は内傾している。焼成以前の段階に重ねたために、登付外側に、目の刻目が移っている。

銅製品 (第39図、図版53)

表土から出土したもので、①・②ともリングである。

①は真鍮製品で、直径8.5cm、幅6mmで、ネジの部分は5mmのリングで中央部をネジ止めしている。断面はほぼ正円形に近い。ネジ止めの工夫は片側を凹状に、他の片側を凸状に切込んで、その中央部に2mm孔を穿けてネジを入れて止めることになっている。②は真鍮製品で、直径3.5cmで、幅6mmのリングである。断面は楕円形をなしている。

両者とも、使用用途は家畜等に使う皮製品のつなぎとして使われているものであろう。



第40图 船先遺跡3区遺構配置图(1/300)

(4) 3区の遺構と遺物 (第40~71図、図版29~56)

北は2区の土塁の南から、南は谷まで。谷には道が1本萩川までいたっている。この道は一段低くなっている。この道が小字境でもある。3区は全域がスサギ(鵜先)で、面積は2,000㎡である。

この3区に主要な遺構が集中するので、遺跡名とした。この小字境の道から果願寺・川の上・神手とつづく。

出土した遺構のメインは古墳群の7基と同時期の住居跡・土塚墓と、中世期の地下式横穴(土倉)・土塚墓である。

では、時期の古い順から説明を加える。

1. 先土器時代 (第41図、図版53)

縄文時代以前のもを集めてみた。大半は3区で出土したものである。

①は7号墳周溝中より、②は2区溝3より、③・④はP-52の中より検出されたものである。

①は姫島産の黒曜石を使用し、形は舟底型のコア・ブランクである。先端部あるいは中央部に切断し、ノッチを加えていけば、マイクロリソーが1枚づつ剥ぎとることが機械的にできる。

②も姫島産の黒曜石製で、原面を残したコア・フレイクである。③は油質頁岩で、原面が側面と上面天井部に残っている。コア・フレイクである。P.52の覆土中より出土している。

④も油質頁岩で、コアである。これもP-52の下部の覆土中より出土している。

非常に興味を引く石器である。

2. 縄文時代 (第37図、図版53)

当該遺跡では、0区で集中して落し穴遺構が検出されている。3区ではこの時期の遺構は出土していない。遺物としては石鏃が大溝中より3点出土している。

石鏃 (第37図 ①・②・③、図版53)

①の形は、二等辺三角形に挟りを入れたもので、丁寧な剥離をほどこしている。断面は凸レンズ型である。重量1.8gで所謂飛び道具である。石材は黒曜石。②は、形が二等辺三角形をなしている。剥離は右側面が丁寧になされているもので、断面はD字が横になった形である。石材はサヌカイトで、殺傷能力を上げるために、先端部にカーブをもたしている。重量1.5gである。③は左側面が欠損しているもので、姫島産の黒曜石が石材として使用されている。形は鈍

角な三角形をなしたものに、挟りも鋭角にカーブをもたしたもので、所謂、膨張した様な型態である。重量0.79gである。

これらの石鏃は弓とセットとなり、飛び道具の一種である。

3. 弥生時代 (第40図、図版55)

大溝の中に遺物として残っているが、特別に説明する遺物は存在しない。一部柱穴は当該時期のものと考えられる。

4. 古墳時代 (第42～55図、図版30～40)

当該地区では7基の高塚古墳が群集し、土壌墓がその周辺部に存在していた。また3区-1号住居跡が1号墳に切られていた。

3区1号住居跡 (第13図①、図版29)

1号墳の周溝が南側辺をカットしている。平面形は長方形を呈するもので、中央部より西側に炉をもっている。これを土壌墓が切っている。主柱穴は2～3本柱で一列に並んでいる。断面図をみると北が浅く、南側が深い。もう1本南側にあったと考えた方が妥当性をもつ。北側辺が3mで、西側辺は3.5m+ α である。東側辺の中央部に貯蔵穴を有し、壁高は10～15cmを計測する。住居跡の中からは出土遺物はみられなかった。

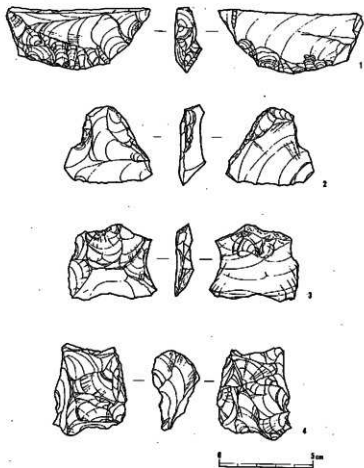
切り合い関係を書くと、9号土壌→1号住居跡←1号古墳(矢印 新→古) このことによつて、住居跡は6世紀後半より古くなる。但し、9号土壌と1号古墳との新旧関係は判明しない。1号墳より出土した遺物によって、年代が把握することができる。

1号古墳 (第42～46図、図版30・31)

周溝のみ残っていたもので、周溝の直径8mで、周溝幅が80～100cm前後である。石室は完全に破壊され、腰石さえ残っていない。石室があった部分は不整形に30cmほど落ち込んでいる。

南側周溝に遺物だけが周溝底より10～20cmあるいは基盤面直上迄浮いた状態で出土している。遺物はブロックごとにまとまりがみられる。第43図がこれである。鉄製品の用具類は中央部にまとまっている。かたまりがどうも、もっこ一杯というところではなかろうか、意識的に祭壇を営んで、当初祭祀をしたとは思われない。もし、祭祀をしているならば、周溝底付近で密着した状態で見られるわけである。再度出土状態の第43図、図版31を見ていただきたい。

この1号墳は2号墳の周溝を切っている。2号墳が古くて、1号墳が新しい。



第41図 3区先土器時代出土遺物実測図(1/2)

出土遺物 (第44～46図、図版31・52)

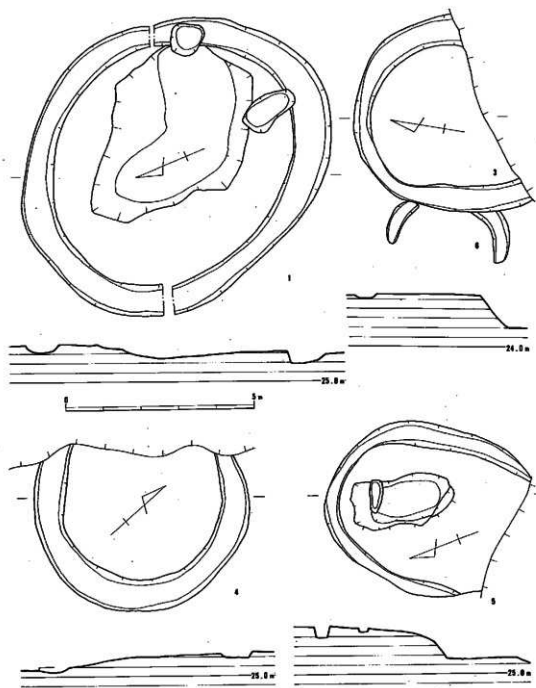
周溝中より出土したものは、須恵器と鉄製武器・馬具類であった。その他に縄文時代の石鏃1点と弥生式土器の口縁部破片と底部が検出されている。

須恵器 (第44図、図版52)

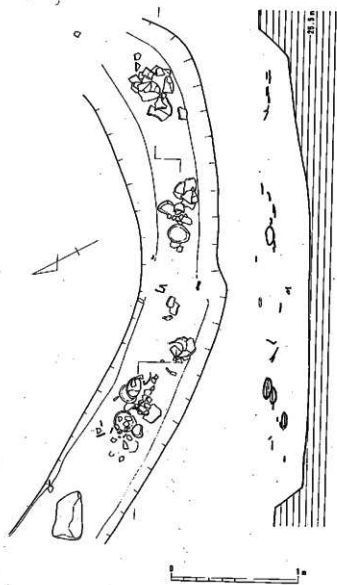
壺・甕・杯身・杯蓋が周溝底より浮いた状態で出土している。

壺 ①

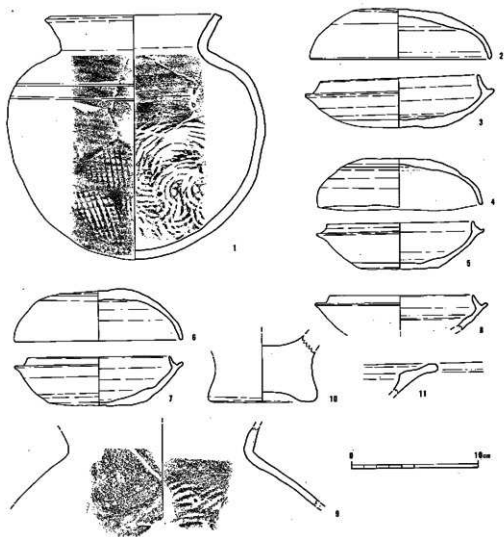
バラバラに割れた状態で出土しているもので、口径13cm、器高19.5cmで、胎土に精良なる粘土を使用し、色調は灰白色で、焼成は良好である。器面の調整は胴部下半には格子のタタキで、内面は青海波文のタタキ、胴部上半には12条の沈線を施し、頸部から口縁部まではヨコナアで



第42图 3区1·3-6号古坟实测图(1/100)



第43图 3区1号占坑周围遗物出土状態实测图(1/30)



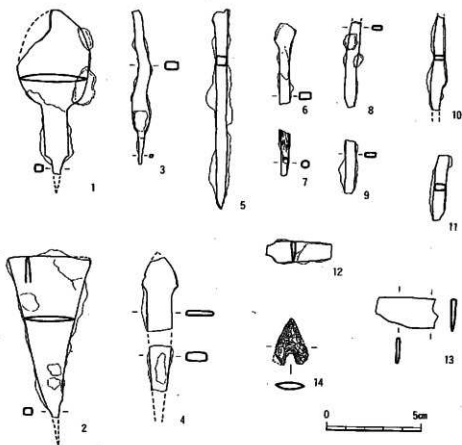
第44図 3区1号古墳周溝中出土遺物実測図(1/3)

ある。どうもちぐはぐな感じがする土器である。

杯 (②-⑧)

杯身③・⑤・⑦・⑧で杯蓋は②・④・⑥である。②・③がセットとなるもので、②は杯蓋で口径14.4、器高4.05cmで、胎土には細粒砂を含み、色調は灰青色を呈し、焼成は良好である。若干歪んでいる器面の調整は天井部は回転ヘラケズリで、他はヨコナデである。内面もナデ仕上げである。

③は杯身である。口径11.6cm、受部径15cm、器高3.9cm~4.1cmで若干歪んでいる。胎土には細粒砂を含み、色調は黒味をおびる灰青色を呈している。焼成は良好で、若干ひずみがある。

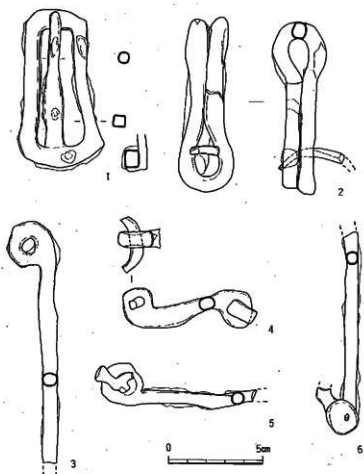


第45図 1号古墳周溝中出土遺物（鉄製品武器等）実測図（1/3）

器面の調整は底部はヘラケズリで、他はヨコナデである。内面もナデ仕上げ。

④・⑤を組合せた。④は口径13cm、器高4.1cm、胎土に細粒砂を少量含み、色調は黄味をおびた灰青色で、焼成は良好である。器面の調整は天井部は回転ヘラケズリで、他はヨコナデ、内面もナデ仕上げである。⑤は杯身で、口径11.6cm、器高3.75cm、受部径は13.2cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は暗灰色で、若干黄味おびている。焼成は良好である。器面の調整は底部は回転ヘラケズリ、他はヨコナデで、内面もナデ仕上げである。

⑥・⑦を組合せた。⑥は蓋で復原口径13.5cm、器高4.1cm、胎土に細粒砂を含み、色調は黄味がかかった灰青色である。器面の調整は天井部は回転ヘラケズリで、下半部は回転ヘラケズリの後、ヨコナデである。⑦は身で復原口径は11.4cm、復原受部径は13.5cmである。胎土に細砂を若干含み、色調は灰青色に黄味がかっており、焼成は若干あまい。器面の調整は底部の切



第46図 1号古墳周溝中出土遺物（鉄製品馬具）実測図（1/3）

り籠も籠である。ヘラケズリ後にナデている。内面はヨコナデである。

⑧は杯身で口径11.5cm、受部径13.7cmで、胎土に細粒砂を若干含み、色調は黄味をおびた灰色である。器面の調整は内・外面ともヨコナデである。

壺⑨胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄味おびた黄灰色を呈し、焼成はあまい、器面の調整は、外面の頸部以下に格子のタタキである。内面の頸部以下には青海波のタタキがある。器面の状態は悪い。

その他のもの⑩・⑪弥生終末期の底部破片が⑩である。底径8.8cm、胎土に砂粒を多く含み、色調は赤褐色、焼成は良好である。若干上げ底の変形土器である。⑪は口縁部破片で、鋤先口縁で、胎土に細粒を多く含み、色調は黄褐色で、焼成は良で、器面が荒れている。弥生

中期後半所産である。

鉄製品 (第45図、図版53)

周溝中より出土したもので、鉄製品の馬具・武器とこれに混在して、石鏃が出土している。

鉄鏃 (①~⑩)

①は大形のもので、葉状の型をしている。残長が8.7cm、身幅3.7cm、柄の断面は四角形をなしている。重量27g。②も大形の直夷鏃である。残長8.7cm、身幅4.3cm、柄の断面は正方形を呈する。重量47g。③は蛇行したもので、先端部が欠けている。身の断面は長方形で、残長が8.3cm、幅0.5~0.6cmである。重量6g。④は大形のもので、返りから先端部の刃部まで約2cmである。柄部分の断面は長方形を呈している。刃部と柄は同じ個体のもので、組合せて図示をした。⑤は柄の部分で残長10.3cm、幅0.5cmで断面は長方形である。⑥・⑦は、残長4cmで、柄部分の残長は2.3cmである。同一個体と思われるものを組合せた。⑧・⑨・⑩・⑪は柄部分である。

刀子 (⑫・⑬)

⑫は小形の刀子の破片で、残長3.5cmである。⑬は木質部の柄に残っているもので、残長3.5cmである。

石鏃 (⑭)

混入したもので、黒曜石製で、形は逆ハート型をなすもので、脚部が欠けている。断面は凸レンズ状である。丁寧に剥離を行っている。重量1.3g。

馬具類 (第46図、図版53)

①はバックルで、大形皮ベルトの締め金具である。長さ8.2cm、幅3.4~4.5cmである。鞍関係の金具の一つである。

②は継手の金具の一種である。長さ9.2cm、直径3cmで、二重構造に金具を合せている。輪の中に継金具の一部が残っている。

③・④・⑤・⑥は轡で、③・⑥は引き手の部分である。③は残長13cmで、上部の部分でこれに皮ベルトがつく。⑥は残長10.5cm下部の部分、これに馬^馬衝が連結する。

④・⑤は馬衝で、④・⑤が連結するもので、出土状態の写真では、4連がつながっている(図版53)。これが馬の口にくわえさせる部分である。④は全長7cmで、左右対称で、これと同じものが3・4個連結し、⑤がその端となる。これに引き手具がつく。残長8cmである。

出土遺物からみて、1号墳の古墳の時期は6世紀末から7世紀初頭と考えられる。出土した須恵器は須恵WAである。一部に須恵ⅢBがはいつている(註1)。馬具・鉄製武器によっても傍証できる。

このことを踏まえて、築造年代は6世紀末であると位置付けたい。

2号古墳 (第47~49図、図版31~34)

1号墳の西南にあって、1号墳の周溝が2号墳の周溝を切っている。このことは2号墳が先に築造され、それ以後1号墳が造られたことになる。2号古墳は周溝の東側の一部が残っている。それと石室の腰石部分が残る、かろうじて玄室内の床面と羨道の閉塞石の下部の一部分が残って検出された。

石室 (第47図、図版32~34)

単室の横穴式石室で、側壁は腰石のみで一部分は抜かれているが、床面については全体が残っていた。

石室の大きさは、樞石から玄室まで1m75cmで、幅は袖石付近82cm、奥壁の鏡石付近で60cmを計る。

石室の石組み方は、幅が50~70cm、高さ40~50cm、厚さ20~35cmのものを腰石としている。鏡石は65cm、高さ30cm、厚さ20cmを奥壁としている。石室の掘り方は隅丸方形の平面形で、170cm×3.05+ α cmで、深さ55~60cmの地山を二段掘りにし、造る時から設計が組まれていた。掘り方の奥の幅と鏡石の大きさが決定された後は、石室の内法が具体性を帯びるのである。石室は奥が狭く入口が広くなり、袖石の幅と奥壁の幅が略一的に一致している。

羨道部の閉塞石をみると、樞石の羨道側の先端部にかませる様におき、2石以後は剥身状においている。

玄室の中の出土遺物は、北西のコーナに杯身・杯蓋が一組と奥壁の北東でガラス玉が3点出土し、他の2点南側中央部で見出された。

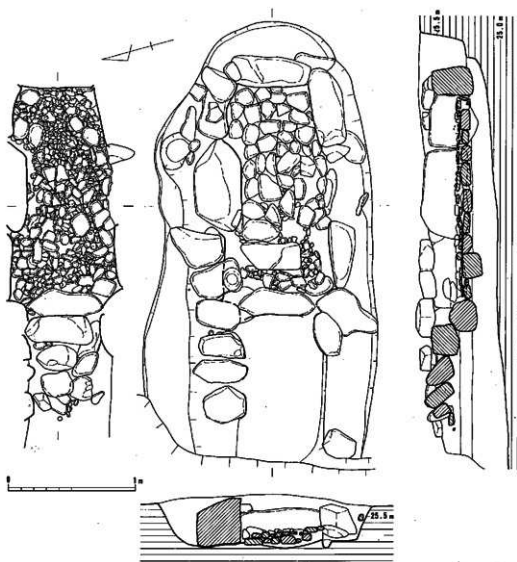
床面の構造は、下段に人頭大の河原石で均し、その上に河原石の小礫を敷いたものである。

出土遺物 (第48図、図版52)

床面から出土しているもので、須恵器は玄室の北西コーナで杯のセットとし、他のガラス小玉3点が奥壁北東で確認された。他は中央部南側で2点出土している。

須恵器 (①・②)

出土状態は身の上に蓋が覆さった状態である。①はあま焼きのもので、器面はひずんでいる。胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄灰色である。口径15.2cm、器高4.65cmで、器面のあれのため調整不明である。②は杯身で、焼成の折りの割れとひずみがある。口径13.3cm、器高3.4cm、受部径15.5cmで、胎土に精良の粘土を使用し、色調は青灰色である。器面調整は体部下半は回転ヘラケズリで、上半から内面はヨコナア仕上げである。内部中央部にひび割れがある。



第47図 3区2号古墳石室実測図(1/30)

ガラス玉 (第49図、図版53)

①は一番小さなガラス玉で、色調はミドリ色で、気泡がはいっている。石室の南の中央から出土。②は水色で気泡がはいっている。石室の南の中央から出土。③はブルーで気泡がはいっている。石室の北東コーナー付近。④はブルーで気泡がはいっている。石室の北東コーナー付近。⑤は水色で気泡がはいっている。石室の北東コーナー付近から出土。

当該古墳の時期は出土遺物の杯のセットから編年型式は須恵ⅢBで、石室床面から出土していることによって、副葬品である。6世紀後半頃に位置つけてよいと思われる。所謂1号よりも古いこともその位置付となり、当古墳が1号墳よりも一世代古いと考える。

3号古墳 (第42図、図版35・36)

周溝の2/3が検出されたもので、第40図の配置図を見ると溝5で切られて、6号墳を切っている。石室とも削平されて、辛じて周溝だけ残っている。

古墳の直径は周溝の外で5m、周溝の幅は0.5mで、深さ6cmである。出土遺物等は検出されなかった。6号墳の東側が切られている。

4号古墳 (第42図、図版35)

周溝の3/4が検出され、第40図の配置図を見ると溝5で切られている。本来なら3号墳と4号墳の切りあいがみられるが、両古墳とも溝5でカットされている。

4号墳は直径6mで、周溝の幅は80mで、15cmで、出土遺物等は検出されていない。石室も掘り方も削平されている。

5号古墳 (第42図、図版35)

周溝の1/2が検出され、第40図の配置図を見るとその半分がカットされている。

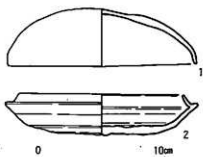
復原すると周溝を入れて直径4.5m前後で、石室を組んでいた抜き跡が中央部に落ち込んでいる。2.8m×1.2mで南側は大きく削平されている。奥壁の鏡石部分は明確にとらえることができる。出土遺物は北側の周溝の中より高杯が出土している。

出土遺物 (第53図、図版52)

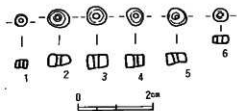
周溝底より出土したもので、高杯で裾部が欠けていた。

高杯 (D)

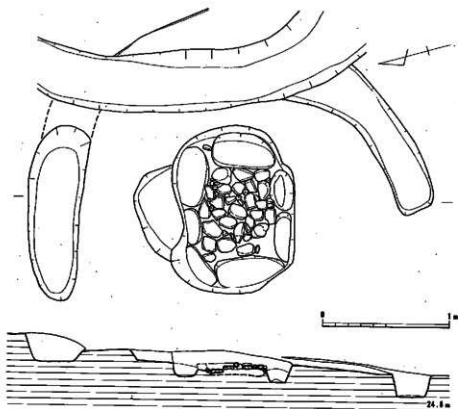
胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色で、焼成は良好である。一部に灰をかぶっている。口径11.4cm、器高13cm(残)、器面の調整は上部の杯部には、内面はヨコナデで、下半部には二条の凸帯を有し、その付近はヘラケズリで、脚部は柱状の中央に2条の沈線を有し、長方形のス



第48図 2号古墳出土遺物(須恵器)実測図(1/3)



第49図 2号古墳出土遺物(玉器)実測図(1/1)



第50図 3区6号古墳石室実測図(1/30)

カシ窓を上下2ヶ所と裏面にも対応させている。長方形のスカシ窓が4ヶ所となる。調整はヨコナデで、脚部内面もヨコナデである。中央より上面は未調整である。

高杯の器形編年から須恵III BからIVAと思われるので、6世紀後半ということとなる。

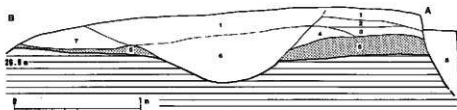
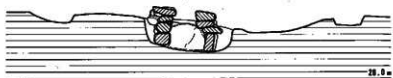
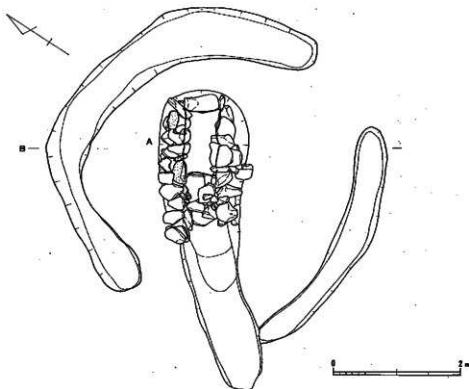
6号古墳 (第42・50図、図版36)

主体部は小形石棺で、直径が3 m30cm、周溝幅50cm、深さ12cmである。中央部に主体部を有するもので、床面のみが検出された。西側の周溝は崖のために削平されている。

3号墳によって切られている。

主体部 (第50図、図版36)

隅丸方形の掘り方を掘り、腰石を完全に抜かれ、床面のみ残っている。拳大の手頃石を床面の敷石として使用したものである。床面からの出土遺物はみられない。

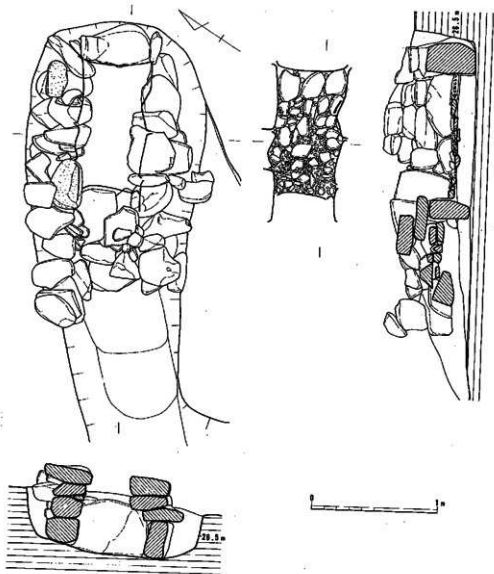


- | | |
|------------|-----------------|
| 1. 淡灰黄色粘質土 | 5. 黒色土(田舎土) |
| 2. 暗灰黄色土 | 6. 暗黄白色粘質土(田舎土) |
| 3. 暗灰黑色土 | 7. 灰黄色粘質土 |
| 4. 黄黑色土 | 8. 暗黄色土(掘り方埋土) |

第51図 3区7号古墳実測図・墳丘土層断面図(1/60・1/30)

7号古墳 (第51図、図版37~39)

大溝の中に位置し、近世段階に削平されたものである。1号配石の東南3m付近に位置するもので、大溝の礫や河原を排除した時に検出された。周溝を入れると5m50cmで主体部は小形の横穴式石室である。石室の中より鉄鎌が1点出土している。層位については一部捕えること

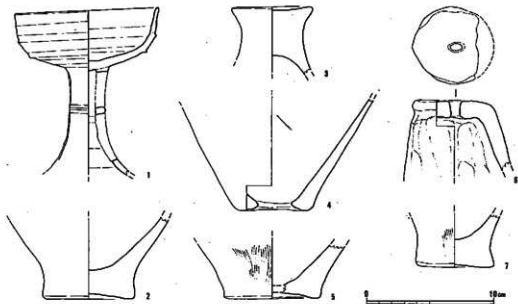


第52図 3区7号古墳石室実測図(1/30)

ができた。

層位 (第51図、図版38)

周溝を導き出すために土層を残した。第51図のA-Bがそれである。掘り方ぎりぎりまでのもので、基本的には、旧地表(黒色土層)が基準となる。周溝中は暗黄黒色粘性土である。墳



第53図 3区5・7号古墳墳丘周溝出土実測図(1/3)

丘の土層名は黄黒色・暗灰黒色・暗灰黄色土層等なる。

主体部 (第51図、図版38)

ほぼ中心部に石室による主体部を設けている。単室の小形の横穴式石室である。閉塞状況は、框石を立てて、使用しているためにそれに沿って、丁寧にならべながら水平に、階段状に持ち送っている。

石室の内法は50cm×100cm(框石手前)、平面形は長方形である。石の組み方は腰石には30cm×25cmで、厚さ25cmの手頃石を使用している。横断面をみると、4石まで持ち送りながら、2～3石で天井石となると考えられる。奥壁の鏡石は、その中でも一番大きな石を使用している。掘り方は石室ぎりぎりである。140cm×300cm、深さ50cmで隅丸長方形をなしている。

床面は奥壁近くには人頭火の偏平な石を使用し、手前の框石付近には拳大の石と小さな礫石を敷いている。出土遺物は鉄鏃1点で、玉や耳飾等の副葬品の出土はみられなかった。

出土遺物 (第52図、図版52)

石室内 (図版37)

鉄鏃が1本南側奥の奥壁側で検出されている。残長10cmのものである。

墳丘 (第53図、図版52)

旧地表の黒色土から出土したもの(③・④・⑥)と墳丘の中から出土したもの(②・⑤・⑦)全てが弥生後期から終末までの弥生式土器である。

③は蓋で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。調整はナデである。上径は6.3cmである。④は甑である。胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄味がかった灰黄色で底径は5.7cm、穿孔は直径2.5cmである。焼成は良で、器面の調整はナデである。内面に工具痕がみられる。⑥は支脚の上部である。復原上径は6.1cm、胎土に砂粒を多く含み、色調は黄褐色である。上に穿孔されている0.5cm～1cmで、楕円形の孔である。器面の調整は内面は指痕が残り、全体にあらいなデである。

墳丘の中から出土したもの、②は底部で、底径7.35cm、胎土に細粒砂を多く含み、色調は褐色に近い茶色である。焼成は良で、器面の調整は荒れているため不明。⑤も底部破片で、復原底径7.6cmで、胎土に細粒砂を若干含み、色調は黄褐色で、黒味をおびている。焼成は良好で、器面の調整は外面はハケメとヨコナデ、内面はナデか。⑦も底部破片で、底径6.2cm、胎土に細粒砂を若干含み、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好で、器面の調整は外面はハケメで、内面はナデである。

基盤の層は弥生後期の面であったことが理解でき、墳丘の旧地表についても同じ時期であった。

土壌墓 (第54・55図、図版40)

古墳時代の土壌墓と歴史時代の土壌墓が出土している。ここでは古墳時代のものについて説明をする。

D-20号土壌墓 (第54図、図版40)

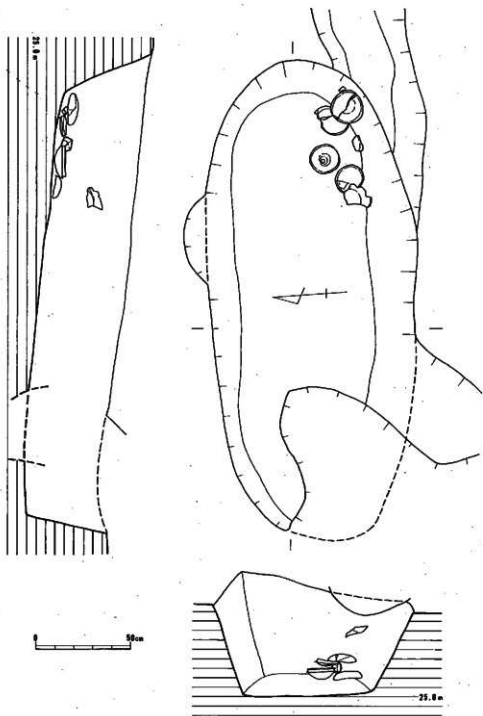
平面形は楕円形を呈し、250cm×100cmで深さ60cmである。西側へ10cmほど傾斜している。副葬品として須恵器(杯身・杯蓋の2組)と土師器の甑である。頭を東位におき、副葬品は東南端に入れたものである。

出土遺物 (第55図、図版54)

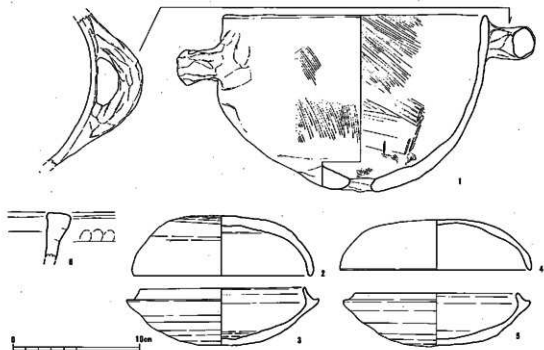
副葬品として、床面に密着の状態出土したもので、須恵器の杯の身蓋の2組のセットと土師器の甑である。その他に上面より中世期の土師質土器の口縁部破片が出土している。

土師器 ①

甑である。復原口径は20.4cm、器高14.1cmで底に穿孔がある。両方よりあけているもので孔径は2cm強である。左右に対称に把手をもつ。胎土に砂粒を含み、色調は灰黄色で、内外面に一部分に黒斑をもち、焼成は良好である。器面の調整は外面はハケメで、下半はナデ。内面は



第54图 3区20号土堆高尖剖面图(1/20)



第55図 3区20号土塚墓出土遺物実測図(1/3)

ハケメを加えた、後で工具によってナデている。下半部には工具痕が残っている。

須恵器 (②・③・④・⑤)

②・④杯蓋、③・⑤杯身である。②は口径14.1cm、器高4.7cm、胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は天井部は回転ヘラケズリで、口縁部付近は回転ヘラケズリの後にナデている。内面はヨコナデである。

③は口径13.3cm、受部径15.3cm、器高4.65cm、胎土には細粒砂を多く含み、色調は黄味をおびた灰色である。器面の調整は体部下半は回転ヘラケズリ、上半と内面はナデである。④の復原口径は15.2cm、器高は3.95cm、胎土に細粒砂を若干含み、色調はふい黄灰色で、焼成はあまり不良である。器面の調整は磨滅して不明。⑤の復原口径は12.9cmで、受部径14.8cm、復原器高4.3cmで、胎土に細粒砂を若干含み、色調は黄灰色である。焼成はあまり不良である。器面の調整は磨滅して不明。ただし体部下半から底部は回転ヘラケズリである。④・⑤は一見土師器ともまちがえる製品である。

歴史時代土器 (⑥)

覆土上面に出土したもので中世末期の土師質土器の大形甕の口縁部の小破片である。復原口径は46.2cm、胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄色で、焼成は良好である。口縁部下方部分に指

圧痕が返る。この破片に混入したものであろう。

中世期の土塚墓と古墳期の土塚墓とは土の色があまり変化がないものである。非常に識別するの無理をする結果となった。中世のものが大半であったことは遺物等の検出があるために理解しやすかったが、遺物がないものが、どちらに所属するか不明の点もあった。

歴史時代 (第56～71図、図版41～51)

歴史時代のものの遺構には、土倉・土塚墓・大溝・溝状遺構であった。ここでは近世・近代までを含ませて説明する。

土倉 (第56～62図、図版41～44)

所謂、地下式横穴である。0・1・2・3区とも検出されている遺構で、当該区が一番多く分布している。西端の川辺りに1・2・4号土倉、1号古墳北側に3号土倉と4号古墳の東側に5号土倉が位置している。

3区1号土倉 (第56図、図版41)

3区の西端の崖面北側において、土塚墓の1号土塚墓の下にあるもので、ここでは切り合っで見えるが、存続した当時は別々の可能性大である。幅300cm×奥行150cmで、深さが150cmである。一つの部屋である。

3区2号土倉 (第57図、図版43)

番地境の東西方向の溝の西端部にある。3区1号土倉の南側に位置するもので、中央部に入口を営て山側と谷側に2つの土倉をもったものと考えられる。中央に出入口が両方が使用できるものである。山側のもの寸法は、部屋は275cm×160cmぐらいで、天井までは80～90cm前後と思われる。

西方向に排水溝をつくっている。奥の壁から排水溝の立上がりまで310cm前後を計る。出土遺物は5層と6層から甕の底部と摺鉢が出土している。

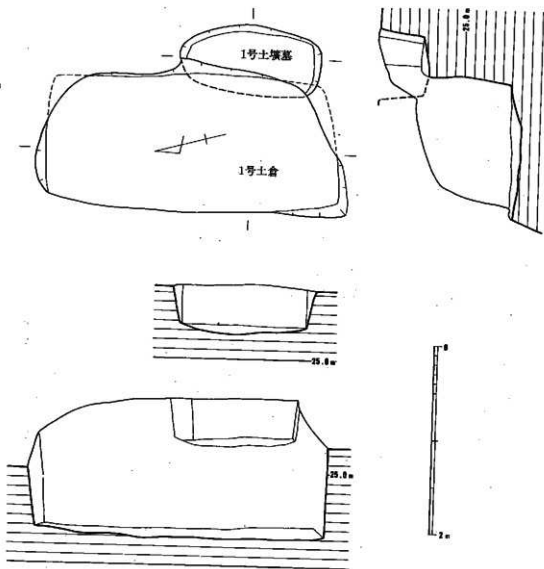
出土遺物 (第59図、図版54)

床面の5・6層から出土したもので、摺鉢と大形の土師質の甕の底部が出土した。

摺鉢 (④)

口縁部の破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は良好である。復原口径は28.6cmで、外面口縁部付近にススが付着している。器面の調整はナデで、内面の櫛目状の溝は3本単位である。

土師質土器 (⑤・⑥)



第56図 3区1号土倉・1号土墳基実測図(1/40)

両者とも大形甕の底部である。

⑤は胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰褐色で、焼成は良である。底径は15cmである。器面の調整は外面は剥落がひどい。内面は底辺はハケメ、その上はハケメをナデ消している。上半はナデである。2次の火勢を受ける。

⑥は胎土に砂粒を若干含み、色調は灰色で赤味をおびている。焼成は良好。器面の調整は剥

落がひどいため外面は不明、内面はケズリである。底径15.0cmで底には工具痕が残っている。器面には2次的に火を受けている。

その他に上層の攪乱層から出土している。⑦は、甕形土器の口縁部の破片、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色、焼成は良で、器面は剥落がある。頸部の部分にはヨコナデが見えるが、他は磨滅して不明である。

この2号土倉は、中世期のもので、摺鉢等の実年代で15世紀後半から16世紀前半頃と推定される。

3区3号土倉 (第60図、図版44)

1号土倉の東南にあるもので、最初は井戸状遺構としていたもので、北側に人頭大の配石ができたことによる。しかし横の円形土壇を調査してみると、深くならないため、地下式横穴の土倉の天井が落ちたものと考えらるにいたった。配石になったのは入口部の直口で、横にはいるものであった。天井が崩落したものである。出土遺物は、中世期の大形甕の小破片と磁石が出てきた。入口の配石部の平面形は隅丸方形で90cm×80cmで、深さ50cmで配石に到達する。それから50cm下で基盤となる。その基盤より20cm下がったのが土倉の部屋になるわけで、プランが円形に掘られている。天井部の崩壊は早い時期に崩れている。底辺が10cmほど奥にはいり、50cmの高さが天井となると考えられる。直径が120cmで、深さ105cmである。

出土遺物 (第58・59図)

甕 (第59図一③)

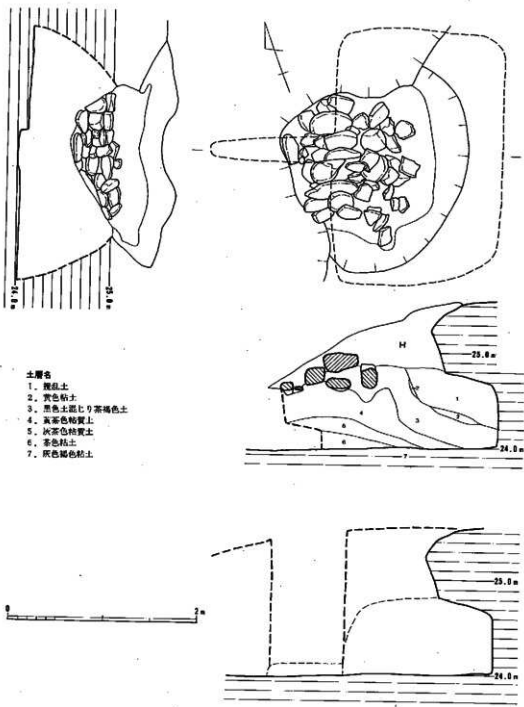
中世期の土師質の胴部破片の小破片で、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄灰色で、焼成は良好である。器面の調整は外面はタタキ、内面はハケメである。

石器 (第58図一③)

③は磁石で、石質は硬質砂岩で全面を使用している。仕上げ砥である。小形で全長が7cmで、幅が2cm、重量30gである。

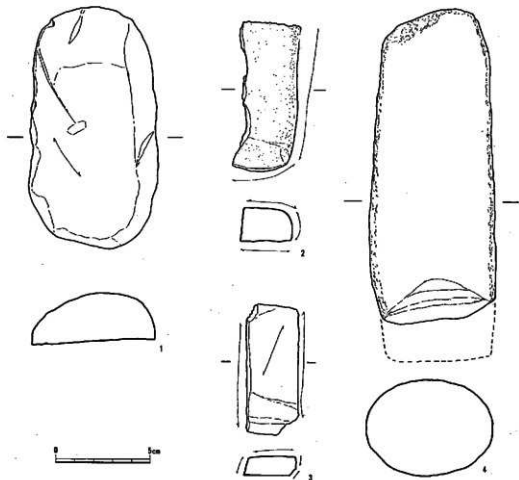
3区4号土倉 (第61図、図版44)

D-20号土壇墓の南側の横にあるもので、出入口部からの調査をはじめた。土倉の部屋の方向は西側方向であった。出入口部の平面形は円形で直径60cmで直行して180cmで、横に部屋を造っている。プランは不整形長方形で、奥行280cm、最大幅180cm、狭い所で80cm、天井の高さは100cmである。危険防止の意味から出入口部を約1m掘ったところで天井部が出土した、その高さを押えた後に、機械をもってトレンチ状に掘り下げた。出土遺物は検出できなかった。



- 土層名
1. 雜草土
 2. 黃色粘土
 3. 黑色土混じり茶褐色土
 4. 黄褐色粘質土
 5. 灰褐色粘質土
 6. 茶色粘土
 7. 灰褐色粘土

第57图 3区2号土舍実測図(1/40)



3区5号土倉 (第62図、図版44)

第58図 3区土倉等出土遺物(石器)実測図(1/2)

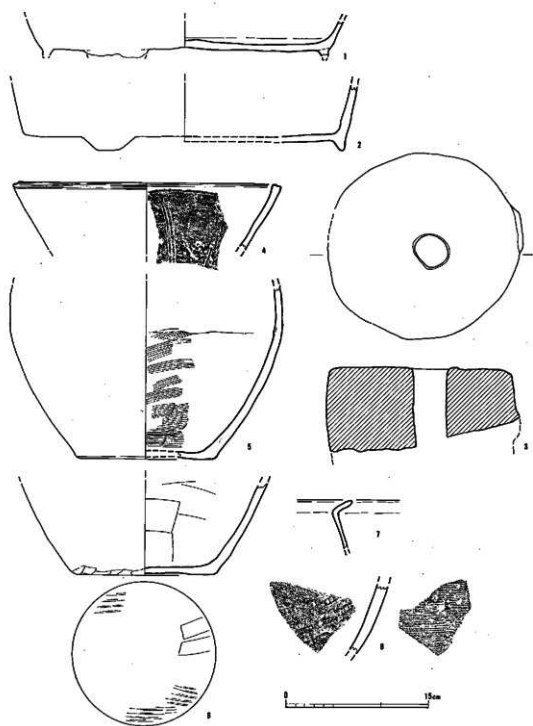
3区の1号配石の西南にあるもので、完全に残った典型的な地下式横穴の土倉である。しかも小形なものである。上部のプランは不整台形を呈し、下部のプランも隅丸の台形状を呈し、120cmで、奥行は80cmで、床面に人頭大の河原石を埋置していた。これが木蓋を固定するための石でもあった。

部屋の中からは出土遺物は検出されていない。天井部の高さは44cmである。床面は順々に傾斜している。

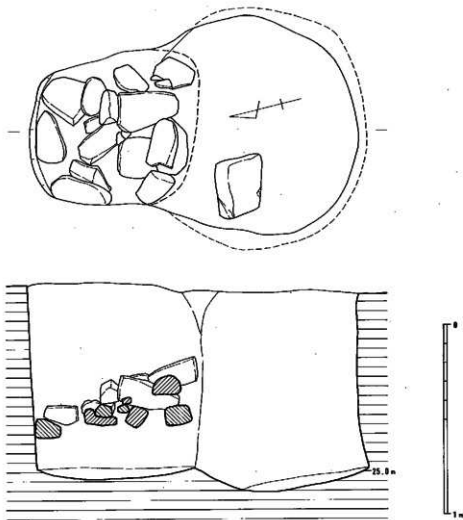
以上の土倉は、出土遺物等から中世期のもので、15世紀から16世紀にかけてのものと思われる。当該遺跡の土倉は、この範疇にはいる。

土壌墓 (第56・63～66図、図版44～46)

古墳時代の土壌墓と中世期の土壌墓が検出している。中世期のものは、1～19番までを、20番以降を古墳時代として分離した。



第59图 1区·3区土舍出土文物实测图(1/4)



第60図 3区3号土倉実測図(1/20)

中世期のものはD-1~D-13まで土墳墓を番号をあげた。出土遺物がだたものを中心に実測図を制作した。

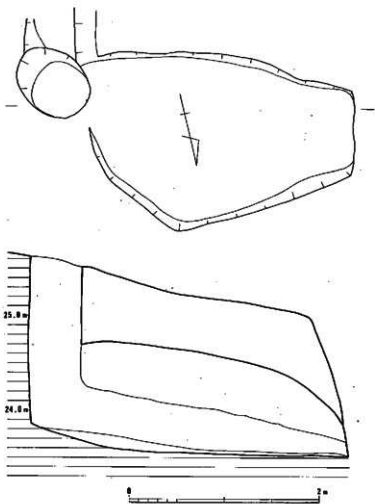
D-1号土墳墓 (第56図、図版44)

3区1号土倉の上にあるもので、南北方向は130cmで東西方向は上端70cm前後である。深さは50cmで、断面は 110° の傾斜がみられる。出土遺物は摺鉢破片が1点出している。

出土遺物 (第66図、図版53)

摺鉢 (①)

覆土中より出土したもので、胎土に細粒砂を多く含み、色調は灰黄色である。焼成は良好である。復原底径13.3cm。器面の調整は、ナデで、内面の櫛目状の溝は7本単位である。



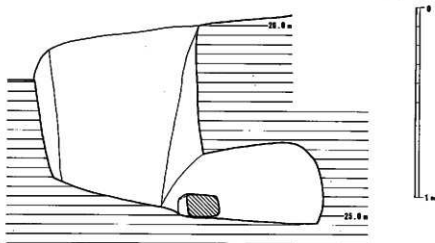
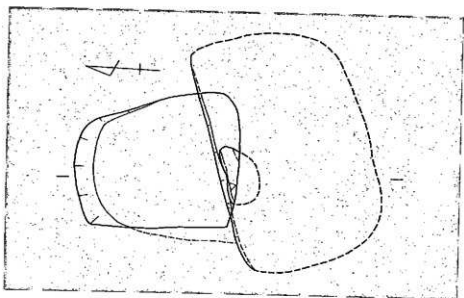
第61図 3区4号土倉実測図(1/40)

D-2号土墳墓 (第63図、図版45)

1号墳の東北側にあつて、平面形は隅丸方形を呈し、160cm×50cmである。小磔が床面より出土している。出土遺物はなかつた。

D-3号土墳墓 (第63図、図版45)

1号墳の東側にあつて、平面形は不整長方形で、二段掘りのものである。190cm×86cmで、中は176cm×60cmである。深さは1段目5cmで、2段目は10cmである。全体では15cmで、底辺は傾斜している。出土遺物は検出できなかった。



第62図 3区5号土倉実測図(1/20)

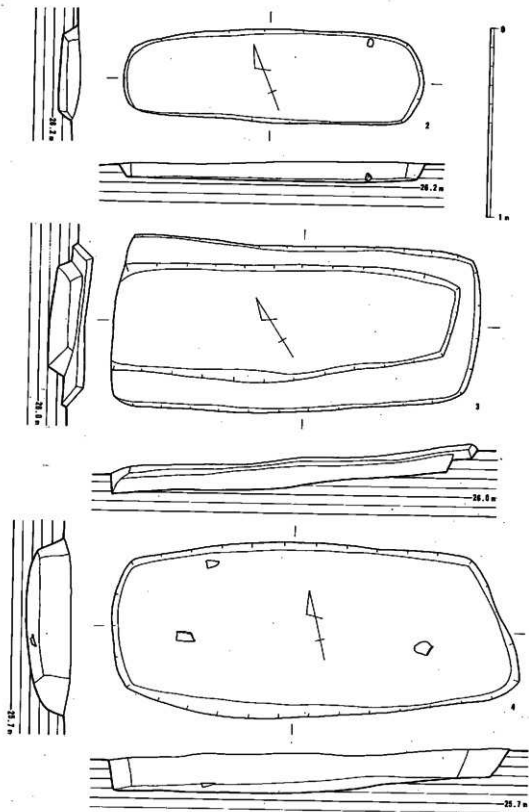
D-4号土墳墓 (第63図、図版29)

1号墳の北側にあつて、平面形は210cm×93cm、深さ21cmである。床面は東位方向が高く西は低くなる。床面より土師器の高台付碗が出土している。

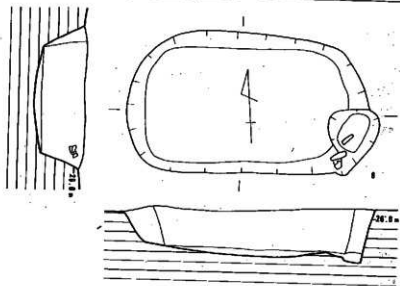
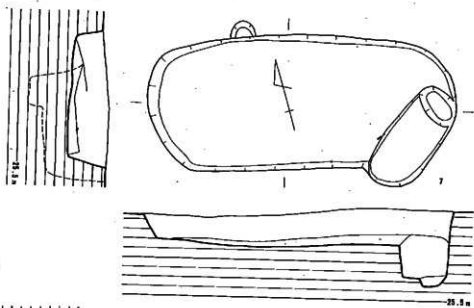
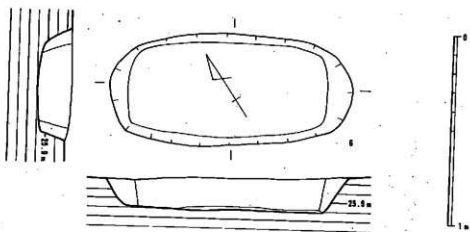
出土遺物 (第66図)

碗 (②)

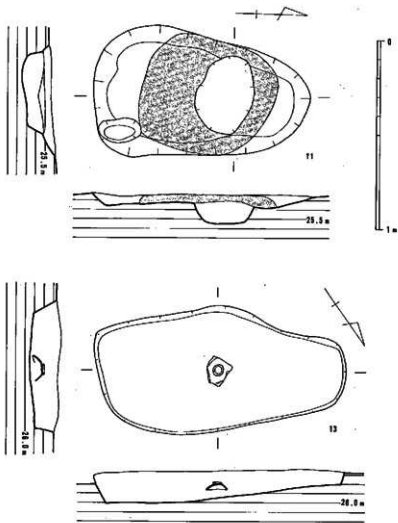
小振の高台付碗である。胎土に細粒砂を若干含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は軟質である。復原口径は11.7cm、底径5.95cm、器高は4.75cm、焼成時にできたむらがある。器面の調整は



第63图 3区2·3·4号土城窑实测图(1/20)



第64图 3区6·7·8号土坑墓实测图(1/20)



第65図 3区11・13号土墳墓実測図(1/20)

ナデ仕上げである。器面が非常に荒れている。一見すると素焼きと思われる。

D-5号土墳墓 (第40図、図版29)

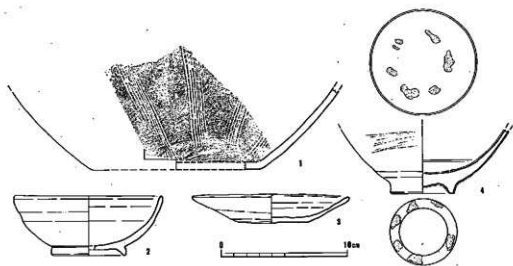
平面形は隅丸長方形を呈するもので120cm×60cmで、深さ30cmである。出土遺物はなし。

D-6号土墳墓 (第64図、図版29)

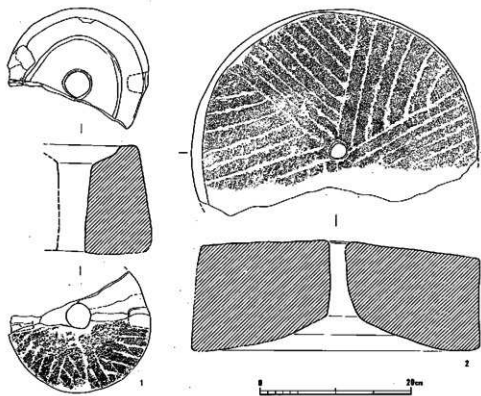
平面形は隅丸長方形を呈するもので129cm×57cmで、深さ18cmである。出土遺物はみられない。床面は水平である。

D-7号土墳墓 (第64図、図版45)

平面形は隅丸長方形を呈するもので、165cm×70cmで、深さ20cm前後である。長軸は東西方



第66图 3区中世土坑墓出土遗物实测图 (1/3)



第67图 3区大冢出土遗物(石器)实测图 1 (1/5)

向で、床面は水平である。出土遺物は床面に土鍾が出土している。東南位に小さな土塚60cm×25cmで、深さ(床面より)25cmが切り込んでいる。

出土遺物 (第36図)

土鍾 (⑦)

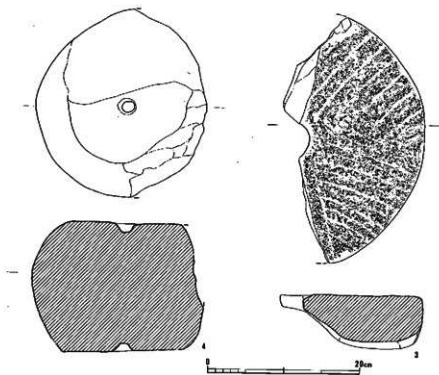
床面直上から出土したもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は軟質である。重量は5gである。

D-8号土墳墓 (第64図、図版29)

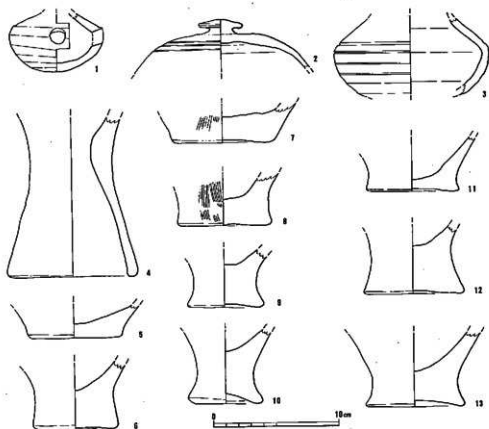
平面形は隅丸方形を呈し、130cm×75cmで、深さは25cmで水平である。覆土上面に小礫がある。時期の新しい柱穴が上からはいつている。1号墳北側に位置する。出土遺物はみられない。

D-9号土墳墓 (第40図、図版29)

平面形は隅丸長方形を呈し、100cm×50cmで、深さ20cmで、床面は水平である。出土遺物はみられない。1号墳か北東部にある。



第68図 3区大溝出土遺物(石器)実測図2(1/5)



第69図 3区大溝出土遺物(土器)実測図3(1/3)

D-10号土墳墓 (第40図、図版29)

平面形は隅丸長方形を呈し、110cm×60cmで、深さ20cmで、床面は水平である。出土遺物は検出されていない。1号墳から北東部に位置する。

D-11号土墳墓 (第65図、図版54)

平面形は隅丸方形を呈し、110cm×50~66cmで、深さが7cm前後で、中央部が焼けている。中央の東側に石の抜き跡がある。人頭大(40cm×28cm×10cm)の丸い河原石と考えられる。深さ11cmである。その中より中世期の土師質小皿が1枚バラバラになって出土している。1号墳の東側である。

出土遺物 (第66図、図版54)

小皿 ③

焼土の中からバラバラで出土したもので、胎土に細粒砂を含み、色調は赤味をおびた黄褐色

を呈し、焼成は良好。口径12.55cm、底径5.75cm、器高2.3cmである。器面の調整はナデ仕上げである。2次的に火を受けている。14～15世紀のもの。

D-12号土墳墓 (第40図、図版29)

1号墳の東北側にあつて、平面形は不整形の隅丸長方形を呈し、80cm×40cmで、深さ19cmで、床面は水平である。出土遺物は検出できない。

D-13号土墳墓 (第65図、図版46)

1号墳と土塁の中央部に位置し、平面形は隅丸長方形を呈し、130cm×35～55cmで、深さは頭の方で15cm、足の方で7cmである。中央部に貿易陶磁器の李朝の陶器の底部破片が副葬されている。

出土遺物 (第66図、図版54)

貿易陶器 (④)

李朝のハケメ茶碗が中央部より出土したものである。胎土には細粒砂を若干含み、ややきめの粗い感じがする。色調は灰色で、釉調は透明釉である。器自体は青灰にかがき、中央部から上には刷毛に白釉をかけている。典型的な李朝初期の大振の茶碗である。見込みには一条の沈線と、その内側目土が6ヶ所つき、高台豊付には6ヶ所目跡とて高台内外面とも釉をかけている。高台径5.2cmである。

磁石 (第58図・②)

覆土中より出土したもので、石質は砂岩で側縁部を砥いでいる。火を2次的に受けている。重量70gである。

以上が中世期の土墳墓である。出土遺物によって、14世紀後半から16世紀始めまでに葬送されたものである。その中心は15世紀中頃とみている。頭を東位に位置し、方向が一定化しているためである。

溝 遺 構 (第67～71図、図版55・56)

3区には溝遺構は東端に大溝(溝1)をもち、発掘の南東端に溝2。溝3は5号墳の周溝となり、その下を溝4とし、溝5が3号墳・4号墳の間に、溝6は地割溝(1号墳の北側)、溝7は2号墳と3号墳の間、溝8は4号墳の東側で溝10と同じとなる。溝9は新しい排水の溝である。(第40図参照)

基本的に遺物が大量に出土したのは溝1の大溝と溝5である。

大溝 (第67～70図、図版47・48)

第40図の様に大溝とは溝1のことである。この中には5号古墳と7号古墳の周溝もはいつてくるが、中世から近世段階で1本化されて大溝となっている。この中に溝3・溝4もはいつてくる。上層の遺物は、大溝で上げ、下部については溝3あるいは5号墳の周溝として上げている。それより下は溝4で上げている。

この大溝の中から出土した遺物は、縄文・弥生時代から近世までの遺物が出土している。

出土遺物 (第67～70図、図版55・56)

石鏃・石斧・砥石・石臼・五輪塔等、ガラス小玉・弥生式土器・須恵器・中世期の土鍋等・瓦器・小皿・貿易陶磁器・近世陶磁器がみられる。

石製品 (第67図、図版56)

石器 (石鏃・石斧・砥石)・石臼・五輪塔について説明付加する。

石鏃 (第67図 ③)

縄文時代の項で説明しているので、参照されたい。

砥石 (第58図 ①)

下層から出土したもので、石材は玄武岩で周縁部を磨き上げている。石斧としてもよいが、刃部が作られていない。ここでは仕上げ砥として使用したものと考えられる。重量330g。

石斧 (第58図 ④)

磨製石斧の基部分で、刃部が欠損している。石材は玄武岩製である。蛤刃の磨製石斧で、弥生時代の所産である。940gの重さである。

石臼 (第67・68図 ①・②・③)

表土層から出土したものである。①は熔結凝灰岩を石材として使用し、上臼で、茶葉をひいたものとも考えられる小形のものである。側方打込み式のもので、両サイドにソケットをもっている。目は6分画である。重さは4kgである。

②は大形のもので、下臼の部分である。目は6分画である。石材は熔結凝灰岩製である。重量は20.5kg。

③も大形のもので、下臼の部分である。目は6分画である。石材は熔結凝灰岩製のものである。重量は5kgである。

これらの石臼は挽き臼として使われているもので、一家に一组はなくてはならない道具である。江戸時代の百姓たちは、米の大部分を年貢米として出し、屑米や雑穀を粉として粉食したものである。この粉食こそが朝夕の糧となった。

五輪塔 (第68図 ④)

石材は凝灰岩製である。五輪の中の水輪と思われる。片側面だけが生きているが、反対側は割れて欠損している。中央部軸受けをもっているものである。断面をみると、中央部がふくらんでいる。大溝の東北側の2区よりの配石の中から出土したものである。重量は11kg。

ガラス小玉 (第49図 ⑥、図版53)

大溝の7号古墳の南側周溝の覆土から出土したもので、色は水色で、気泡がはいっているもので、直径4mmで厚さが2mmである。製品としてはあまり良くない。

弥生式土器 (第69図、図版55)

④は器台で、胎土に細粒砂を多量に含む。色調は黄褐色を呈し、焼成は良で、器面は荒れている。⑤～⑬は全て底部破片である。平底と若干上げ底になっているものと分類できる。

胎土に細粒砂を多く含む、色調は灰黄色～黄褐色に黒味をおびているものが多い。焼成は良好である。器面の調整はハケメとハケメの上部をナデしているもので、内底はナデである。

須恵器 (第69図、図版55)

古墳時代の遺物は、7号墳に5号墳の近くから出土しているものである。

①は試掘の折に大溝上面で出土したもので、甕の壺部の破片である。胎土に砂粒を若干含む、色調は灰白色に黄味をおびている。焼成は良好である。器面には円孔が1個で、調整はヨコナデと底部付近はケズリである。内部ナデである。時期は6世紀後半。

②は大溝の2層から出土したもので、杯・高杯の蓋である。ボクン状の縁を有するもので、口の部分の造りが欠損している。胎土に細粒砂を若干含む、色調は灰灰色から青黒味をおびている。縁の径は3.5cmで、焼成は良好である。器面には縦直下に3本沈線をもっている。調整は天井部は回転ヘラケズリで、沈線を境として、ヨコナデで、内面はヨコナデである。全体をナデ仕上げしている。时期的に7世紀後半から末のものである。

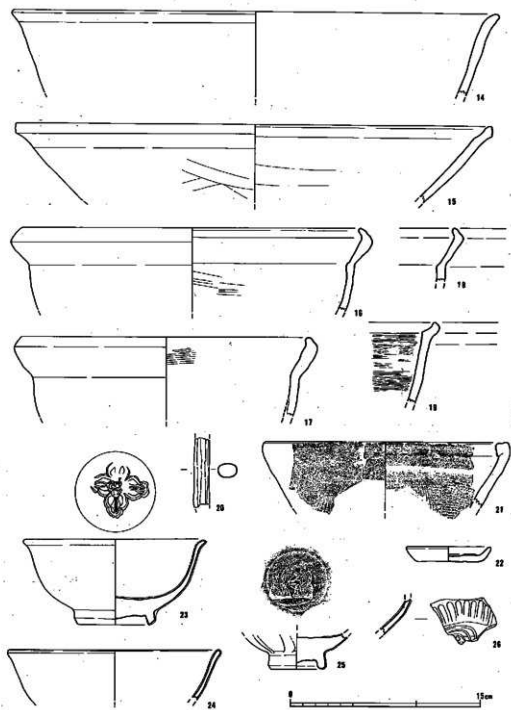
③は大形の甕の破片と思われる。胎土に細粒砂を若干含む、色調は灰青色を呈し、焼成は良好である。復原最大径は12.2cmである。壺形の下半は回転ヘラケズリの後にヨコナデし、底部は回転ヘラケズリの後、沈線を境にヨコナデで、内面はナデである。年代は7世紀前半である。

中世期 (第70図、図版56)

土鍋・鼎・摺鉢と貿易陶磁器である。

土鍋 (⑭・⑮・⑯)

⑭・⑮は大形の鍋で、⑯は中形のものである。⑭は胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色で黒味をおびている。復原口径38.4cm、外面には煤が付着している。焼成は良好で、器面の調整は



第70图 3区大湾出土遗物(中世)实测图4(1/3)

ヨコナデである。良く使用されている。

⑮は、胎土に細粒砂を若干含み、色調は茶色に黒味をおびたもので、復原口径は37.8cm、外面に煤がこびりついている。焼成は良好で、器面の調整は外面は口唇部はヨコナデ、それ以下はケズリである。内面はナデである。

⑯は中形の鍋で、胎土に細粒砂を少量含み、色調は灰黄色で、焼成は良好である。器面の調整は外面はナデで、口唇はヨコナデで、内面はヨコのハケメである。

土器 (⑩・⑰・⑱・㉑)

脚付の甕の破片である。⑱は胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄色を呈し、復原口径は26.5cmである。焼成は良好で、器面の調整は外面はヨコナデで、内面の頸部以下はハケメである。外面には煤がこびりついている。煮焚に使用されている。

⑲は胎土に細粒砂を若干含み、色調は灰黒色を呈する。復原口径は23.0cm、焼成は良である。内面に煤付着している。器面の調整はナデと内面はハケメが残っている。

⑳も中形のもので、胎土に細粒砂を若干含む。色調は黄灰色を呈し、焼成は良好で、器面の調整は内・外面ヨコナデを中心としている。

㉑は甕の脚部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黒褐色を呈し、器面の調整はミガキがかかった様に見える。

摺鉢 (㉒)

口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は青灰色を呈し、焼成は良である。復原口径19.5cmである。器面の調整は外面にハケメで、口唇部はヨコナデ、内面はハケメの後で櫛目を施している。

小皿 (㉓)

灯明皿の一種である。胎土に細粒砂を含み、色調は褐色を呈し、焼成は良である。器面の調整はナデである。

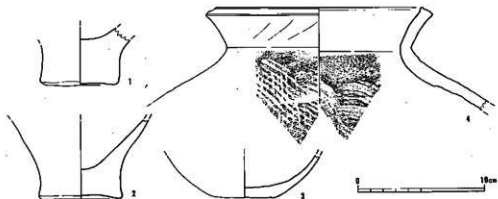
貿易陶磁器 (第70図、図版55)

茶碗が中心に出土している。

㉔は胎土に精良なる粘土を使用し、焼成は良好で、釉調は深い緑に発色している。見込の文様は独鈷とみられる文様である。口径14.5cm、底径6.5cm、器高7.7cmで、龍泉系の青磁である。高台内面の造りは丁寧であるが、釉はかかっていない。

㉕は復原口径は17cmで、胎土に細粒砂を若干含み、色調は灰色で、釉は透明釉で、発色は青緑の薄いものである。焼成は硬質である。龍泉系の青磁である。器面に貫入がはいっている。

㉖は鎗蓮弁の茶碗の底部破片で、見込には釉がかかっていないが、人物形象の印が押されている。孔子の礼記の仁の教えをといている情景である。復原口径は4.6cmで、高台高1.4cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は黄味おびた灰色で、釉は透明釉でその発色は緑黄色に発色してい



第71図 3区溝5覆土出土遺物実測図(1/3)

る。高台内面は釉がかかってない。見込の中心は完全に掻きとられている。重ね焼きの多量生産したと思われる。龍泉系の青磁である。鏡の影の部分が見い出せる。

④は影青の合子の破片が、胎土に精良なる粘土を使用し、色調は灰色で、釉調は影青の青磁で、貫入がはいっている。当時としては一級のものと考える。

近世期

陶磁器の茶碗や壺・向付等が出土している。表土直下の層からである。

以上のことから大溝となった段階は中世～近世の頃で、この時に古墳も削平されたものと考えられる。

溝5 (第71図)

溝5から出土した遺物は覆土中からのものである。弥生式土器と須恵器である。

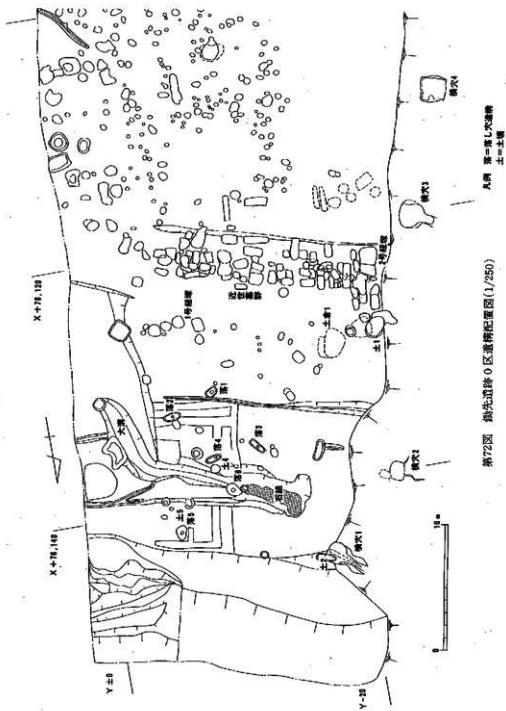
弥生式土器 (①・②・③)

①・②・③も底部破片である。①は底径は6.3cmで、胎土に砂粒を多く含み、色調は黄褐色である。焼成は良である。器面の調整はナデである。②は胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色で、焼成は良である。器面には焼成時にできたと思われる黒斑が内外面にみられる。器面の調整は不明である。③は壺形土器の底部である。胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色である。底径は5.0cmで、焼成はややあまい。器面の調整は不明である。

須恵器 (④)

溝が3号墳と4号墳の間にあるもので、岡古墳とも石室は完全にとばされている。甕の口縁部破片が覆土中より出土している。胎土に細粒砂を多く含み、色調は灰色を呈し、外面は黄味をおびている。復原口径16.4cmで、焼きは良好である。器面の調整は、頸部以下は格子目タタキで、口縁部はヨコナデで、内面の頸部以下はタタキの青海波文である。時期的には6世紀後半から末という年代があてはまる。

以上が3区の溝の説明であるが、基本的には出土遺物は大溝が中心で、小溝からは遺物の出土はみられなかった。



第72图 铜先道岭0区遗址平面图(1/250)

(5) 0 区の遺構と遺物 (第72~126図、図版57~94)

当該区は北の端で、旧果願寺の寺域地区にあたる。面積は1,700㎡の全面調査を実施した。発掘された遺構は近世墓95基が中心であった。これに西の崖面に古墳時代の横穴墓4基が検出され、これは道を挟んで、発掘調査を実施した第2地点の居屋敷横穴古墳群につづくものである。

これと特に興味を引いたのは縄文時代の落とし穴遺構が検出されたことである。

では、時代を追って説明を加える。

1. 縄文時代遺構 (第72~74図、図版57~60)

中央部に集まる様な形で、6基と近世墓地中に2基計8基が検出されている。

その分布を見ると、方向は一定ではないが、対になって、分布が見られるようで、第72図を参照にされたい。

落とし穴1号 (第73図、図版59)

0区の中央部に位置するもので、平面形が隅丸方形で100cm×60cm、中央に方形の柱穴を1本もっている。大きさは20cm×30cmである。断面は2段式になっていて、深さは1段目が40cm、2段目が30cmで、最大深さが中央部分で75cmである。柱穴の床面には人頭大の石が2個残っていた。

落とし穴の構造は中央の柱穴に逆杭を建てる構造になっている。それにはこの床面に残っていた石が原理にかなうものである。

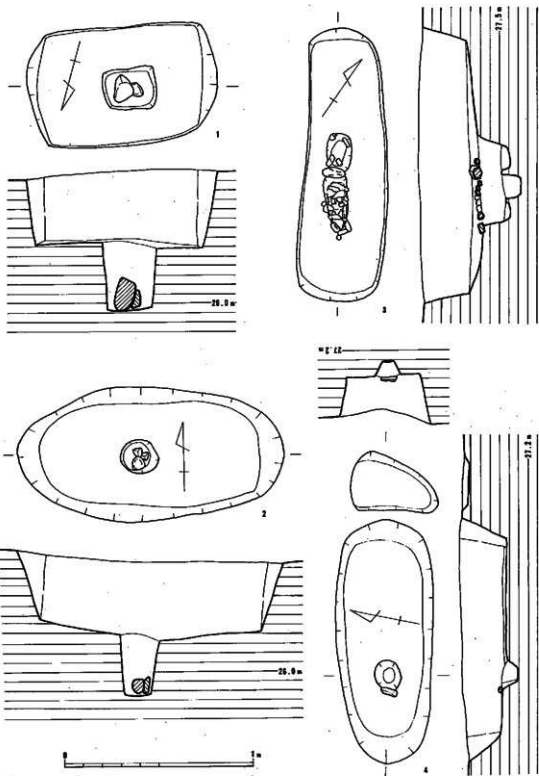
落とし穴2号 (第73図、図版60)

1号より東北にあって、距離的には6m前後離れているものである。平面形は隅丸方形をなし、140cm×70cmで、中央に円形の柱穴を1つもっている。大きさは直径15cmである。落とし穴の断面を見ると2段式になって、1段目の深さは40cmで、2段目が33cmである。最大深さは中央部で73cmを計る。柱穴の床面には拳大の石が2個残っていた。

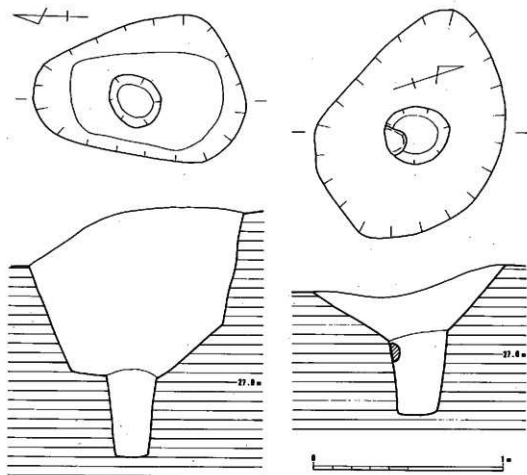
落とし穴の構造は1号と同じである。ただし柱穴の大きさが一まわり小さい。

落とし穴3号 (第73図、図版59)

1号より北西に7mにあって、平面形は隅丸長方形をなし、145cm×40cmで、中央部に3つの円形の柱穴をもっている。一番中央のものが一番深く、大きさも直径15cmで他のものより大



第73图 0区縄文遺構(1~4号落し穴)実測図(1/20)



第74図 0区縄文遺構(5・6号落し穴)実測図(1/20)

きい。北側のものはこれより一まわり小さい。直径7cmである。

落し穴の断面は2段式になっていて、1段目の深さは30cmで、2段目は中央が23cm、北側が16cm、南側が15cmである。1段目の床面のレベルで、子供の手の拳大の石が根がための様に南から中央部にかけて敷石されている。北側にも4石が左右をかためている様にみえる。ただ柱穴の床面からは出土していない。

この状態から考えると3つ柱穴に3つとも逆杭がたっていたと考えることができる。そうすると全ての小石が役に立っていることに興味深い。

落し穴4号 (第73図、図版60)

1号より北へ5mの所にあるもので、平面形は隅丸長方形で、大きさは130cm×50cmである。中央の西側寄りに直径15cmの柱穴を1つもっている。断面は2段式のもので、1段目の深さは25cmで、2段目が10cmである。1段目の床面は水平で、柱穴の西端で細長い小石が検出された。逆杭を固定するにはこまかいものである。

落し穴5号 (第74図、図版60)

1号より北へ13m行き、D-5の西側にあるもので、遺構としては先端部に近いものである。平面形は隅丸方形を呈し、大きさは110cm×70cmである。ほぼ中央に直径25cmの柱穴を1つもっている。断面は2段式のもので、1段目の当該区の中では落し穴らしさがするものである。下面にあるために残りがよかった。

落し穴6号 (第74図、図版59)

3号から北東へ4mのところであって、1号から北西8mである。石組遺構東端に位置するもので、平面形は不整形で、大きさは120cm×90cmである。ほぼ中央に直径30cmの柱穴を一つもっている。断面は2段式で、1段目は25cmほど摺鉢状に落ている。2段目の柱穴は43cmの深さで南端、拳大の小石が張り付いている。これは逆杭を固定するには可能である。

この他にも近世墓の墓の下に2基あらわれている。20号近世墓の下と、28号近世墓の下にみられる。

しかしながら、出土遺物は見られない。この様な落し穴遺構は川の上遺跡からも出土している。

2. 弥生時代遺物 (第72図)

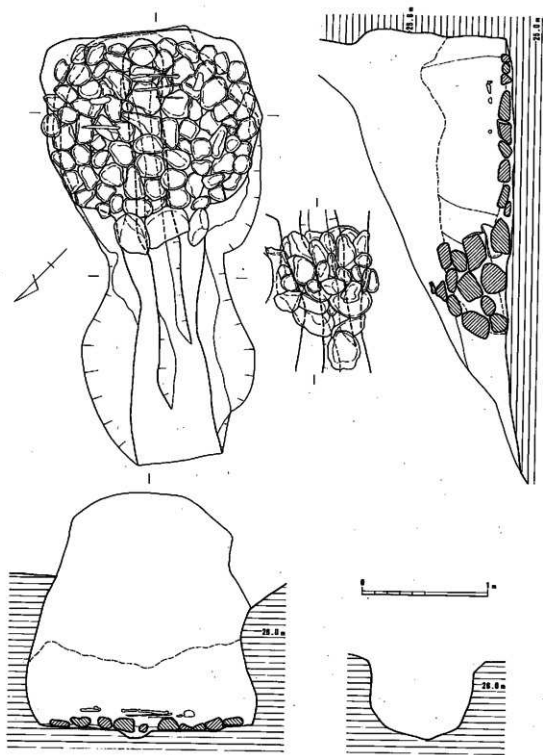
北端の大溝から出土した遺物、これであるが、まとまって図示できる遺物はみられなかった。小破片で弥生式土器の底部が出土している。上層からは近代の遺物が出土している。基本的には近世末～近代にかけて排水溝として使用されている。

3. 古墳時代の遺構 (第75～81図、図版61～67)

炭面に等間隔で横穴墓が4基検出された。北隣の居屋敷横穴群の続きである。小字も居屋敷であるため、居屋敷横穴南支群としている。

横穴1号墓 (第75図、図版61・62)

道側に一番近い位置で、残りの状態は良好である。主軸をN-45°-Wで、墓道と支室をもつも



第75图 0区横穴1号墓实测图(1/30)

のである。

川の崖面から奥壁までの長さ340cmで、支室は幅が170cm、奥壁から仕切石までの長さ170cm、墓道部の入口まで170cmである。墓道部は最大幅が140cm、下端で60cmで、全長170cmである。閉塞の状態は長さ120cm間に積まれ、高さ60cmで閉塞されている。最終埋葬以前の閉塞石には間層が目立ないが、上部の閉塞石は石材の間に土砂を多く含む。支室の床面には中央に排水溝をもち、幅30cm、長さ250cmである。溝は極めて浅く奥と先端では高低差は5cmである。支室の奥壁近くに、床面から頭を南位として人骨が残っていた。人骨は成人男性のもので、副葬品は検出できなかった。

岩盤を切り込んで横穴墓が掘られ、支室の床石は河原石を敷石としている。岩盤に掘られた排水溝は、その部分に蓋状に石の長手を溝と直交させている。そしてその間層をささむ、但し、蓋は仕切石よりも内側のみである。

床石は仕切石内側までで、墓道部にはない。横穴墓の全体としては、歪みが目立つが、礎を含み、軟・硬部がいらまじった地盤のためにやもう得ないものである。天井部の崩壊が数ヶ所みられる。

横穴2号墓 (第76・77図、図版63・64)

1号墓の南にあって、造出し状の羨道の意識をもったものである。その南側の造出し部は削平されている。主軸をN-63°-Wで西側が入口となる。川辺の面が墓の道となる。横穴墓の支室の平面形に鋼張の隅丸長方形で、30cmほど張り出して、60cmの羨門部をもうけている。袖石風に一石を立石させ、外側の石を3段に構築している。横には2石をならべて60cm幅で羨門部を意識的に造り上げている。

墓道部は羨道の入口より60cmほど北側にはいる。西側80cmほどで崖面に同化している。横穴墓は岩盤をくり貫いて造営されているもので、支室の床面は岩盤に河原石をもって敷石されている。

支室をつくるために、意識的に奥壁から10cm前後の傾斜をつけて床となし、羨道の1/3の所で10cmの段をつけて下がり、そして羨道から墓道入口で50cm順々に下がってくる。70cm前後の高低差をもっている。

出土遺物は南側の羨道部に蓋と高台付杯が検出された。

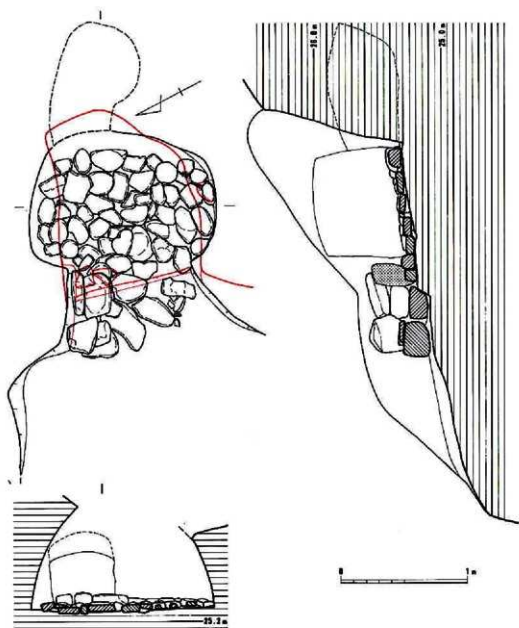
後世にイモ穴が掘られている。

出土遺物 (第77図、図版82)

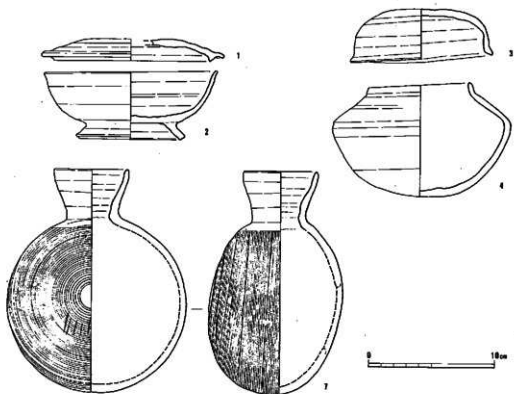
羨道部の南側から出土したもので、須恵器の蓋と高台付杯である。

蓋 (Ⅰ)

天井部に機がつくもので、復原口径が14.6cm、胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色で、赤味



第76图 0区横穴2号墓基础测图(1/30)



第77図 0区横穴2・4墓出土遺物実測図(1/3)

をおびている。窯の温度が上がっていない。所謂素焼きである。他はヨコナデ、受部をもっている。

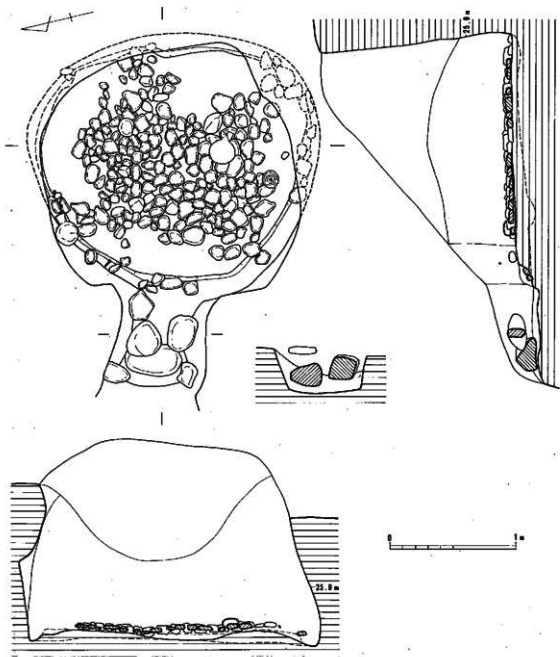
高台付杯 (②)

胎土に細粒砂を多く含み、色調は黒味をおびた灰青色で、焼成は良好である。口径13.7cm、器高5.3cm、底径8.7cmである。器面の調整は体部下半がヘラケズリで他はヨコナデ、内面はナデ仕上げで、製品としてはよくない。

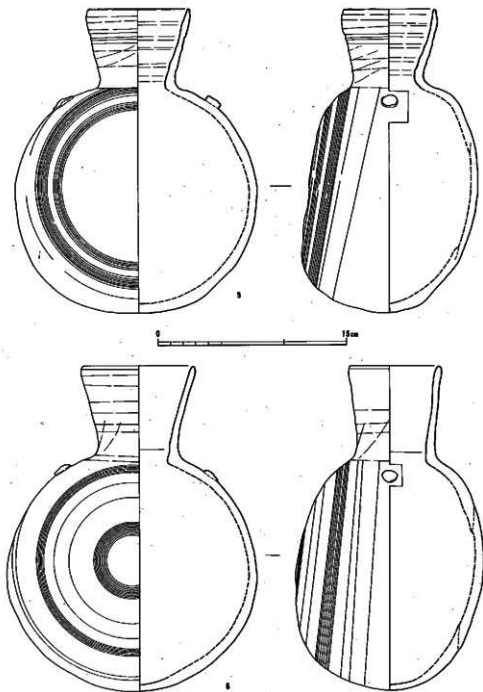
時代的には、出土遺物から須恵のIVBと考えられる。年代は7世紀初頭から前半頃をあたえている。

横穴3号墓 (第78～80図、図版65・66)

2号墓の南側にあつて、墓道の一部を残して削平されている。横穴墓は岩盤をくり貫いて造営されているもので、奥壁が高く順々に川側が低くなっていく。主軸をN-64°-Wで西側が入口となっている。

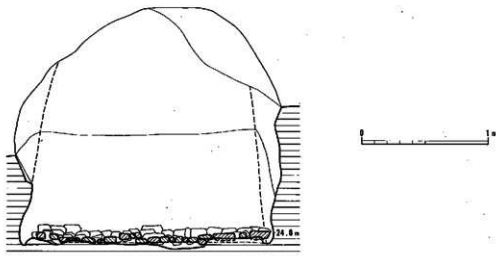
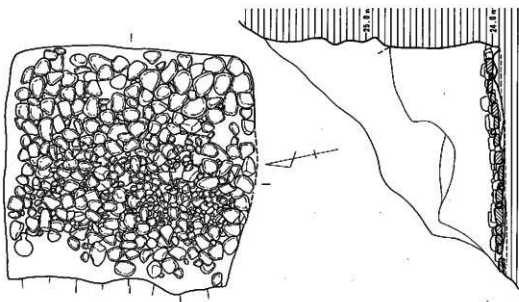
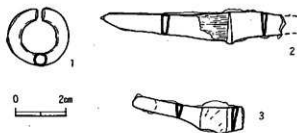


第78图 0区横穴3号墓实例图(1/30)



第79图 0区横穴3号墓出土遗物实测图1(1/3)

第80图 横穴3号墓出土遺物
实测图2 (2/3)



第81图 0区横穴4号墓实测图(1/30)

玄室の平面形は直径230cmの円形をなしているもので、それに残長1mほどの墓道を付設しているものである。奥壁から壁に沿って、幅が10cm前後の深さ10cmの排水溝を掘っている。床には河原石を敷いて床面を造っている。しかしながら1/2は後世の人達によって荒されている。天井部までを横断面から見るとアーチまたはドーム状をなしている。出土遺物はこの横穴墓が一番もっていた。

遺物の出土状態は排水溝の中から刀子・耳飾が検出されている。土器類についても北壁側の中央より前面に提瓶と蓋が出土し、中央部より南に提瓶と直口壺が出土している。両提瓶とも口を奥に向けており、直口壺は口を下に伏せた状態で出土していた。蓋は横向きであった。

墓道は10cmほど一段下がった状態で幅が80cm、残長が1mである。閉塞時に使用した河原石が残っている。墓道の深さは30cmである。断面はU字形をなしている。墓道からの出土遺物はない。

出土遺物 (第77・80図、図版65・82)

床面と溝中より出土したもので、耳飾・刀子2点と須恵器であった。

耳飾 (①)

金メッキのリングである。青銅に金箔を張ったもので、径が2.3cmである。重量15.2gで重さを感じる。

刀子 (②・③)

南側の奥壁から出土したもので、②は刀子の柄部分で木質部も残っている。刃部は細身でよく使用されている。③も②の横から出土したもので、刀子の柄の部分である。ハバキの位置が若干残っている。刃部の断面は二等辺三角形である。

須恵器 (第77図、図版82)

蓋 (③)

直口壺とセットとなるもので、④にともなう。胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色で口径11.3cm、器高3.6~4.3cmでひずんでいる。器面の調整は天井部は回転ヘラケズリで、他はナデ仕上げである。焼成は良好で、器形にひずみがある。

直口壺 (④)

③とセットとなるもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黒味をおびた灰青色で、口径8.0cm、器高9.0cmで、最大径14.0cmである。口が直口する。器形は肩部にひずみがある。焼成は良好で、器面の調整は底部はケズリで、他はヨコナデで、ナデ仕上げである。

提瓶 (⑤・⑥)

⑤は中央より北側より出土、⑥は中心部の南で、実測中心線にのっている。前者の⑤は、胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色で黄味をおびる。口径7.3~8.0cmで、器高24.0cm、最大胴径19.2cmである。焼成は良好である。器面には口縁部直下に2条の沈線をもち、頸部にボタン状

の把手をもつ、背部にはカキメをもっている。口縁部から胴部には灰をかぶっている。調整はヘラケズリとナデを併用している。

⑥は胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色で、黒味をおびている。口径7.0cm、器高25.2cm、最大胴径20.0cmである。頸部内面と外面半分ぐらいは、灰かぶりの為、自然釉になっている。焼成中に置いた置台の跡が残っている。焼成は良好で、胴部とカキメとナデである。

出土遺物から、須恵器は須恵IV型式にはいるものと考えられる。年代的には6世紀末から7世紀前半をあてる。

横穴4号墓 (第81図、図版67)

3号墓の南に位置し、墓道部と玄門部を削平されて、玄室の平面形は胴張りの正方形を呈している。長軸にN-78°-Wで、西方向より墓道入口としたもので、南北方向は395cmと東西方向は残長365cmである。岩盤をくり貫いて横穴墓を造営したもので、奥壁と周囲の壁には幅10cm、深さ5~7cm前後の排水溝がまわっている。中軸線の両側にも幅35cmで、深さ8cmの排水の溝が確認されている。

床面には河原石を敷石としている。奥壁と西端では6~8cm高低差がある。奥が高く西が低い。横断はほぼ水平であるが、北と南にU字形の排水溝をもつ、傾斜に沿って扁平な河原石を敷いているため奥壁近くが高くなる。

出土遺物は北西端のコーナ付近で、小形の提瓶が床面より出土している。

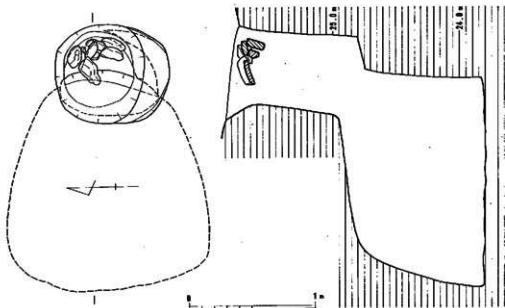
出土遺物 (第77図、図版67・82)

玄室の北西コーナ付近から出土した提瓶である。

提瓶 (⑦)

胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色で、口径6.0cm、器高17.6cm、最大胴径14.1cmである。器面の調整は、胴部はカキメを施し、口縁から頸部直下までヨコナデ仕上げである。胴には工具痕がのこっている。焼成は良好である。

出土遺物から当横穴墓の年代は、6世紀後半から終末に位置付けられる。型式から言えばIV Bである。



第82図 0区1号土倉実測図(1/30)

3. 中世紀の遺構 (第72図、図版57)

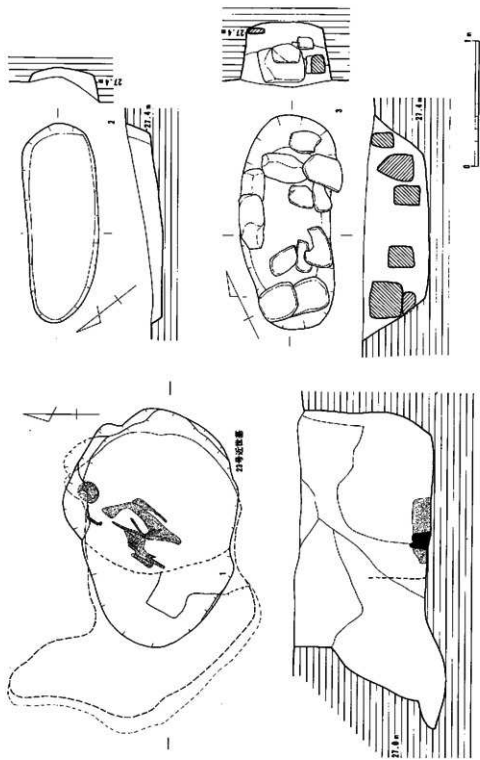
中世の土倉である地下式横穴が1基検出された。D-3の東側1mの所に位置している。

0区土倉1号 (第82図)

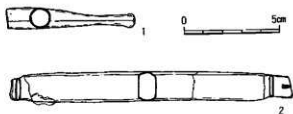
上部構造は、平面形を円形をなした直径80cmで上部に人頭大の石が東側に集まっていた。蓋を固定するための石と思われる。東側を直に1m掘って、160cmの奥行で掘り抜き、底面から120cm天井をこしらえたものである。断面は2段目で袋状になっているもので、入口を東側にもってきている。この構造では二重の蓋ができる。1mの下にも閉鎖蓋ができる。中間に一段ステップをもたしたことが特異例となる。出土遺物はみられなかった。この様な形態のものは3区にも出土している。3区と同時期と考えられる。

4. 近世・近代の遺構 (第83～126図、図版71)

果願寺の寺域の遺構と遺物となってくる。境内地には墓地と石造物の供養塔常夜燈等のものがおかれている。今回の調査では建物に付属する土塼・カマド・石組等遺構と、石造物で供養塔が撤去された下の遺構、墓地での墓碑撤去後の改葬後の遺構が残っていた。すなわち、近世墓が中心である。



第83图 0区1~3号土坑、23号近世墓平面图(1/30)



第84図
0区4号墓出土
遺物実測図(1/4)

大溝 (第72図、図版58)

当該地区の北端部にあって排水溝として使用されたもので、ここでは大溝として名称を付加した。基盤面は弥生式土器の包含地で、近世中期頃から近代にかけて、田中渡橋の拉幅等の条件からと、果願寺の建て替え、増築をふまえてこの大溝をつくったものである。出土遺物から江戸末期～明治前半頃である。

出土遺物 (第85図、図版70)

覆土中から出土したもので、近代初頭のものである。

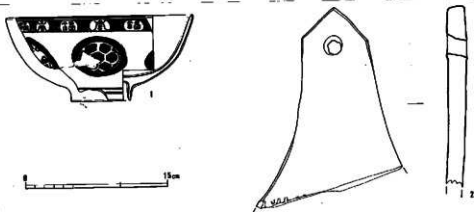
茶碗 (①)

小振の肥前系の染付茶碗である。胎土には精良なる粘土を含み、胎土の色調灰色である。釉調は透明釉で、呉須の発色は良い。

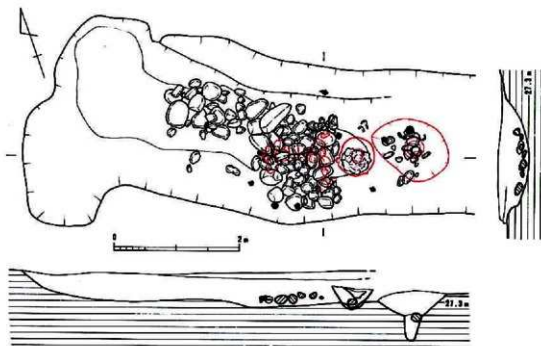
下板 (②)

現代では金属になっているもので、陶器で作られている。胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色で、釉は表に褐釉をかけている。裏面にはかけていない。型はハゴ板形のものである。いわゆる大根おろしやわさびおろし・もみじおろしに使用するものである。

以上の出土遺物によって、大溝は排水溝として近代の所産とした。



第85図 0区大溝出土遺物(近世)実測図(1/4)



第86図 0区石組遺構実測図(1/60)

0区1号土壌 (第83図、図版57)

土倉1号の西横にあって、23号近世墓が切っているものである。

23号近世墓は平面形が円形を呈しているために早稲に入れて埋葬したものである。江戸中期以降に六道銭等の副葬品は見い出せなかった。

その西端を切ってほられているもので、地下式の土倉なのか不明である。人骨等も出土していないので、近世墓としても不明である。

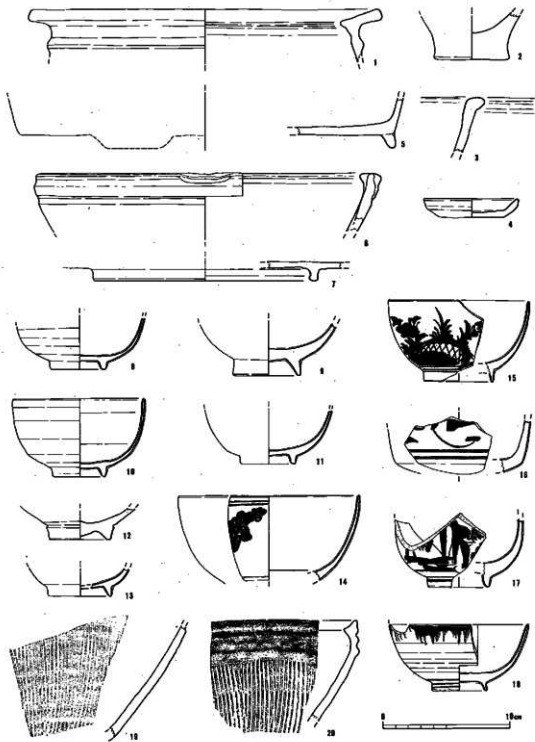
以上のことから、土壌として処理をした。

0区2号土壌 (第83図、図版57)

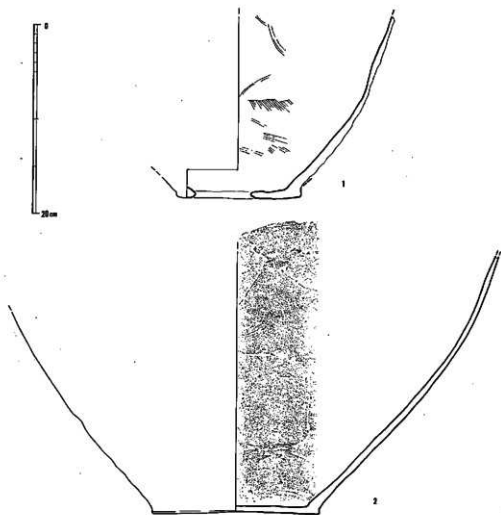
1号横穴墓の上において、平面形が隅丸長方形である。断面はU字形をしている。出土遺物はみられなかった。

0区3号土壌 (第83図、図版69)

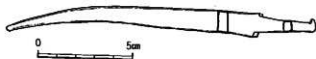
石組遺構の南にあって、平面形は隅丸長方形を呈し、人頭大の河原石が上面にのっている。この中からは遺物の出土は見られない。寺の柱の基礎として使用されたものと考えられる。



第87图 0区石碛遗址出土文物实例图1(1/3)



第88図 0区石組遺構出土遺物実測図2 (1/4)



第89図 0区石組遺構出土遺物実測図3 (1/2)

0区4号土壌 (第72図、図版57)

石組遺構の東側にあるもので、平面形を円形となし、断面は摺鉢状に落ちる。覆土中からキセルと彫刻に使用する工具が検出された。

出土遺物 (第84図、図版82)

覆土中から出土したもので、キセルと工具の2点であった。

キセル (①)

タバコを吸う道具で、吸口部分のものである。所謂長キセルのもので、吸口は銅製品である。長さ7cm強で、ラオ竹の痕跡も残っていない。

工具 (②)

彫刻の細工物に使用されたものと思われるが、切り出刃として使われ、反対側はタガネ状に使用されたと考えた。若干疑問の点はあるが、一応ここでは工具としてまとめた。鉄製品。

以上のものは近世末期から近代のものである。

0区5号土壌 (第72図、図版57)

落し穴5号の東横にあって、平面形は隅丸方形を呈し、深さは50cmである。覆土からも出土遺物はみられない。

石組遺構 (第86・89図、図版69)

当該調査区の北側の中央寄りにあって、3号土壌と2号土壌にはさまれた部分に位置し、平面形は隅丸長方形をなして、地山より一段深まっているそれに河原石を全面敷いたものである。

東端に大甕の埋置土壌をもっている。その横に縄文時代の遺構の落し穴6号遺構が隠れているものである。基本的には旧果願寺さんの坪庭の露地と厨となるわけである。この埋置土壌の大甕は尿甕である。甕は底部は付近のもので二重に重ねてあった。最初の大甕の底部に扁平な河原石を置いて、上甕を重ねていたわけで、上甕の底部を打欠いて穿孔しているものである。露地の露地の中から近代・陶磁器を中心に遺物が出土している。

厩屋遺構 (第86図、図版69)

旧御寺さんのトイレである。一時代前のものであると考えられるが、現在まで引継いだものとも思われる。本堂と家屋との境に位置するもので住職一家専用のものではなかったろうか。

尿甕と使用されたのが埋置土壌の大甕であった。大甕の状態については前述に記した様に二重に重ねたものである。甕と甕の間に扁平な河原石を利用している。上甕の底を打欠いて穿孔している。

出土遺物 (第87～88図、図版83)

尿甕とし利用されたものである。上甕と下甕の2重に重ねてあったもの。

上甕 (①)

底部破片で胎土に細粒砂を多く含み、色調は灰黄色と黒味をおびている。底径13.3cmで、底部が打欠いている。焼成は良く、埋置甕であるため器面は剝離している。内面はハケメが残っ

ている。

下壺 (②)

底部破片で、胎土に砂粒を多く含み、色調は黄灰色で、所々に黒味をおびている。底径17.5cmで、焼成は良好である。しかしながら埋置甕であるため表土は剝離している。内面の器面調整はタタキと底部付近は粗いハケメである。

露地出土遺物 (第87～88図、図版83)

坪庭の露地より出土したもので、弥生式土器と中世期の遺物・近現代の陶磁器が出土している。遺物は浮いた状態のものであった。

弥生式土器 (①～③) ①・③は口縁破片②は底部破片である。①は働先口縁である。口縁直下に一状の凸帯を有している。弥生中期の土器である。②は底部の破片で、平底を呈している。③は口縁破片である。三者とも、胎土には細粒砂を含み、色調は黄褐色～茶褐色である。器面の調整はナデである。

中世期の遺物 (④・⑤・⑥・⑦)

④は土師器の小皿、⑤は火舎、⑥は片口である。⑦は盤である。

④は口径7.5cm、器高1.5cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は褐色を呈し、焼成はあまり良くない。⑤は胎土に細粒砂を多く含み、色調は灰白色で、全体に黄味をおびている。復原底径は30cmである。焼成はあまい。器面の調整は磨滅している。⑥は片口の鉢で、口径27cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄色である。焼成はあまい。器面の調整は全体に磨滅している。⑦は胎土に細粒砂を含み、色調は褐色である。焼成は良好で、器面の調整はナデ仕上げである。

近・現代陶磁器 (⑧～⑩)

⑧～⑩は茶碗である。

⑧は、胎土には精良なる粘土を使用し、色調は緑味も灰色を呈し、焼成は良好である。釉調は透明釉で、ネズミ色の発色をしている。器面には貫入がはいっている。高台内底まで釉がかかっている。見込みには火入れの時の細砂が落ち込んでいる。製品としては、普通である。

⑨は生焼けのものである。胎土に細粒砂を若干含む、精良なる粘土を使用し、色調は白茶地である。釉は内面にかかって白釉である。外面は素地のままである。

⑩・⑪は遠州高取系のものである。両者とも小振の茶碗で、胎土に細粒砂を含む、精良なる粘土を使用し、色調は黄灰色を呈している。釉は透明釉(長石釉)である。細い貫入がはいっている。口径は10.6cm、器高は6cmである。見込みに火入の時の砂が落ちている。⑩も⑪によ

く似たものである。焼きといい、釉調も同じもので、底径が3mmほど大きい。遠州高取である。現代に近いものか。⑫は茶焼きのもので、胎土に細粒砂を含み、色調は褐色を呈するもので、底径は4.8cmである。⑬、胎土に極めて細かい細粒砂を若干含み、胎土の色調は灰色で、釉調は灰釉である。底径は5.0cmで、高台内面にも釉がかかっている。⑭～⑯までは現代に近い陶器（土物）である。⑭～⑱は磁器物で、⑲は大振りの茶碗で、胎土に精良なる粘土を使用し、釉調は透明釉で、復原口径は14.4cmである。外面に花文を呉須にて描いている。⑲は胎土には精良の粘土を使用し、釉調は白釉で、復原口径は11.2cm、器高6.4cm、底径は5.5cmである。器面に草花文を呉須で描写している。⑳は向付と思われるが、胎土に精良なる粘土を使用し、釉調は透明釉であるが呉須の発色が悪いため、釉調が一定しない。表面に焼きぶくれがみられる。㉑は茶碗で、胎土に細粒砂を含み、釉調は透明釉であるが呉須の発色が悪いため緑味灰みtainな釉調となっている。高台内面まで釉がかかっている。㉒は近世のもので、外面には口唇直下から呉須の濃淡によって三角文をアレンジしている。口径が11.0cm、器高5.3cm、底径4.4cmである。胎土に精良なる粘土を使用し、釉は透明釉で、発色は白っぽい灰色を呈するもので、高台内面まで釉をかけている。見込みには釉を掻き取っている。重焼きを行っている。これの小振りのものは54号近世墓の副葬品となっている。同時期のものと考えられる。

摺鉢 (⑳・㉑)

両者とも日常雑器で、胎土に細粒砂を多く含み、色調は茶褐色で、釉は褐釉をかけている。内面の溝状のハケメで単位7～8本である。薄手の土物である。㉑は口縁部破片で、㉒は胴部の破片である。

青銅製品 (第89図、図版83)

南朝地山直上から出土したもので、青銅製の火箸と思われる柄部分に細竹を差し込んで、あるいは木質部を固定するたもの頭がL字に曲っている。全体は蛇行しているが、使用されて曲ったものとする。重量感があるものである。重量55.9gを計る。

以上のことから、石組遺構から出土したものは現代に近いものが多く、一部に古いものもある。この石組遺構は先に述べた様に坪庭の露地としての性格をもっていると考えられる。

竈遺構 (第90・91図)

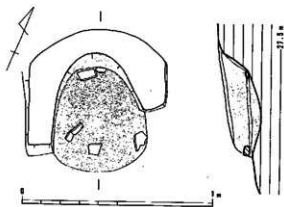
現代の建物の基礎の東側で検出されたもので、炊事用の竈であった。この守の前の建物時代のもので、江戸期のものであると考えられる。

竈は内面が赤変し、床は灰層が堆積していた。灰層は約10cmほどの厚さであった。内部には

瓦質の土器片が出土している。東側の袖をカットされている。小形のものである。両袖まで80cmで、焼成室は50cmで半楕円形をなしている。

出土遺物 (第91図)

瓦質の大甕の破片である。焼成室の中で、どの様に使用されていたか不明である。甕の断面を見ると灰層の上に瓦質土器片がみられる。



第90図 0区カマド遺構実測図(1/20)

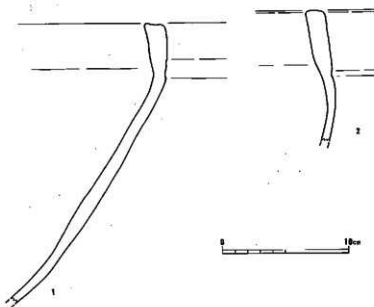
大甕 (①・②)

両者とも瓦質の土器である。それも口縁部が中心である。①は口縁部が内傾し、胎土に細粒砂を多く含む、色調は茶褐色で焼締められている。2次的に火勢を受けている。焼成は良好である。②は口縁部が若干内側に傾斜し、胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色で、黒味をおびている。若干焼成があまく、生焼け気味のものである。2次的な火勢を受けている。

以上のことから炊事の折りに、子供達に芋や銀杏を焼くためにこれらの破片をもってその上で焼いたものと考えたと話の筋道が通る。瓦質土器の年代も古いので、灰の上面の埋土から

出土したならば、廃棄された時の混在物として理解されるが、灰層直上であるから、こんなことを考えた。

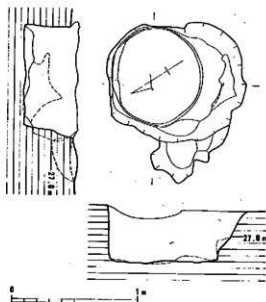
江戸時期の甕の遺構である。当時は小さな寺であったと考えられる。



第91図 0区カマド遺構出土遺物実測図(1/3)

挿入土壌 (第92図)

ほぼ中央部の石組遺構の西側にあるもので、直径80cmの炭化した木材が検出された。一応ここでは桶としている。深さは40cm前後で、炭化した材は30cmまで残っていた。ここではこの土壌を屑とした。



第92図 0区挿入土壌実測図(1/30)

5. 近世の遺構 (第93図、図版71)

0区は果願寺の旧境内地で、本堂の他に供養塔・常夜燈の石塔、六地藏等、石造物と、そして境内墓地(近世～現代)が立地していた。

この地区は第2次調査として、翌年の平成元年に夏の調査になった。改葬公告期間の期限がきたのを確認して発掘調査となった。近世墓95基と経塚2基を検出している。

近世墓 (第93図、図版72)

表2は近世墓一覧表である。墓壙の平面形を見ていただければ、A長方形とB正方形とC円形・D楕円形の4種類に大別できる。それに釘とをからませて、全体の配置図を見ていただきたい。これによって、墓地の切り合い関係等も表示しているので、ご理解いただけるであろう。表3は出土遺物関係をまとめてみた。近世墓出土遺物と被葬者の関係が理解できる。

出土遺物は六道銭が中心である。これらの考察については後のIV-2で詳細に述べている。また、被葬者の問題についてはIV-1で、詳細な分析を行っている。

ここでは、代表的な墓地を中心に事実関係のみ述べる。出土遺物で興味深いものと切り合い関係が多いものを図示した。

各墓については、表2・3と第93図の近世墓の配置図によって理解できる。墓の番号は発掘順である。

では79・65・32・85・77・75・34・76号墓から説明する。

表2 近世墓一覧表

※墓室平面 A長方形、B正方形、C円形、D楕円形

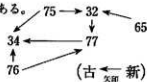
番号	墓室内容 ナテ×ヨコ×深さ (cm)	墓室 平面	人骨 有無	副葬品	釘	切り合い	備考
1	68×90+ α ×7	D	×		×	1←93	
2	60×90×1	C	○	六道銭	○		21←5 46の上
3	110×55×12	A	○	人骨片			
4	60×60×3	B		六道銭	×		
5	100×60×35	A	○	六道銭、鉄銭	×	11←5	
6	60×1054×11	A	○	六道銭	×	6→16	
7	55×60×13	B	○		○	11←7	
8	180?×90×47	D	○	六道銭、土器	×		
9	50×50+ α ×12	B	○		○	9←18	
10	50×75×16	A	×	六道銭	×	16←10	
11	57×95×20	B	×	六道銭	○	11←5	
12	A 90×40×20 B 300×60×20 C 50×55×25	A B B	○		○		
13	95×50×50	A	○	六道銭、茶ワッ、炭	×	12←13	
14	50×60×15	C	○		○		
15	50×35×20	A	×		×		
16	50×70×2	B	○	六道銭	×		
17	120×95×24	C		六道銭	×	17→88	
18	60×100×27	A	○	六道銭	○		
19	120×65×21 (100×40×31)	A					
20	100×120×42	C					
21	198×60×21	D					
22	150×67×18	A		六道銭	○	68←22 ↑ 41→24→40	
23	110×100×90	C	○		×		
24	90×60+ α ×40	B	○		○		
25	100×40×21	A	○	六道銭、土器、炭	○		
26	90×60×30	D	○		○		
27	95×45×5	A	○	六道銭、玉	○	64←27→92	
28	110×80×10		○	石ぞく、土器	○		
29	65×40+ α ×22	B		六道銭	×		
30	90×42×24	D		六道銭		14←67 ↑ 15←29←30 ↓ 66	
31	95×40×3.5	D	○	六道銭	×		
32	80×65×45	A	○	六道銭	○		
33	28×22×15	D	○		○		
34	50+ α ×100+ α × 40	D	○	六道銭	○	34←76←77 ↑ 75	
35	100×60×32	D	○	六道銭	○		
36	80×40×25	A	○	六道銭、土器、一銭	○		

	基 積 内 容 タテ×ヨコ×深さ (cm)	基積 平面	人骨 有無	副 葬 品	釘	切り合い	備考
37	120×80×25	C					
38	100×90×13	C		六道銭		37→38→87 ↑ 54	
39	100×60~80×34	D					
40	105×90×63	A			○	24→40	
41	50×85×58	B		六道銭	○	下に落し穴 68→41	
42	70×55×42	D		六道銭、土器、瓦	○		
43	25×30×4	C	○		×		
44	60×70×50	B				11→44	
45	80×100×20	D	○	土器	○	45→47 ↓ 46	
46	100×80×50	B	○		○		
47	60×100×30	A	○		×		
48	80×40×20	D					
49	80×60×40	D					
50	150×65×30	D					
51	40×40×40	C					
52	90×80×30	B					
53	55×50×20	B					
54	50×80×15	A	○	六道銭、土器、カンザシ	○		
55	100×50~80×30	D			×		
56	50×50×18	B			×		
57	40×80×30	D		六道銭、土器	×		
58	40~90×80×21	B	○		○		
59	35×35×18	C					
60	100×45×5	D					
61	50×90×7	A	×		○	82→61	
62	52×75×12	B	×	六道銭、キセルの口 と先	×		
63	95×60×33	A	○	六道銭、鉄	○	66→63	
64	52×35+α×6	A	○		○	64→90	
65	95×55×40	A	○	六道銭	○	65→12	
66	52×40+α×11	B	○	六道銭	○	66→63	
67	80×50×40	D	○	茶フン	○		
68	90?×60×8	A			×	68→22 、40	
69	65×80+α×17	B	○	六道銭、鉄銭	×	10→69	
70	60×27×10	B	○		○	70→2	
71	80×35+α×20	D	×		×		
72	100×70×31	A	○		○	72→71→70	
73	45×75×15	D					
74	108×82×46	C	○	六道銭	○	下に落し穴	
75	50×48×15	D					
76	68×50×30	A	○	六道銭		77→76	
77	100×61×55	A	×	六道銭	○		

	葺 内 容 タテ×ヨコ×深さ (cm)	葺 平 面	人 骨 有 無	調 整 品	釘	切 り 合 い	備 考
78	68×82×22	C	○	六道銭	○	26→78→95	
79	95×45×8	A		炭	×		
80	50×40×38	A	○	六道銭			
81	70×47×31	A	○	六道銭、人形	○		
82	80×30+ α ×20	B		六道銭			
83	50×90+ α ×16	A	○		○	92→83+66	
84	50×70×15	B	○		○	84+63	
85	60×30+ α ×10	A					
86	90×50×21	A	×	六道銭	×	86+25	
87	90×70×47	A		六道銭		38→87+54	
88	8×90×34	A	○	六道銭	×	17→88	
89	50×50+ α ×6	A	○		○	89→90	
90	90×50×12	A	○	六道銭			
91	63×45×31	A		六道銭	○		
92	60×40×28	A	×	六道銭、漆	×	27号基の下	
93	110×65×18	A	○			1+93	
94	60×80×39	A	×	六道銭		61号の下	
95	90×60×27	B	×	六道銭		78号の下	

79・65・32・85・77・75・34・76号近世墓 (第94図 ①)

8基の近世墓が切り合っている。発掘の西側で2号一字一石経を出した遺構の北東の近隣地である。墓塚の平面形は長方形と正方形の箱型のものである。但し14号を除いて、人骨は65号北頭位右側臥屈葬で、32号も北頭位、34号も北頭位右側臥屈葬である。



5号近世墓 (第94図 ②)

墓塚の平面形は長方形の箱型で釘も出土している。頭を西位で埋葬。

22号近世墓 (第94図 ③)

墓塚の平面形は長方形の箱型のもので釘も出土している。頭を西位で埋葬。

54号近世墓 (第94図 ④)

墓塚の平面形は長方形の箱型であるが、正方形のものが2つ切り合ってもプラン上では可能である。頭を北位に向けて埋葬されている女性の人骨で、かんざしが1点出土している。六道銭と女性の人骨が出土している。人骨は2体はいていた。

出土遺物 (第98図、図版15)

かんざしが北端部で、頭骨片が付着して検出している。全長が15cm前後で、先端から1cm~2.8cmの間に布飾の円形ものがつくもので、その間だけに銀箔でとめられている。それ以下は二股となっている。二股から5cmのところまで頭骨片が付着している。2本の脚部は細い鉄心をいれて竹ひごでまき、それを漆で固定しているものである。木質部が残っている。全体は漆でぬらされたものである。

土器 (第99図 ②)

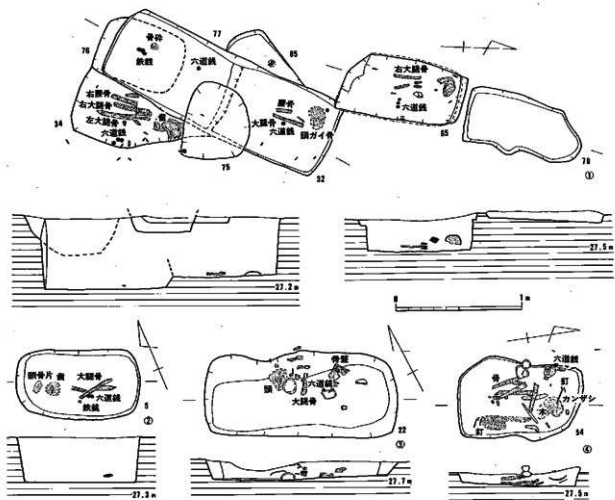
覆土中から出土した弥生式土器の口縁部の破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は良好である。

31号近世墓 (第95図 ⑤)

墓塚の平面形は長方形である。南西端に骨幹が残っていた。

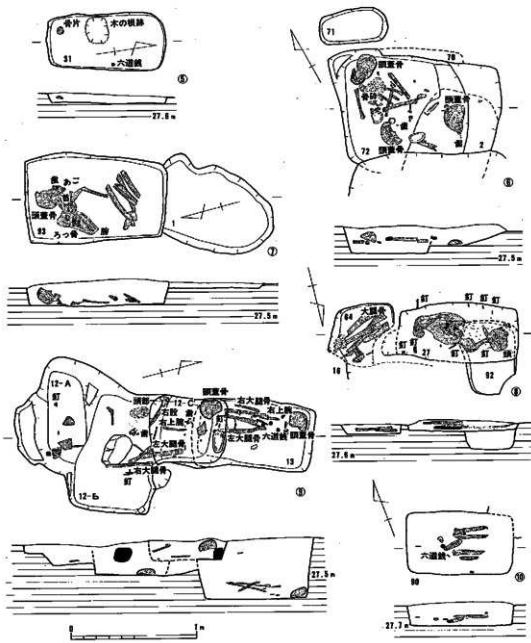
70・71・72・2号近世墓 (第95図 ⑥)

70・72・2号近世墓それを切って2号一字一石経塚が検出されている。新旧関係は2号一字一石経塚が一番新しく→2号近世墓→72号近世墓→70号近世墓となる。基本的にはそれぞれには人骨が残っていた。これと天保14年の紀年銘がある。一字一石経塚の位置によって年代の推

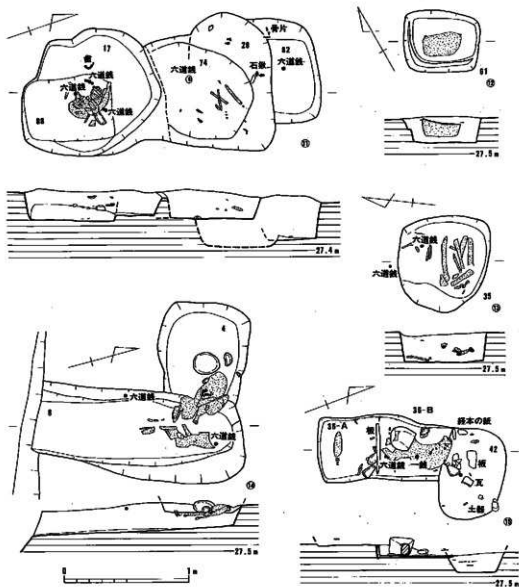


第94図 0区近世墓遺構実測図1 (1/30)

定ができる。正方形あるいは楕円形の平面形をもっている。70・72・2号近世墓には一部に小児骨が検出されている全て釘が検出されている。天保以前に埋葬された人々である。



第95図 0区近世墓遺構実測図2 (1/30)



第96図 0区近世墓遺構実測図3(1/30)

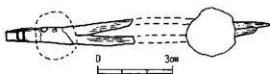
1・93号近世墓 (第95図 ㉗)

墓塚の平面形は1号墓が楕円形で、93号墓は長方形の箱型である。91号は人骨が残っていた。北頭位で屈葬であった。1号墓からは骨は残っていなかった。

1号墓を切って93号墓があった。1号古く、93号が新しい。これが新旧関係である。



第97図 28号近世墓出土
遺物実測図 (2/3)



第98図 0区54号近世墓出土遺物実測図 (2/3)

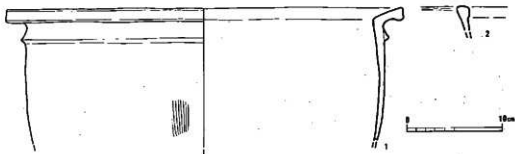
64・27・92・16号近世墓 (第95図 ㉘)

平面形は長方形の箱型をなすものも多く、27号墓は珠子玉と六道銭を副葬品にもったもので、頭を西へ向けて屈葬で埋葬されている。女性の熟年人骨である。これが64号墓を切っている。27号の下に92号近世墓が出土している。新旧関係は一番新しいのが27号で、64号そして92号墓となる。

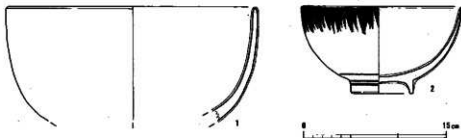
出土遺物 (図版76)

27号墓の人骨の側から出土したもので、手に珠子をまいて埋葬されたもので、ガラス玉の2mm前後のビーズ玉と白い結末玉であった。これに六道銭と棺材の釘が検出されている。

12・13号近世墓 (第96図 ㉙)



第99図 0区近世墓(覆土中)出土遺物実測図(1/4)



第100図 0区近世墓(副葬品)出土遺物実測図(1/4)

13号の平面形は長方形で、12号墓は最初に大きな墓壇でとらえられたが、A・B・Cの小分類された。高低差で新旧関係を描えることができた。平面形はCが正方形、A・Bは長方形である。12号ではBが古く、AとCとなる。AとCとの新旧は不明であるが13号墓を切って12-Cが埋葬された。このことから12-Bと13号との切り合いはないが12-Cによって新旧関係が理解できる。13号墓は北頭位で、12-Cも北頭位で、12-Bは西頭位。12-Aは東頭位である。12号近世墓はA・B・Cとも釘もっている。

出土遺物 (第100図 ①)

覆土中より出土したものであるが、骨と高低差はない。口径が13.4cmで、胎土に精良なる粘土を使用し、釉調は粟白に発色したもので、大振の茶碗である。器面に細い貫入がはいっている。焼成は良好である。所謂萩系統の茶碗である。ものは上手での物である。

90号近世墓 (第95図 ⑩)

平面形は長方形をなして、頭を西に向けている。出土遺物は黄楊製箸で歯部分が欠けている。

出土遺物

人骨と同じレベルで出土したもので黄楊の箸と思われる。両面に歯をもち中央に青銅製品でまいているものである。残長3cm×4cmである。

17・28・74・82・88号近世墓 (第96図 ⑪)

5墓が切り合っているもので、88号が17号を切り、17号が74号を切り、74号が28号を切って28号が82号を墓を切っている。88→17→74→28→82号となる。平面形は正方形・長方形・楕円形となるものである。28号墓の覆土から黒曜石製の石鐮が1点出土している。他は六道銭と釘である。74号墓では漆の下に六道銭があった。この漆製品を取り上げることができなかった。盃か何かであろう。この下には重複する様に縄文時代の落し穴遺構が検出された。

出土遺物 (第97図、図版53)

黒曜石製の鍔形鐮である。縄文期の所産のもので腰岳産のものである。興味を引く。

61号近世墓 (第96図 ⑫)

平面形が正方形に近い箱型のもので、火葬骨を入れている。出土遺物は釘のみであった。新しい火葬がはいつてきてからのものである。

35号近世墓 (第96図 ⑬)

平面形は略円形を呈するもので、頭を北方向で座棺と思われる。男性人骨で成年である。身長が161.4cmを計測されている。

4・8号近世墓 (第96図 ④)

平面形は長方形で、8号が4号を切っている。4号の人骨が8号の方へ転落しそうになっている。4号は頭を西に向けている。8号では覆土から弥生式土器の破片が出土している。伸展葬で埋葬できる長さをもっている。両者とも六道銭を副葬品としてもっていた。

36・42号 (第96図 ⑤)

36号墓はA・Bがあって、AをBが切り、Bを42号が切っている。42号が新しく、36-B、36-Bが一番古くなる。平面形は長方形の箱型のものである。36-Aを切って36-Bがある。36-Bには棺材の木質が残っていた。42号は一番新しい仏様で、位碑と経本を入れてあったもので、経本は炭化していた。位碑の残片となっており、墨書が書いてあることが理解できる。六道銭と釘が残っている。覆土中からは弥生式土器片が混入している。36-Bからは六道銭として1銭が出ている。

出土遺物 (図版83)

42号から出土した炭化した経本の紙である。

6. その他の副葬品 (第99・100図、図版83)

弥生式土器 (第99図 ①)

21号墓から出土したもので、弥生中期の甕形土器の破片で、口縁部直下に一条の三角凸帯をもつものである。胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色を呈している。焼成は良である。

磁器 (第100図 ②)

67号墓から出土した小黒茶碗で、口縁部に三角文を染付の濃淡であらわし、見込みには若干の砂が落ちている。高台内まで釉がかかっている。この手のものは、高取家の墓所から出土したのを見ている。また、この手のものより若干大きいものは0区石組遺構から出土している。類例が増加したらまとめることにしたい。

人形 (図版83)
















81号墓から副葬品として、土鈴人形で布袋(ほてい)が出土している。幅10cm、高さ7.5cmで、色調は灰黄色で彩色がはげ落ちている。

表3 鎌先遺跡近世墓出土遺物一覧表

番号	性別	年齢	副葬品	備考
1	不明	成人		鉄器・茶碗
2-A	男性	成年	六道銭(2号-字-石凝泉と重削)	釘
-B	不明	小児		
3	不明	成人		鉄
4	(男性)	(若年)	六道銭	鉄具・釘
5	(女性)	熟年	六道銭、鉄銭	釘
6	不明	熟年	六道銭	釘・リング
7	男性	成人		釘
8	女性	(成年)	六道銭、土器	釘
9	女性	(成年)		釘
10				
11	不明	成人		釘
12-A	男性	成年	土器	
-B	不明	幼児		
-C	女性	成人		
13	(男性)	成年	六道銭、土器	炭・釘
14	不明	幼児		釘
15				棺材・リング
16				
17	(男性)	成年	六道銭	釘
18	女性	熟年	六道銭	釘
19				
20	不明	不明		釘
21				
22	男性	成人	六道銭	釘
23	男性	老年		
24	女性	熟年		脛骨の下・釘
25	女性	成年	六道銭、土器	炭・釘
26	(女性)	成年		釘
27	女性	熟年	玉、六道銭	釘・漆・玉
28	(女性)	成年	石珠、土器	骨・漆・釘
29	不明	不明	六道銭	
30	不明	成年	六道銭	釘

番号	性別	年齢	副葬品	備考
31	不明	不明	六道銭	
32	不明	成年	六道銭	釘
33	不明	幼児		釘
34	女性	熟年	六道銭	骨・漆・釘
35	男性	熟年	六道銭	釘
36 ^A _B	(男性)	熟年	六道銭、土器	木・釘
37	不明	不明		釘
38				
39				
40				
41	(男性)	成年	六道銭	
42	(女性)	熟年	六道銭、土器	経本の紙・釘
43	不明	(若年)		
44				
45	男性	熟年	土器	釘
46	不明	成人		釘
47	(女性)	成人		
48				
49				
50				
51				
52				
53				
54-A	女性	成年	六道銭、土器	かんざし・釘
-B	女性	熟年		
55	不明	成人		漆ぬりもの
56				
57				釘
58	(男性)	成人		鉄
59				
60				
61	不明	成人		鉄
62				
63	(男性)	熟年	六道銭、鉄	炭・鉄・棺材

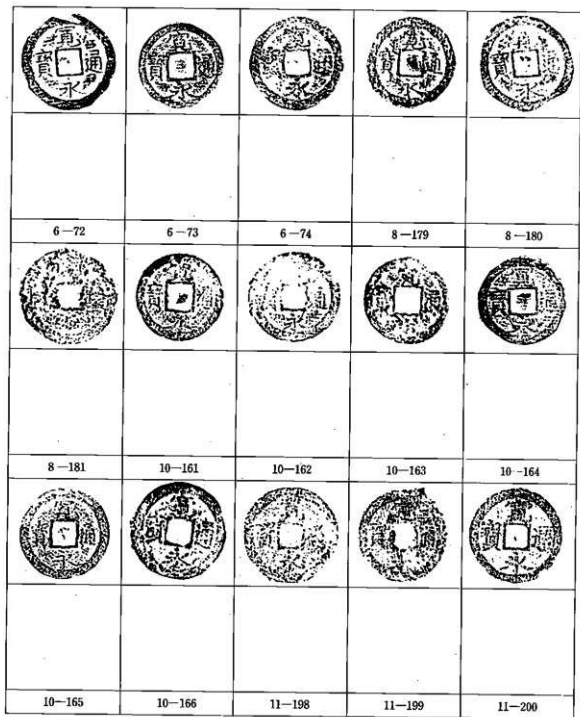
番 号	性 别	年 龄	副 葬 品	備 考
64	男性	成人		釘
65	不明	成人	六道銭	釘
66	不明	(成年)	六道銭	炭・釘
67				釘
68	(女性)	成年		
69	不明	成人	六道銭、鉄銭	
70	男性	熟年		棺材・釘
71				
72	女性	成年		釘
73				
74				釘
75				
76				板・釘
77	(男性)	成年	六道銭	釘
78	(男性)	成人	六道銭	炭・釘
79				炭
80				釘
81	不明	(未成年)	六道銭、人形	釘
82				
83	女性	熟年	六道銭	釘
84	(女性)	熟年		釘
85	不明	幼児		
86				
87				釘
88	(男性)	(未成年)	六道銭	
89	(男性)	成年		炭・釘
90	(男性)	熟年	六道銭	樽・釘
91			六道銭	釘
92			六道銭、漆	
93	(男性)	熟年		
94			六道銭	
95			六道銭	

				
4 (L)-59	4 (L)-60	4 (L)-61	4 (H)-62	4 (L)-63
				
4-64-1	4-126	4-127	4-128	5-205
				
5-206	5-207	6-69	6-70	6-71

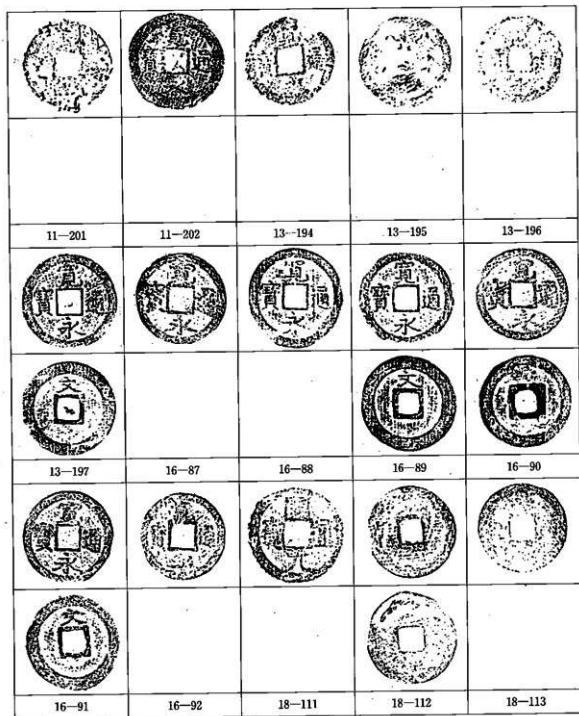
第101図 0区近世墓出土六通銭 実測図1 (1/1)

数字の左側は近世墓番号、右側は遺物整理番号

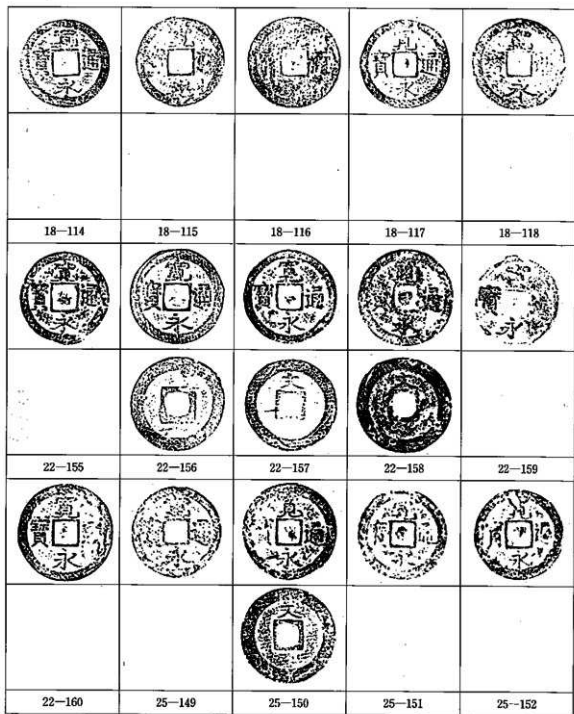
上欄表
下欄表



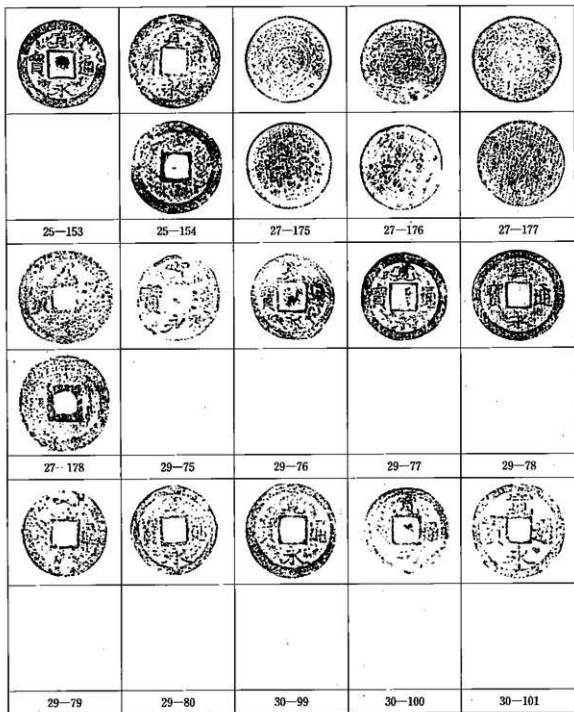
第102图 0区近伴墓出土六道钱 实测图2 (1/1)



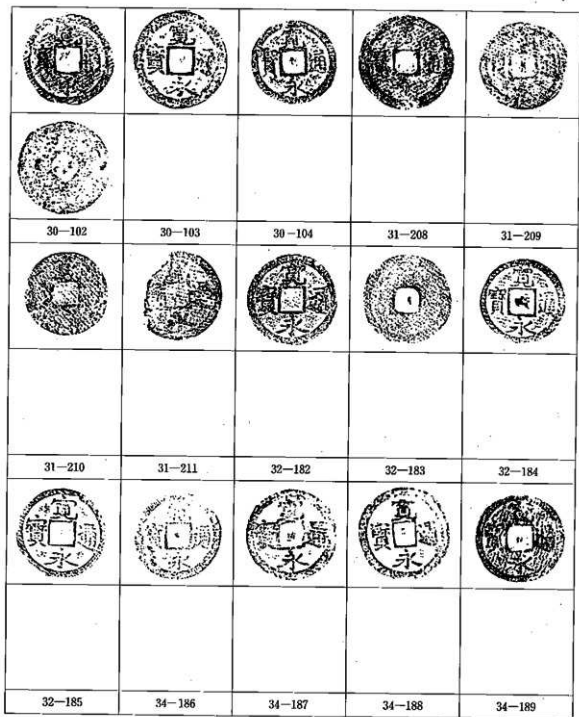
第103图 0区近世墓出土六道钱 实例图3 (1/1)



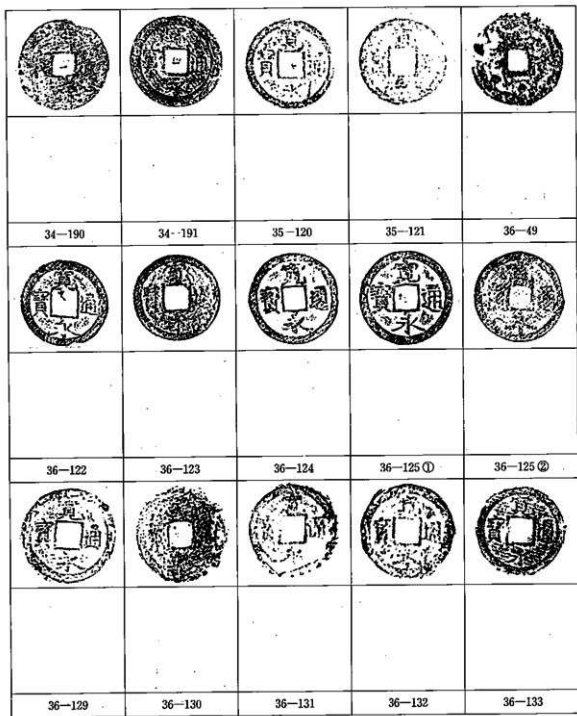
第104图 0区近世墓出土六道钱 夹河图4 (1/1)



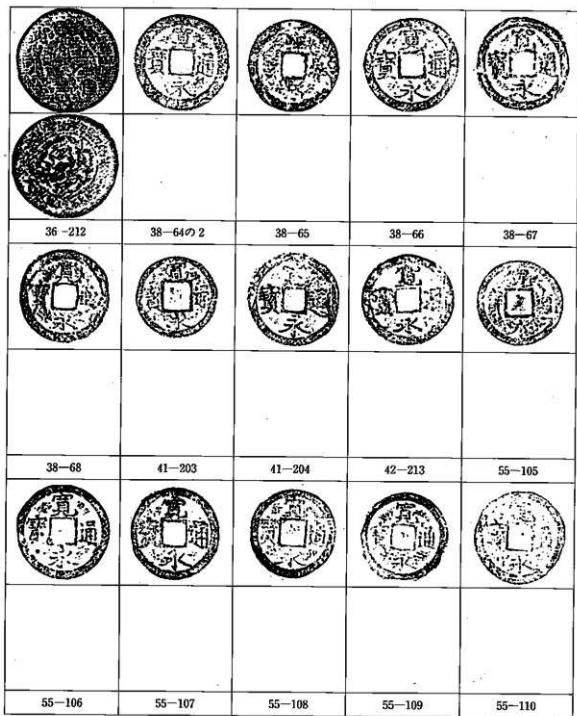
第105图 0区近世墓出土六道钱 实测图5 (1/1)



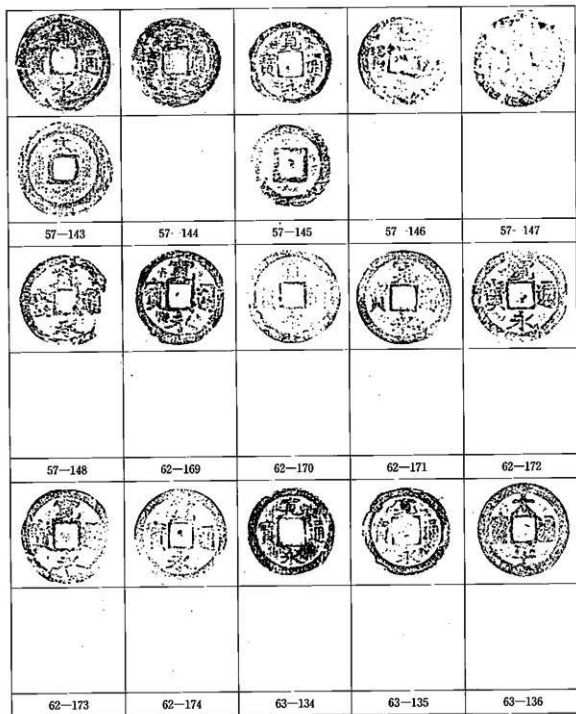
第106图 0区近世墓出土六道钱 实测图6 (1/1)



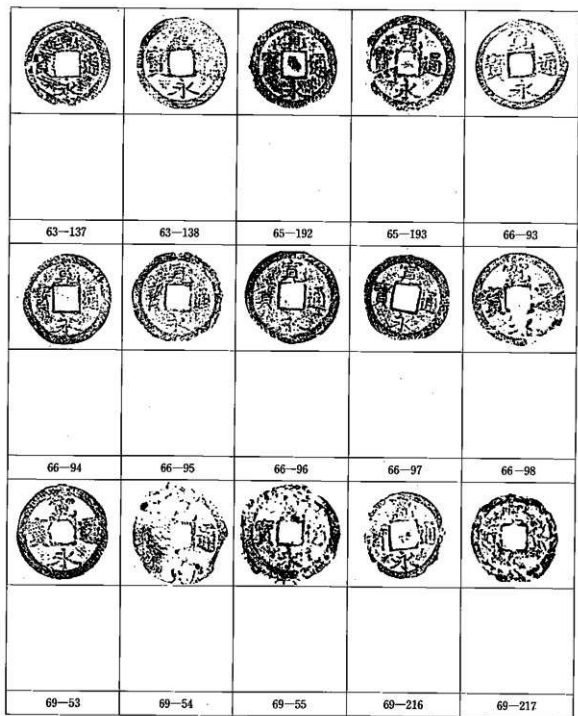
第107图 0区近世墓出十六道钱 实测图7 (1/1)



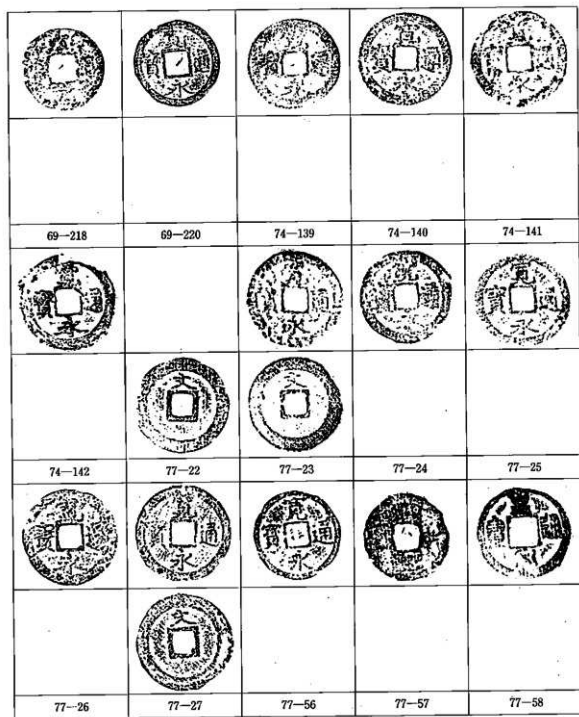
第108图 0区近世墓出土六造銭 実測图8 (1/1)



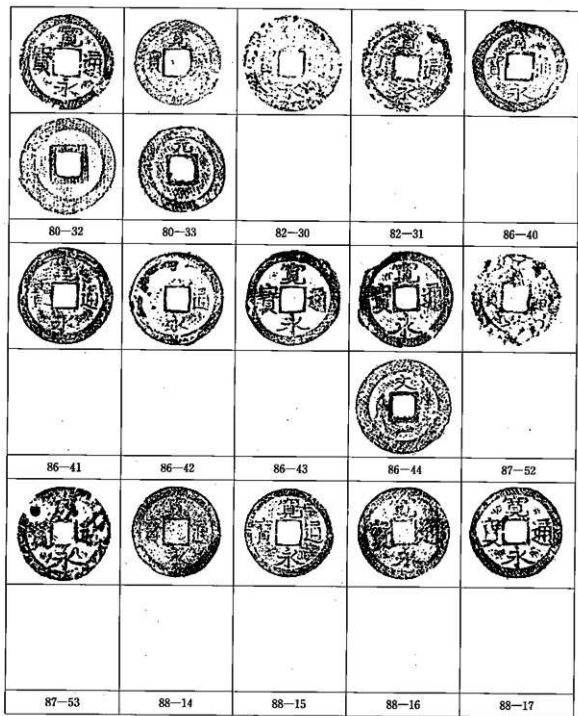
第109图 0区近世墓出土六通钱 实测图9 (1/1)



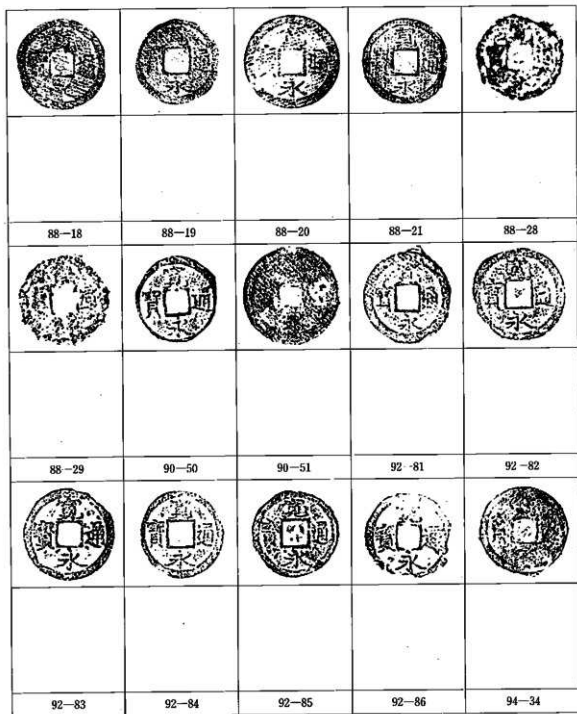
第110图 0区近世墓出土六道銭 実測图10 (1/1)



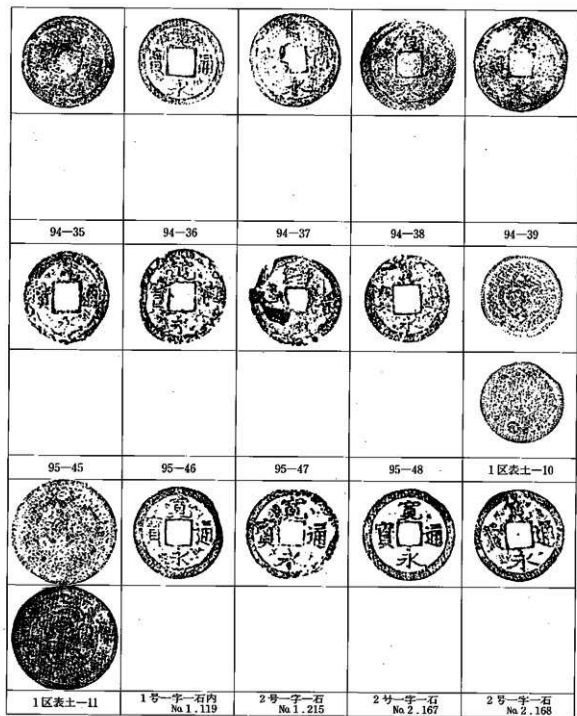
第111图 0区近世墓出土六道銭 実測图 II (1/1)



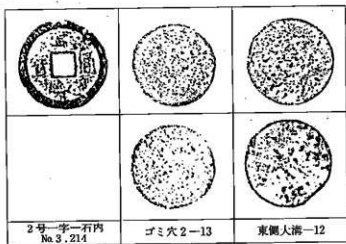
第112圖 0区近世墓出土六道錢 实测图12 (1/1)



第113图 0区近世墓出土六造钱 实测图13 (1/1)



第114图 0区近世墓出土六道銭実例图14 (1/1)



第115図 0区近世墓出土六造銭 実測図15 (1/1)

近世・近代遺構 (第116図、図版77~81)

果願寺境内地には、供養塔・常夜燈・六地藏尊等がおかれていた。第132図で示された番号の72~82がそれである。

その中でも、重要なのが74と旧川内家の墓所内にある53の供養塔がそれである。いわゆる一字一石経塚である。

一字一石経塚 (第116~126図、図版77・78・80・81)

旧果願寺境内からは2基の経塚が検出された。第93図の2号一字一石経塚の位置がこれである。

旧境内地の配置図の中で第132図の中の74番・53番にあたる。現在の果願寺にて石碑を確認することができた。(図版77)

では、東の方の1号経塚から説明を加える。

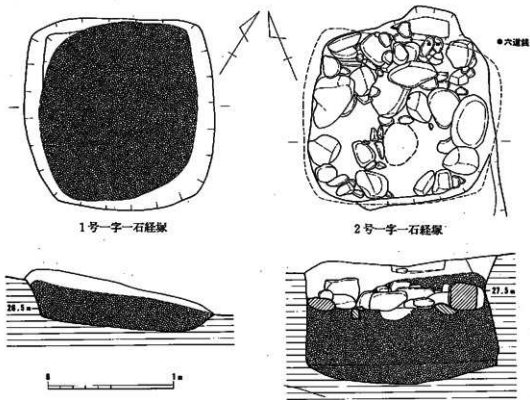
1号一字一石経塚 (第116・118・119・120図、図版78)

碑文には (表) 浄土三部 三界萬霊
一字一石
(裏) 天保14年卯10月
(1842年) 筆者入

と紀年銘されている。

遺構は寺の入口にあたるもので、第132図では74番にあたる。平面形は隅丸の正方形を呈し、内法は、縦150cm、横153cm、深さ40cmを計測する。底面形は隅丸方形を呈し、断面は摺鉢状に落ちる。石礎に一字づつ経文を釈経しているもので、土嚢袋12袋で、石礎数5,944を数える。他に寛永通宝1枚が出土している (第116図 左)。

碑文の通り、天保14年 (1842) 10月に浄土三部経を埋納されたものと考えられる。



第116図 0区1・2号一字一石経塚(1/30)

2号一字一石経塚 (第116図、図版77-81)

2号近世墓を切って、造っているもので、崖面ざりざりにある。第132図の配置図では53番に位置するものである。川内家の墓地内と考えられる。

平面形は隅丸正方形を呈し、縦300cm、横290cm、深さ2m前後を計る。

第116図が実測図である。これによると一字一石経の礎石の上に、人頭大の河原石を並べて高さをそろえ、その上に排土を充填して、ならしてその上に土台石をならべ、基壇の土台石の凝灰石45×45×30cmを敷石とし、二石目はそれよりひとまわり小さな硬質砂岩製の、三石目も硬質砂岩製の石碑で幅15cm・高さ65cm・厚さ15cmの棒状の上部が屋根状を呈している (図版77-3)。

石碑には次の様な、碑文が刻まれている。

	梵字
(表)	(A) 法華 一字一石 供養塔
	釈迦如来 筆者入
(裏)	享保14年乙酉3月18日
	(1729年) 筆者入
(側面)	六親眷属有縁無縁 施主 富安嘉兵衛

勧進者の名前まで、刻まれている。

上面から寛永通宝4枚検出されているが、2号近世墓のものがまざったと考えた方が妥当である。

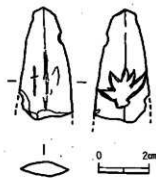
他は礎石で68,609個を数えるが、法華経文数は69,384で、639個不足している。

この礎石に混入して、第117図の様な磨製石剣の先端が出土している。墨書きで、八手業の様な (B) を描いている。

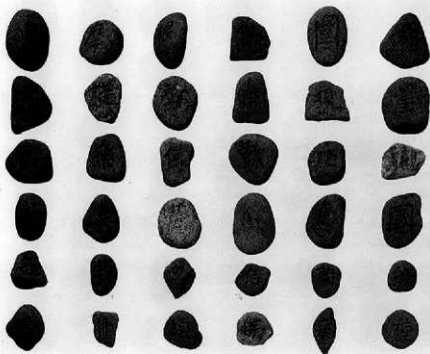
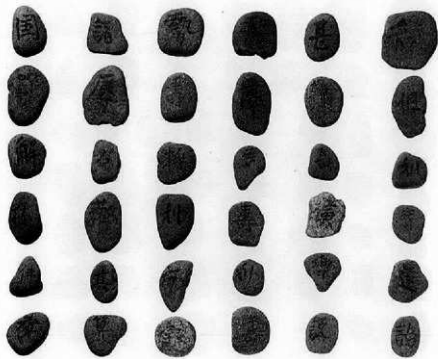
裏面には墨書で (讀?) とも読める。

享保14年 (1729) に複数の人の手によって、法華経8巻が写経されて勧進元は嘉兵衛によって埋納され、供養されている。

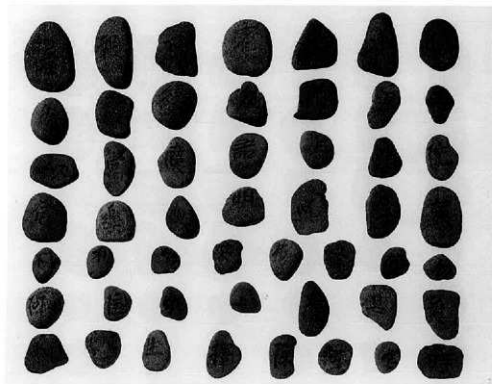
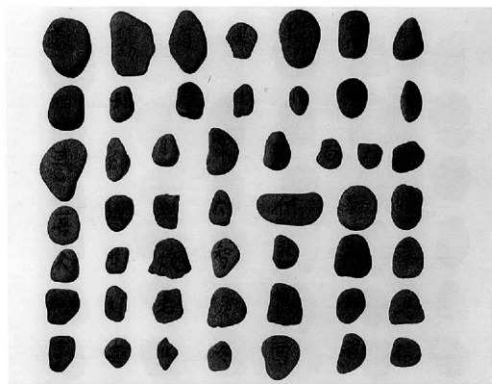
この背景には享保13年に小倉藩では餓死者43,300人を出している。その原因はウンカの害であった。



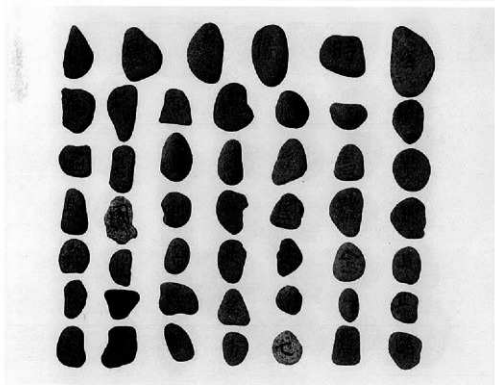
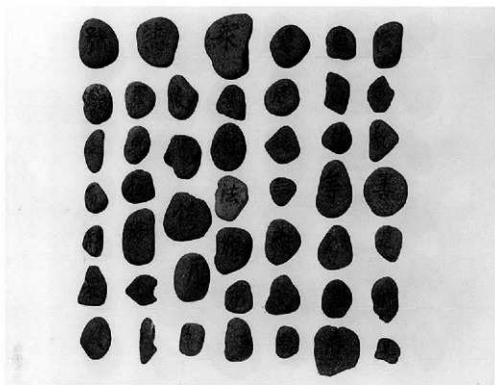
第117図 0区2号一字一石経塚出土遺物実測図 (2/3)



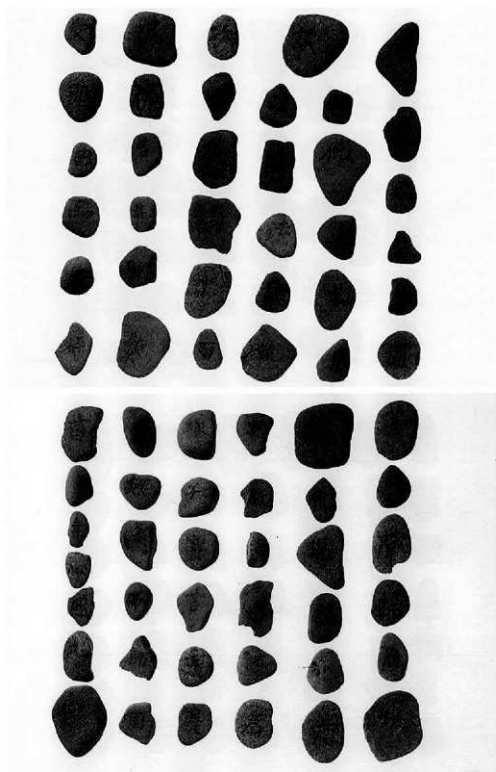
第118圖 0区1号一字一石絛(写真).1



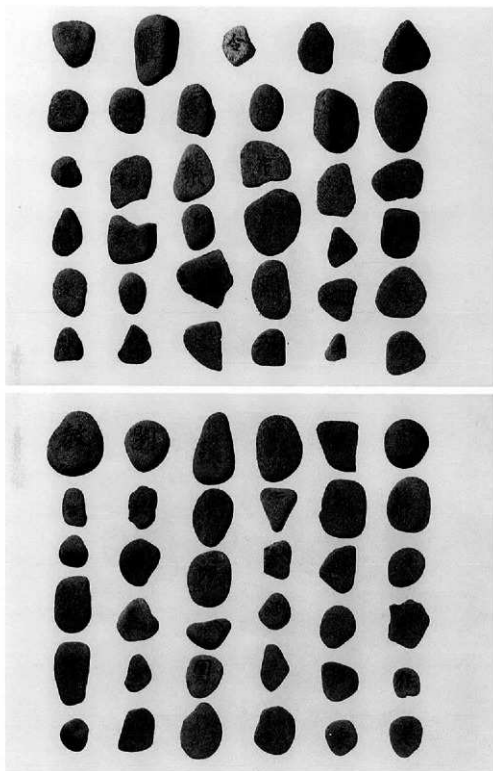
第119图 0区1号一字一石経(写真).2



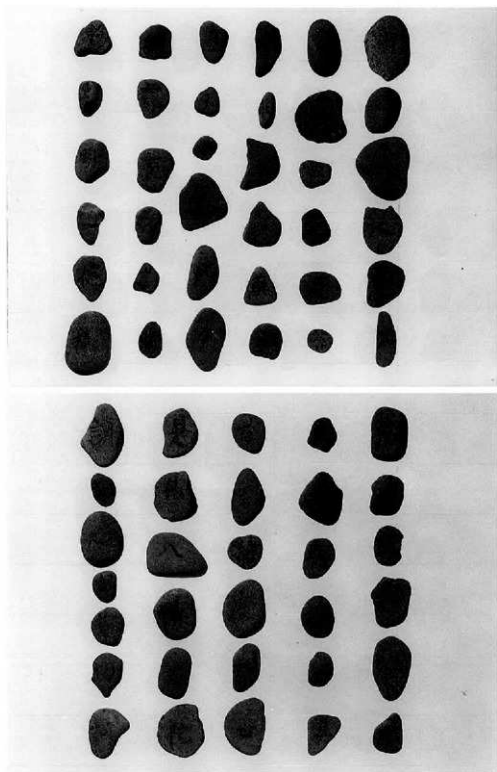
第120回 0区2号一字一石経(写真).1



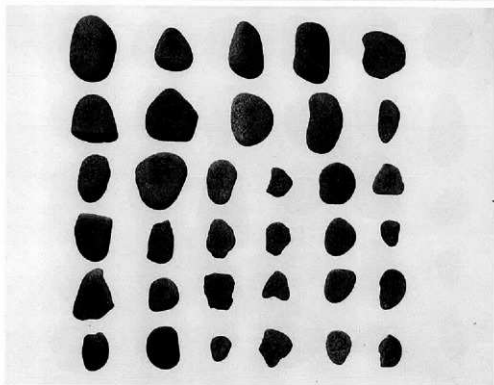
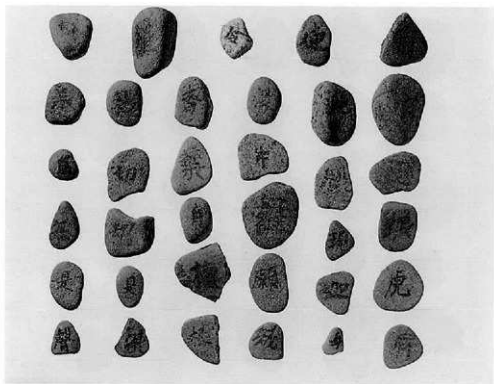
第121图 0区2号一字一石粒 (写真).2



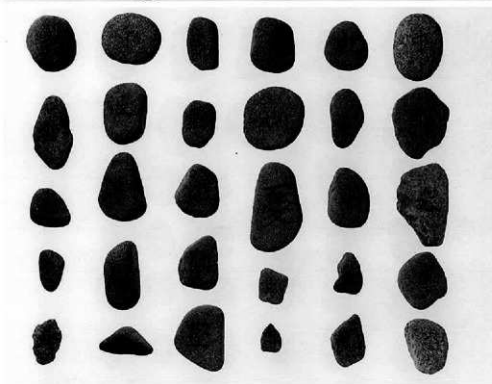
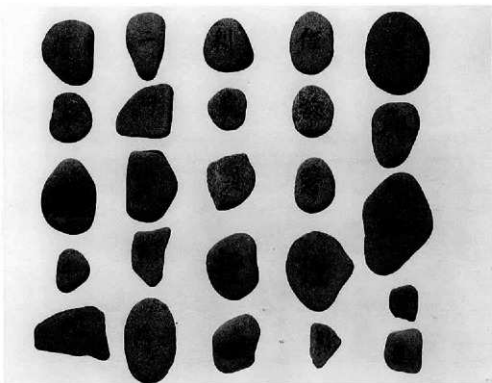
第122图 0区2号一字一石经(写真).3



第123图 0区2号一字一石蚌(写真).4



第124图 0区2号一字一石糕 (写真).5



第125图 0区2号一字一石砧(写真).6

IV 考 察

- (1) 福岡県京都郡豊津町鋤先遺跡
出土近世人骨について
- (2) 鋤先遺跡および福岡県下の
出土六道銭について
- (3) 徳永遺跡群の中の鋤先遺跡
について

福岡県京都郡鋤先遺跡出土近世人骨について

中橋孝博・古賀英也
(九州大学比較社会文化研究科)

福岡県京都郡鋤先遺跡出土近世人骨について

中橋孝博・古賀英也

(九州大学比較社会文化研究科)

(1) はじめに

様々な環境下に生きる近世人達の特徴を明らかにすることは、日本人形質の時代変化を明らかにし、ひいてはその変化要因を探る上での重要な研究課題の一つである。近年、江戸や大阪、あるいは福岡といった都市部からはかなりの近世人骨が出土して、その特徴も次第に明らかになりつつあるが、非都市部に居住した人々については全国的にも出土例が少なくまだ殆ど不明のままである。都市と田舎、あるいは文明開花を逃げた明治以降の人々とまだ中世以来の生活状況にある人々との間に具体的にどのような違いがあるのか、その比較結果は、人骨の形質変化の要因を考察する上で重要なヒントを与えるものと期待される。

福岡県の東部、京都郡豊津町における発掘調査によって、相当数の近世人骨が新たに出土した。残念ながら骨の保存状態が不良のため、その形態的特徴などは十分には掴み得なかったが、この地域では初めての江戸時代人骨例であり、非都市部の近世人骨として貴重な資料となるものである。福岡県教育委員会によってその研究の機会を与えられたので、以下に検討結果を報告する。

(2) 遺跡・資料・方法

鋤先遺跡は、福岡県京都郡豊津町大字徳永字鋤先に所在する。1990年夏、権田道路建設工事に伴って福岡県教育委員会による発掘調査が実施された。その結果、古墳時代の横穴墓4基の他、近世土壌墓95基が検出され、横穴墓からは1体の、近世墓から計65体の人骨がそれぞれ出土した。

表4に一覧したように、残念ながらいずれも保存状態は不良のものが多く、一部の破片しか遺存していない個体も相当数を占める。男女数にはそれ程差が無かったが、未成人骨の少なさが目立つ(表5)。

近世人骨の多くは六道銭などの副葬品と共に出土し、考古学的な考証から、江戸時代後期所属のものと考えられている。

計測は主にMartin-Saller (1957) に従い、その他脛骨には森本 (1971) の方法を用いた。

また、性別判定には筆者らの保存不良骨に対する方法を随時援用した(中橋, 1988)

表4 鋤先遺跡出土人骨一覧表 (保存状態 ○良好、△不良、▲破片のみ)

番号	性別	年齢	保存状態	副葬品	備考
江戸後期人骨					
1	不明	成人	▲		
2-A	男性	成年	△	六道銭3	
-B	不明	小児	▲		9-10歳
3	不明	成人	▲		
4	(男性)	(若年)	△	六道銭	
5	(女性)	熟年	▲	六道銭、鉄銭	
6	不明	熟年	▲	六道銭	
7	男性	成人	△		
8	女性	(成年)	△	六道銭、土器	
9	女性	(成年)	△		
11	不明	成人	▲		
12-A	男性	成年	△	土器	2歳前後の幼児骨を含む
-B	不明	幼児	▲		
-C	女性	成人	△		身長148.9cm
13	(男性)	成年	△	六道銭、土器	身長158cm
14	不明	幼児	○		4-5歳
17	(男性)	成年	△	六道銭	
18	女性	熟年	○	六道銭	身長144cm
20	不明	不明	▲		
22	男性	成人	△	六道銭	
23	男性	老年	△		
24	女性	熟年	△		
25	女性	成年	△	六道銭、土器	
26	(女性)	成年	△		別個体男性大腿骨混入
27	女性	熟年	△	玉、六道銭	
28	(女性)	成年	▲	石ぞく、土器	火葬骨混入
29	不明	不明	▲	六道銭	
30	不明	成年	△	六道銭	
31	不明	不明	▲	六道銭	火葬骨
32	不明	成年	▲	六道銭	
33	不明	幼児	△		
34	女性	熟年	△	六道銭	

番号	性別	年齢	保存状態	副葬品	備考
35	男性	成年	△	六道銭	
36	(男性)	熟年	△	六道銭、土器	
37	不明	不明	▲		火葬骨混入
41	(男性)	成年	▲	六道銭	
42	(女性)	熟年	△	六道銭、土器	
43	不明	(若年)	△		
45	男性	熟年	△	土器	
46	不明	成人	▲		
47	(女性)	成人	△		
54-A	女性	成年	△	土器	
-B	女性	熟年	△		
55	不明	成人	▲		火葬骨
58	(男性)	成人	△		
61	不明	成人	△		
63	(男性)	熟年	△	六道銭、鉄	
64	男性	成人	△		
65	不明	成人	▲	六道銭	
66	不明	(成年)	▲	六道銭	
68	(女性)	成年	▲		
69	不明	成人	△	六道銭、鉄銭	
70	男性	熟年	○		
72	女性	成年	△		
77	(男性)	成年	▲	六道銭	
78	(男性)	成人	▲	六道銭	
81	不明	(未成人)	▲	六道銭、人形	
83	女性	熟年	△	六道銭	
84	(女性)	熟年	△		
85	不明	幼児	△		2-3歳
88	(男性)	(未成人)	▲	六道銭	
89	(男性)	成年	△		
90	(男性)	熟年	△	六道銭	
93	男性	熟年	△		身長159.3cm
古墳人骨					
1号横穴	男性	成年	△		身長164.8cm

表5 鋤先遺跡出土近世人骨の性別・年齢構成

年齢	男性	女性	不明	計
乳児	0	0	0	0
未乳児	0	0	5	5
小児	0	0	1	1
若年	1	0	1	2
不明	1	0	1	2
成年	8	8	3	19
熟年	6	9	1	16
老年	1	0	0	1
不明	5	2	8	15
不明	—	—	4	4
計	22	19	24	65

(3) 結果

A、古墳人骨

古墳人骨については保存不良のため、形態的特徴は明らかにできなかったが、身長を推定結果だけ、表4に示した。かなりの高身長例である。

従来よりこの地域の古墳人にはいわゆる渡来系弥生人との類似性が見られるが、今回の出土例もその傾向を追認させるものと言えよう。

B、近世人骨

1、頭蓋骨

保存不良に加えて、土圧や乾燥過程での歪み、変形が著しいため、計測に供し得る資料は殆ど見いだせず、僅かに男女各1体、それも一部の計測にとどまった。

一応、その計測値を以下に示す。

	男性 (70号)	女性 (18号)
頭蓋最大長	—	182 mm
頭蓋最大幅	—	183 mm
最小前頭幅	93 mm	—
上顔幅	105 mm	—
上顔高	67 mm	—
鼻高	48 mm	—
頭長幅示数	—	73.1

これらの数値で勤先近世人を代表させる訳にはいかないが、得られた結果で見る限りは、かなりの長頭傾向と低顔傾向が窺える。例えば比較的長頭性を見せた福岡市の天福寺近世人（中橋、1987）の平均（女性、頭長幅示数76.1）等に比べて、勤先近世人はさらに長頭に傾いており、上顔高（天福寺男性、74.5）、鼻高（同、52.9mm）でも大きな差が見られる。

2. 四肢骨

2-1、上肢骨

男女の計測結果をそれぞれ表6、7に比較群と共に示した。

男性上腕骨にやや太く頑丈な傾向が見られたが、女性では天福寺近世人に類似している。ただ、女性でも江戸近世人（渡藤、他、1967）や吉母浜中世人（中橋・永井、1985）などに比べると、骨体諸径においてやや上回る傾向を見せる。骨体断面に特に変異は認められない。

表6 上肢骨計測値（男性）

	N	勤先 (近世)		天福寺 (近世)		桑島 ¹⁾ (近世)		江戸 ²⁾ (近世)		吉母 ³⁾ (中世)		九州 ⁴⁾ (現代)	
		M	S.D.	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨													
1 最大長	—	—	—	21	296.9	10	293.6	—	296.8	14	295.8	106	295.3
2 全長	—	—	—	19	293.3	10	293.0	—	292.8	14	291.6	106	290.6
5 中央最大径	3	24.7	3.06	22	22.9	14	20.8	—	22.7	20	22.6	106	21.9
6 中央最小径	3	18.3	1.15	22	17.7	14	15.9	—	17.7	20	17.6	106	16.9
7 骨体最小周	3	67.0	5.57	22	63.8	14	62.4	—	63.5	20	62.5	106	61.8
7a 中央周	3	70.7	6.51	22	66.5	14	67.0	—	69.4	20	66.1	106	63.7
6/5 骨体断面示数	3	72.1	4.79	22	77.6	14	76.5	—	78.3	20	78.1	106	79.1
7/1 長厚示数	—	—	—	16	21.3	10	21.6	—	21.4	14	21.4	106	20.9
尺骨													
1 最大長	—	—	—	18	244.6	—	—	—	242.1	14	247.4	62	236.2
2 機能長	—	—	—	18	214.6	—	—	—	211.2	12	217.5	64	209.2
3 最小周	—	—	—	20	37.5	—	—	—	36.4	17	37.5	65	35.8
11 矢状径	1	14.0	—	24	13.1	—	—	—	12.8	19	12.8	63	12.8
12 横径	1	17.0	—	24	17.0	—	—	—	16.2	19	12.8	64	16.5
3/2 長厚示数	—	—	—	18	17.5	—	—	—	17.2	11	17.9	63	17.0
11/12 骨体断面示数	1	79.5	—	23	77.9	—	—	—	79.0	19	73.7	63	74.9

1) 立志(1970)、2) 渡藤、他(1967) 3) 中橋(1985) 4) 専頭(1957)、溝口(1957)

表7 上肢骨計測値 (女性)

	N	鶴先 (近世)		天福寺 (近世)		桑島 (近世)		江戸 (近世)		吉母 (中世)		九州 (現代)	
		M	S.D.	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨													
1 最大長	-	-	-	19	273.7	6	268.6	-	269.7	19	270.0	36	271.7
2 全長	-	-	-	15	271.4	6	266.4	-	266.0	18	267.4	36	268.6
5 中央最大径	5	20.9	1.14	20	20.3	7	18.0	-	19.6	28	19.9	36	19.8
6 中央最小径	5	15.6	1.34	20	15.5	7	13.8	-	14.9	28	14.8	36	14.8
7 骨体最小周	5	58.5	3.94	21	56.0	7	55.3	-	54.1	28	54.1	36	54.8
7a 中央周	4	59.9	4.37	20	59.3	7	57.9	-	56.9	28	57.3	36	56.9
6/5 骨体断面示数	5	74.7	5.21	20	75.9	7	76.7	-	76.6	28	74.1	36	75.3
7/1 長厚示数	-	-	-	17	20.7	6	20.7	-	20.1	19	20.0	36	20.0
腕骨													
1 最大長	-	-	-	12	197.9	-	-	-	199.8	18	206.0	12	199.9
2 機能長	-	-	-	11	183.5	-	-	-	188.9	18	193.1	12	187.0
3 最小周	1	41.0	-	16	35.7	-	-	-	34.5	27	34.6	12	34.7
4 骨体横径	1	15.0	-	16	15.3	-	-	-	14.4	27	15.1	12	14.5
4a 骨体中央横径	-	-	-	14	14.0	-	-	-	13.5	27	13.4	12	13.5
5 骨体矢状径	1	12.0	-	16	10.3	-	-	-	9.8	27	10.1	12	9.7
5a 骨体中央矢状径	-	-	-	14	10.2	-	-	-	10.0	27	10.1	12	9.7
3/2 長厚示数	-	-	-	11	19.4	-	-	-	18.3	18	17.9	11	18.1
5/4 骨体断面示数	1	80.0	-	15	67.4	-	-	-	68.4	27	67.3	10	68.3
5a/4a 中央断面示数	-	-	-	14	73.2	-	-	-	74.6	27	75.3	13	73.9
尺骨													
1 最大長	-	-	-	11	211.1	-	-	-	223.4	20	222.4	12	215.0
2 機能長	-	-	-	11	184.3	-	-	-	195.7	22	196.7	12	189.2
3 最小周	-	-	-	12	32.4	-	-	-	31.5	25	32.5	12	32.1
11 矢状径	1	12.0	-	17	11.2	-	-	-	10.5	28	10.8	12	10.9
12 横径	1	16.0	-	17	14.3	-	-	-	14.1	28	14.9	12	13.9
3/2 長厚示数	-	-	-	11	17.6	-	-	-	16.1	22	16.7	12	16.8
11/12 骨体断面示数	1	75.0	-	17	79.0	-	-	-	75.1	28	72.8	12	77.5

2-2、下肢骨

上肢同様、計測結果を表8、9に示した。

男女とも、現代人骨(阿部、1955; 錦鍋、1955)に比べればやや上回るが、他の近世人との間に大差は見られない。比較的、短く、華奢な四肢骨を持つ集団と言える。ただ、大腿骨の特に上部に、男女とも少し扁平傾向が窺われた。

表8 下肢骨計測値(男性)

	N	錦先 (近世)		天福寺 (近世)		桑島 (近世)		江戸 (近世)		吉母 (中世)		九州 ¹⁾ (現代)	
		M	S.D.	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨													
1 最大長	2	412.0	—	20	415.2	11	419.8	—	413.8	18	419.1	59	406.5
2 自然位長	—	—	—	18	410.0	11	416.7	—	410.3	15	418.1	59	403.2
6 中央矢状径	8	27.9	2.52	17	27.7	16	27.1	—	28.3	19	28.1	59	26.5
7 中央横径	8	28.6	2.25	17	26.9	16	25.2	—	27.4	19	27.7	59	25.6
8 中央周	7	88.9	5.82	17	85.4	14	84.0	—	87.2	19	87.8	59	82.4
9 骨体上横径	7	32.9	2.95	14	30.4	14	30.2	—	30.7	19	32.1	59	29.4
10 骨体上矢状径	7	24.8	2.04	14	26.3	14	23.3	—	27.8	19	24.1	59	24.3
8/2 長厚指数	—	—	—	13	20.5	11	20.3	—	21.3	14	21.2	59	20.4
6/7 中央断面示数	8	97.9	10.88	17	104.1	16	107.9	—	103.9	19	101.3	58	103.8
10/9 上骨体断面示数	7	75.6	7.48	14	86.7	14	77.3	—	91.2	19	76.1	58	82.8
脛骨													
1 全長	—	—	—	13	339.5	12	333.4	—	327.1	12	341.9	61	320.3
1a 最大長	—	—	—	16	340.1	12	339.5	—	331.2	11	348.0	60	326.9
8 中央最大径	—	—	—	14	29.4	16	27.5	—	28.9	20	29.6	61	27.8
8a 荣菱孔位最大径	1	34.0	—	15	33.7	—	—	—	32.9	20	33.8	60	30.6
9 中央横径	—	—	—	14	21.9	17	20.4	—	21.6	20	21.6	61	21.1
9a 荣菱孔位横径	1	23.0	—	15	24.1	—	—	—	23.7	20	24.0	61	23.7
10 骨体周	—	—	—	14	80.4	17	80.5	—	79.4	20	80.8	62	78.4
10a 荣菱孔位周	1	88.0	—	15	91.3	17	89.7	—	89.3	20	90.8	61	88.9
10b 最小周	2	77.0	—	15	73.7	17	73.3	—	70.8	20	74.5	60	71.3
9/8 中央断面示数	—	—	—	14	74.8	17	74.2	—	74.9	20	73.0	61	76.1
9a/8a 荣菱孔位断面示数	1	67.6	—	15	71.9	—	—	—	72.2	20	71.0	60	77.5
10b/1 長厚指数	—	—	—	8	21.3	12	22.5	—	21.7	12	22.0	60	22.4

1) 阿部 (1955)、錦鍋 (1955)

表9 下肢骨計測値(女性)

	N	勸先 (近世)		天福寺 (近世)		桑島 (近世)		江戸 (近世)		吉母 (中世)		九州 (現代)	
		M	S.D.	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨													
1 最大長	2	378.5	—	18	380.6	7	397.7	—	377.9	25	378.0	13	380.1
2 自然位長	—	—	—	16	376.7	7	393.1	—	374.4	24	375.8	13	375.9
6 中央矢状径	11	23.2	1.33	21	23.6	7	24.5	—	24.8	28	23.3	13	23.6
7 中央横径	11	24.2	2.09	21	24.0	7	23.4	—	24.1	28	24.8	13	23.2
8 中央周	10	75.2	3.46	21	75.2	7	75.8	—	76.9	28	76.1	13	74.2
9 骨体上横径	9	29.0	1.58	17	27.7	7	26.9	—	26.5	28	29.1	13	27.5
10 骨体上矢状径	8	21.0	1.07	17	22.7	7	20.8	—	25.5	28	20.9	13	21.3
8/2 長厚示数	—	—	—	15	19.8	7	19.3	—	20.5	24	20.4	13	19.8
6/7 中央断面示数	11	96.4	8.71	21	98.7	7	104.6	—	103.1	28	94.5	13	102.0
10/9上骨体断面示数	9	72.2	5.79	17	82.3	7	77.9	—	97.3	28	72.0	13	77.1
胫骨													
1 全長	—	—	—	15	301.8	5	319.0	—	301.5	16	309.2	14	301.0
1a 最大長	—	—	—	15	305.6	5	324.5	—	305.8	17	313.8	14	306.6
8 中央最大径	—	—	—	17	24.4	6	26.2	—	25.3	26	26.1	14	24.7
8a 荣養孔位最大径	2	28.3	—	19	27.8	—	—	—	28.8	25	29.7	14	28.1
9 中央横径	—	—	—	17	18.6	6	18.1	—	18.9	26	18.3	14	18.8
9a 荣養孔位横径	2	19.5	—	19	20.7	—	—	—	21.2	25	20.0	14	21.1
10 骨体周	—	—	—	17	67.5	6	74.9	—	70.0	26	70.3	14	70.1
10a 荣養孔位周	2	74.8	—	19	76.5	6	81.8	—	78.1	25	78.3	14	78.2
10b 最小周	3	61.5	1.80	17	62.7	6	69.4	—	63.7	25	64.9	14	63.6
9/8 中央断面示数	—	—	—	17	76.9	6	69.6	—	72.4	26	70.4	14	76.3
9a/8a 荣養孔位断面示数	2	69.2	—	19	75.0	—	—	—	73.6	25	67.4	14	74.9
10b/1 長厚示数	—	—	—	14	21.2	5	22.0	—	21.1	16	20.6	14	21.2

2-3、推定身長

大腿骨最大長にピアソンの推定式を適用した結果を、表10に示す。

それぞれ2体づつでの結果であるが、男性158.7cm、女性146.5cmとなり、他の同時代人同様、比較的低身長である。

表10 推定身長と比較 (cm)

		男 性		女 性	
		N	M	N	M
鋤 先	(近)	2	158.7	2	146.5
筵田青木	(近) ¹⁾	30	160.3	15	148.6
上月隈	(近) ²⁾	8	158.9	1	137
天福寺	(近)	24	159.4	20	146.5
桑 島	(近)	10	158.8	5	150.4
紋 江	(近) ³⁾	—	158.4	—	—
江 戸	(近)	95	159.1	45	146.4
吉母浜	(中)	18	159.7	22	146.5
材木座	(中) ⁴⁾	10	159.7	3	146.9
金 隈	(弥) ⁵⁾	17	162.7	17	151.3
西南日本	(現)	37	157.7	10	146.3

1)中橋 (1991)、2)中橋 (1993)、3)渡辺、他 (1982)

4)鈴木 (1956)、5)中橋、他 (1985)

(4) 総括・考察

1990年度の、福岡県教育委員会による発掘調査によって、福岡県京都郡、鋤先遺跡から、1体の古墳人と65体の近世人骨が出土した。いずれも保存状態不良で、当地の近世人を代表させるには不十分なものであるが、一応得られた結果を以下に概括する。

- ・男女各1体ずつの結果であるが、博多の天福寺近世人などに比べて、さらに長頭性が強く、顔面には低顔傾向が窺われた。
- ・四肢は全体的には他の近世人に類似してやや短く、華奢な傾向を見せる。
- ・大腿骨体上部に少し扁平傾向が見られた。
- ・推定身長は男性158.7、女性146.5cmで、他の近世人同様、低身長集団である。

以上の諸点の中で、長頭、低顔性について少し注記しておきたい。従来より、博多などの都市部の近世人に比して、非都市部の住人はこうした中世人的とも言える特徴をより濃厚に残している可能性を指摘してきたが(中橋、1987, 1991, 1993)、僅かに1例ながら、今回の出土例も一応はそれを追認させる結果となった。しかし言うまでもなく、そうした問題の検証には相当数の資料が要求され、今回の結果からの判断は控えるべきであろう。ただ、当地域は周辺域

に比べて比較的古人骨資料の出土が限られており、その意味では今回の出土の意義は決して小さくはない。今後さらに資料の充実をはかり、上記のような問題点に注目して引き続き検討を加えていきたいと考える。

謝辞

当人骨を精査する機会を与えていただき、種々御教示いただいた、福岡県教育委員会の諸先生に深謝いたします。また、発掘調査に御協力をいただいた、琉球大学医学部、土肥直美先生に感謝いたします。

文 献

- 阿部英世 (1955) : 「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究 2。
- 遠藤萬里、北条輝幸、木村賢 (1967) : 「四肢骨」増上守徳川將軍墓とその遺品・遺体 (鈴木、他、編)、東京大学出版会。
- 鏑鍋命達 (1955) : 「九州人下腿骨の研究」、人類学研究 2。
- Martin-Saller (1957) : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I, Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- 溝口静男 (1957) : 「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」、人類学研究 4。
- 森本岩太郎 (1971) : 「脛骨横断指数の算出をめぐる—Martin法への反省」、人類誌 79。
- 中橋孝博 (1987) : 「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌 95。
- 中橋孝博 (1988) : 「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成「永井昌文教授退官記念論文集」、六興出版。
- 中橋孝博 (1991) : 「福岡市上月隈遺跡出土人骨 (近世・弥生)」、福岡市埋蔵文化財調査報告書 257。
- 中橋孝博 (1993) : 「福岡市庭田青木遺跡出土の弥生、近世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書 356。
- 中橋孝博・永井昌文 (1985) : 「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
- 中橋孝博・土肥直美・永井昌文 (1985) : 「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」
史跡金隈遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書 123。
- 立志悟郎 (1970) : 「熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人、上肢骨の人類学的研究、下肢骨の人類学的研究」、熊本医学会雑誌 40。
- 専頭時義 (1957) : 「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」、人類学研究 4。
- 鈴木尚 (1956) : 「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」、岩波書店、東京。

- 脇達也 (1970) : 「熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人骨の研究」、熊本医学会雑誌44。
- 渡辺聡子、和田洋、欠田早苗 (1982) : 「倉敷市粒江遺跡出土の江戸時代人頭蓋の研究」、人類学雑誌90。

(2) 鋤先遺跡および福岡県下の出土六道銭について

櫻木 晋一

(九州帝京短期大学経営情報科)

鋤先遺跡および福岡県下の出土六道銭について

櫻木 晋一

(九州帝京短期大学経営情報科)

六道銭とは、死者を葬るさいに棺内あるいは墓壙内に副葬する銭貨のことであり、俗には三途の川の渡し賃といわれている。頭陀袋に銭を入れ、死者に持たせる習俗が存在していたことは文献からも知られている(松浦1969)。実際に近世墓から出土する六道銭は、重なりあって錆着しているものが多いことや、布が付着したり、布に包まれて出土するものがかなり存在することからも、この六道銭を頭陀袋に入れて副葬するという習俗をうかがい知ることができる。近年では、流通銭貨の復元という経済史の観点からも、この六道銭は注目されている。特に、徳川幕府の銭貨政策で、渡米銭から寛永通寶への通貨の切り替えが迅速に行われたことを実証するための有効な資料となっている(鈴木1988・1993a・櫻木1990a)。出土六道銭資料の集積により研究が進展し、徐々にその実態が明らかになりつつある。九州地域では、近世墓に比して中世墓から出土する六道銭の例が少ないために、その六道銭の出現時期の特定には困難をとまなうが、遅くとも中世後半には、銭貨流通量の増大と六道など仏教思想の民衆への普及によって始まったと考えられる。そして、仏教が幕藩体制の行政組織の末端に組み込まれる17世紀中期以降には仏教の葬送儀礼が定式化し、六道銭を6枚で副葬する習俗が定着していくことを確認できる。このように六道銭の枚数については6枚組が一般的であるが、必ずしも6枚であるとは限らず、鹿児島県地域のように7枚組が圧倒的に多い地域も存在する(櫻木1990b)。また、長崎県壱岐郡声辺町のように3枚を副葬しているような地域も存在する(声辺町史1978)。6枚組というのは、六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人道・天上)に関連付けられて考えられている。つまり、六地蔵信仰の普及にとまなない、それらの地蔵に対する奉養銭と考えられているのである。ちなみに7枚の意味は、6枚プラス故人の念持仏または阿彌陀仏への養銭が1枚という解釈が存在する(佐々木1989)。

近年、福岡県下における近世墓の発掘調査例が増加し、現在までのところ800基を超える六道銭出土墓が確認されている(表11)。この数は東京都全体の六道銭出土墓総数を上回る数であり(鈴木1994a)、福岡県は全国でも最多の六道銭資料を有する県であるといえる。表11からは、福岡市と北九州市の両市に出土例が集中していることが読み取れ、このことは、福岡県の都市部における開発が急速にすすんでいる結果であると同時に、中・近世の遺跡が考古学の研究対象として認識され、発掘調査がなされるようになった結果であると考えられる。福岡県教育委員会によっても、門田辻田地区(福岡県教育委員会1978)の調査が大規模になされたのをはじめとして、犬鳴ダム(福岡県教育委員会1990)の調査など数遺跡の調査が実施されている。特に最近では大規模な調査が実施されており、北九州市教育委員会ならびに北九州市教育文化事

表11 福岡県近世墓六道銭出土遺跡一覧表

	遺跡名	全墓数	六道銭 出土墓数	文 献
1	唐人塚	4	2	福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係XⅧ」1977
2	門田辻田地区	41	13	福岡県教育委員会「山陽新幹線関係9集」1978
3	大鳴ダム	16	6	福岡県教育委員会91集「大鳴I」1990
4	鶴先 (稚田道路第3地点)	95	42	福岡県教育委員会 本報告書
5	金武古墳群	5	1	福岡市教育委員会15集「金武古墳群発掘調査報告」1971
6	板付周辺C-5a	5	3	福岡市教育委員会36集「板付周辺遺跡調査報告書(3)」1976
7	陸岡	6	2	福岡市教育委員会108集「福岡遺跡」1984
8	天福寺(博多22次)	388	64	福岡市教育委員会118集「博多Ⅲ」1985・櫻木晋一「博多二十二次(天福寺)と箱崎・馬出遺跡群の出土六道銭」『福岡県地域史研究』第9号1990
9	博多28次	数基	数基	福岡市教育委員会147集「博多Ⅶ」1987
10	馬出東工区	65	18	福岡市教育委員会193集「博多 高速鉄道関係調査(4)」1988
11	上月隈	182	39	福岡市教育委員会257集「上月隈遺跡」1991・櫻木晋一「博多遺跡群の出土銭貨(2)」『法哈達』1993
12	席田青木	567	135	福岡市教育委員会356集「席田青木遺跡1」1993
13	黒田長政墓	1	1	森克巳「宋銅銭の我が国流入の端緒」『史淵』43 1950
14	御堂	14	2	北九州市教育文化事業団25集「御堂遺跡」1984
15	葛原(Ⅱ)	4	1	北九州市教育文化事業団27集「葛原(AⅡ)遺跡」1984
16	北方	28	3	北九州市教育文化事業団48集「北方遺跡」1986
17	島山	1	1	北九州市教育文化事業団57集「島山遺跡」1987
18	御座遺跡群	約100	6	北九州市教育文化事業団「埋蔵文化財調査空室年報3」1987
19	上清水	693	41	北九州市教育文化事業団117集「上清水遺跡・Ⅴ区」1992
20	京町	77	12	北九州市教育文化事業団147集「京町遺跡3」1994
21	京町	?	205	北九州市教育委員会 現在報告書刊行準備中
22	宗玄寺跡	約600	139	北九州市教育文化事業団「埋蔵文化財調査空室年報10」1994 現在報告書刊行準備中
23	普濟院跡	82	51	北九州市 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムで整理中
24	安城遺跡群	30	9	鞍手町教育委員会4集「安城遺跡群」1986
25	大谷	?	1	須恵町教育委員会
26	南米里	?	2	須恵町教育委員会
27	豆塚山	?	2	春日市教育委員会
28	原田	225	66	筑紫野市教育委員会 現在報告書刊行準備中
29	下見	42	1	久留米市教育委員会19集「S52年度東部土地区画整理」1978
30	坂本	3	1	久留米市教育委員会
31	堀切寺屋敷	34	2	瀬高町教育委員会5集「藤の尾垣添遺跡Ⅱ」1989
32	大間C地点	13	1	大牟田市教育委員会23集「昭和58年度埋蔵文化財発掘調査概要」1984
33	武丸皆真宅	1	1	宗像市教育委員会15集「武丸皆真宅」1988

20と21の京町遺跡は同一遺跡だが、発掘主体が異なるので別番号とした。

集団によって発掘調査が実施された北九州市小倉北区の京町遺跡では、200基を超える墓から1000枚以上の六道銭が出土している。この数は、一遺跡から出土した六道銭としては最大規模のものである。福岡市でも上月隈遺跡（39基181枚）や席田青木遺跡（135基713枚）からかなりの六道銭出土例がみられる。鶴先遺跡からも268枚の六道銭が42基の墓から出土しており、良好な資料であるといえる。

ここで鶴先遺跡から出土した六道銭について考察を加えることにする。本遺跡からは、総計277枚の銭貨が出土しており、その大半の268枚が近世墓にともなう六道銭である（表12）。5枚は2基の一字一石経遺構から出土している。1号一字一石経から新寛永通寶が1枚、2号一字一石経から古寛永通寶が3枚と新寛永通寶が1枚である。但し、発掘担当者の所見によると、2号一字一石経から出土した内の2枚については、2号墓からの流れ込みの可能性があるとのことである。一字一石経から出土する銭貨についての報告例はあるが（直方市教育委員会1984）、全く研究はなされておらず、その埋納の意味解明などは今後の課題である。六道銭が出土した墓数は42基で、95基の近世墓が存在していたので44.2%の墓に六道銭が副葬されていたことになる。この数値は六道銭の副葬率を知るうえで目安となるが、改葬などによって墓跡となっているものの存在なども考慮せねばならず、単純にこれを副葬率とするわけにはいかない。また、実際の銭貨だけでなく、紙に書いた銭貨を副葬していた可能性もあり、この場合考古学的には検出が難しい。近世でも新しい時期のものほど、副葬率が高くなっているようである。最近の調査は精密に行われているので、正確な銭貨の副葬率の算出も不可能なことではなくなると思われる。

まず、一基あたり何枚の銭貨が副葬されていたかをみると、21基が6枚組である。ちょうど50%である。また、同一墓から複数の銭貨の塊を検出した4基（4号墓・36号墓・77号墓・88号墓）も、36号墓Aの1枚を除いて6枚のまとまりをもつものばかりであり、6の倍数で副葬されていたと考えられる。（36号墓Aの1枚は近代銭であり上部からの流れ込みの可能性も高いと考えられる）関東などでも同様に6の倍数で出土しているケースが報告されている（港区教育委員会1988）。従って、6という数字が多分に意識されていたということを推測することができる。ついで7枚組が6基、5枚組が4基という順序である。最多が88号墓の18枚、最少が42号墓の1枚である。6枚が一般的であっても、必ずしも6枚ではないことを示している。

発掘調査の対象となる近世墓には、墓標を伴わない被葬者不明のものが大半で、時期決定が困難であることが一般的である。しかし、副葬された六道銭が存在する場合、その組合せに注目して墓造営期の推定が可能となる。現在のところ、六道銭は最も有効な古墓の時期判定の指標となっている。近世墓の造営期を推定するために、表12のように寛永通寶鑄造以前の渡来銭、ス寶銭とよばれている寛永13年（1636）初鑄の古寛永通寶、寛文8年（1668）初鑄の背面に「文」字を有するいわゆる文銭、ハ寶銭とよばれている元禄10年（1697）初鑄の新寛永通寶、元文4

表12 鋤先遺跡出土六道銭一覧

道銭No(号)	総数	板	古	文	新	鉄	不明	近代	備考
4 (上)	6		3	1	2				▽銅通2
4	6			1	4	1			
5	6				3	2	1		背「元」1
6	6		3	1	2				
8	3			1	2				▽銅通1
10	6		1		5				▽銅通2
11	5		1	1	3				
13	6			1	4	1			▽銅通1
16	6		3	2	1				
18	8	1	2		5				開元通宝1, ▽銅通1
22	6		1	2	3				布付着
25	6		1	1	4				▽銅通1
27	4		1					3	一銭3 (S2, T8, T9)
29	6		1		5				▽銅通1
30	6		2		4				▽銅通1
31	6		1	1	2	1	1		
32	5		2		1		2		不明2は銅着
34	6		4		2				▽銅通1, 布付着
35	2				2				
36A	1							1	一銭1 (M9)
36B	6		3		3				
36C	6				5		1		背「佐」1, ▽銅通1
38	7		2		3		2		▽銅通2
41	6		1		5				未だ分銭の表面に付着 その上から目の粗い布が付着
42	1		1						
55	6		1	1	4				▽銅通2, 布付着
57	7		1	1	5				▽銅通2, 布付着
62	6		4	2					
63	6	1	1		4				太平通宝1
65	5			1	1	3			
66	6		2		4				▽銅通2
69	7				5	2			未だ付着
74	7		4	1	2				
77A	6		3	3					
77B	6	2			3	1			皇宋通宝1, 開元通宝1, 背「長」1, ▽銅通1
78	3		2		1				▽銅通1
80	6		1		1	1	3		背「元」
81	7		2		4		1		
82	6		1		4		1		
86	5		2	1	2				▽銅通2, 紙付着
87	4		2	1	1				鉄脚付着
88A	6		3		3				▽銅通1
88B	6		3		3				
88C	6				2	4			
90	6				4	2			
92	6		2		4				▽銅通2
94	7		3	1	2	1			鉄脚に布付着
95	6		1		4	1			布付着, 背「元」1
1区表土	2							2	半銭 (M18) 1, 一銭 (M9) 1
1号一字-石内No1	1				1				
2号一字-石No1	1		1						
2号一字-石No2	2		2						
2号一字-石No3	1				1				▽銅通1
ゴミ穴2	1							1	半銭?
東園大溝	1							1	一銭 (S11)
合 計	277	4	74	24	155	20	12	8	Mは明治, Tは大正, Sは昭和

年(1739)以降に鑄造された素材が鉄である寛永通寶鉄銭の5つに大別して考える。

遺構にともなう六道銭は268枚で、渡来銭4枚(1.5%)、古寛永通寶71枚(26.5%)、文銭24枚(9.0%)、新寛永通寶133枚(49.6%)、寛永通寶鉄銭20枚(7.5%)という内訳である。新寛永通寶が最も多いことから、18世紀以降の墓が多いという推定ができる。

渡来銭は開元通寶(621年初鑄)2枚と太平通寶(976年初鑄)1枚と皇宋通寶(1039年初鑄)1枚の計4枚のみである(第128図)。これらの渡来銭が出土している墓は18号墓、63号墓、77号墓Bの3基であるが、いずれの墓も新寛永通寶の占める割合の方が高く、渡来銭が出土していることをもって古い時期の墓であるとは言えない。3基とも新寛永通寶をともなうことから、18世紀以降の墓であると推定できる。この渡来銭は退蔵されていたものが六道銭として使用されたか、流通市場にわずかばかり残っていた渡来銭であろう。徳川幕府が渡来銭通用禁止令を発令した寛文10年(1670)には、渡来銭はほとんど流通市場から駆逐されてしまったと考えられており、本遺跡の六道銭からも、新寛永通寶が広汎に流通していた18世紀には、渡来銭のほとんどは姿を消してしまっていたと推定できる。

本遺跡の六道銭を副葬した墓の中で、時代的に古い可能性が高い墓は62号墓と77号墓Aである。但し、77号墓Aについては77号墓Bと合計して12枚であると考えられるので、77号墓Bが寛永通寶鉄銭を含んでおり新しい時期のものであるから、62号墓だけが古い墓であると考えられる。62号墓には新寛永通寶が含まれておらず、17世紀末頃に造られた墓である可能性が高い。62号墓は他の墓との切り合い関係がなく、建設省の補償調査によれば宝永3年(1706)の墓碑銘があり、六道銭の推定年代とはほぼ一致することが確認できた。42号墓は古寛永通寶だけが出土しているが、1枚のみでは古い墓であるとは明言できない。近代銭を含む明治期以降の27号墓と36号墓A以外の墓には、全て新寛永通寶が含まれており、18世紀以降に造られた近世墓群であると考えられることができる。さらに、寛永通寶鉄銭が出土している12基の墓については、18世紀の中期以降のものであると推定できる。新寛永通寶と寛永通寶鉄銭の鑄造量については、鑄造地も多く文献史料もほとんどないため不明だが、寛永通寶鉄銭があまり副葬されていない事実は、この鉄銭が副葬品としては嫌われた可能性も捨てきれない。

以上のように、この墓地は17世紀末から明治以降まで継続して墓の造営が続けられていたことを、これらの六道銭から読み取ることができる。以下に特徴的な銭貨について考察を加える。

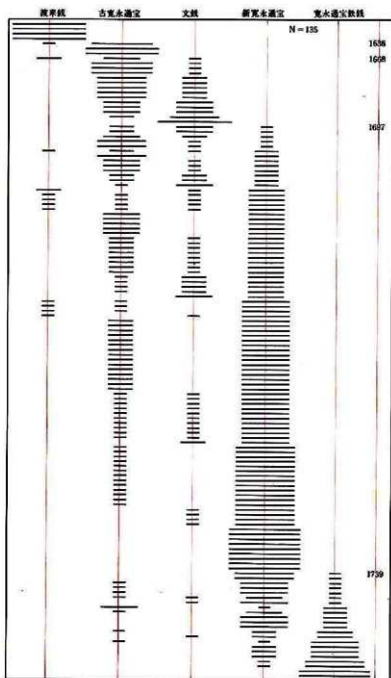
41号墓と69号墓から出土した六道銭には、米粒が付着していた。特に41号墓のものについては、椀状のものがびっしりと銭貨に付着しており、その上には目の粗い布が付着している。従って、剥ぎ取りをしないがぎり肉眼では銭種を判別することは不可能な状態であったので、X線撮影によって銭銘を読み取った。その結果、新寛永通寶であることが確認できた(第127図)。近年各地で、このX線撮影を利用して銭銘を読み取ることが行われるようになってきた(長崎県教育委員会1991)。利用可能な技術はおおいに使用すべきであると考えられる。この米粒が付着

した六道銭の類例として、神奈川県横浜市上の山遺跡（横浜市埋蔵文化財センター1992）の中世墓から出土した2例（3枚と4枚）の六道銭が存在する。これらは握り飯の中に握り込んで入れられており、なおかつ握り飯の表面に炭化した布片が残っていた例として知られている。報告書には「ここ（栃木県河内郡豊岡村）の浄土宗法蔵寺の檀家では三角の袋に米を親碗一杯と一握りとをいれ、さらに昔は六文銭までも入れたが、それを二つ作り、一つは棺におさめて棺と一緒にここよ……」という一文が紹介されており、本遺跡の米粒付着の例と結びつけて考えることもできる興味深い記述である。知見の限りでは、これ以外に米粒が付着した例は知られておらず、貴重な出土例であると思われる。41号墓は18世紀前期、69号墓は18世紀中期以降と推定でき、上の山遺跡のものが中世なので、これらから握り飯など米を死者に持たせる習俗は、中世から近世中期まで継続していたことを確認できた。類例の報告が待たれる。

表12の備考でマ頭通という記載が目につくが、これは寛永通寶の「通」字の旁上部は通常コとなっているのだが、マとなっているものことで、寛永通寶としては例外的なものである。京都七条銭（1726年初鑄）や鳥羽・伏見銭（1736年初鑄）とよばれているものがこのマ頭通であるが、現在までの研究で、九州地域内での出土数が多いことを確認している。このことは、これらマ頭通の鑄造量の多さと、九州が関西の流通圏に属していたということを示していると考えている。新寛永通寶の中には背面に文字を有するものが存在するが、その中でも「元」字が3枚でもっとも多い。この銭貨も摂津高津銭（1740年初鑄）であり、関西で鑄造されたものである。この背「元」も九州地域内で出土数の多いものである。その他の背字を有するものは「佐」「長」が各々一枚ずつ出土している。背「佐」は佐渡相川銭（1740年初鑄）、背「長」は長崎稲佐銭（1767年初鑄）である。

鑑先遺跡は豊前国の純農村地域であり、同じ豊前国でも城下町小倉の六道銭との比較によって、階層差が生じているのかを検討する必要がある。また、他国の農村部との比較などによって、六道銭に地域差が生じているかどうかを検討することなどは今後の課題である。筆者もさまざまな六道銭資料を調査研究してきたが、現在までのところ小倉（京町遺跡）での出土例との際立った差異を認めることはできない。また、筑前福岡の周辺農村部（上月限遺跡・席田青木遺跡）との差異も認められない。

ここで、福岡県下で出土した6枚組の六道銭だけでセレエーションを組むことにより、各銭貨の流通の特徴などについて検討してみる（第126図）。セレエーションを組むさいに使用した資料は、表11の遺跡中の分類可能な6枚組のもの⁹と、有田遺跡7次（福岡市教育委員会 1982）の中世墓で出土した渡来銭のみからなる6枚組の一例を加えて作成した。6枚組のものだけを使用する理由は、6枚が六道銭の代表的枚数で出土資料が多く、擾乱などを受けていない副葬時のままである可能性が一番高いものであると考えられるからである。このセレエーションは、個々の器物の出現→盛行→消滅にいたる量的変化のパターンが単純型カーブを描くことに着目



第126図 福岡県六道線6枚セットセリエーション

した分析法であり、器物が連続して出現しているのか不連続なのかを判定できる。

セリエーション分析の手順を簡単に説明すると、

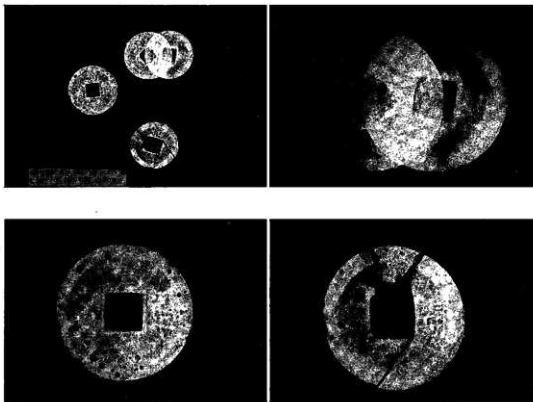
①横軸には、年代の古い順に左から渡来銭、古寛永通寶、文銭、新寛永通寶、寛永通寶鉄銭を並べ、縦軸は、上を古い時期とする時間軸とする。銭貨は初鑄年が知られているので、この時間軸上における上限年代を固定できるという利点をもつ。

②分類可能な6枚組の135例を、最も新しい銭貨の示す上限年代よりも遅って配置しないようにし、一例ずつ軸の中心から対称になるように時間軸上に配列し、軍艦型のカーブを描くようにする。

九州地域内では渡来銭を主体とする6枚組の六道銭はほとんど存在しない(櫻木1994)。このことについては、偶然資料が発見されていない可能性もあるが、10を超える中世墓六道銭出土遺跡が存在していることを考えると、福岡県地域では中世には六道銭を6枚とする習慣が根付いていなくなったと考えられる。また、古寛永通寶のみの六道銭も少ないことから、6枚組で六道銭を副葬することが一般的になるのは、17世紀中期以降であると考えられる。少ない資料からではあるが、全国傾向(鈴木1988・1993b)と同様に、福岡県地域では中世の渡来銭から古寛永通寶への流通の連続関係は認めることができない。しかし、古寛永通寶・文銭・新寛永通寶・寛永通寶鉄銭はなだらかな軍艦型のカーブを描くことができることから、その流通に連続性を確認できる。また、この古寛永通寶・文銭・新寛永通寶など単一銭種だけからなるものが少ないということは、銭貨を副葬するさいに特定の銅銭だけを選別しているのではないということも示していると考えられる。渡来銭と寛永通寶鉄銭が共存する例が存在しないことから、17世紀末には渡来銭は流通市場からほとんど駆逐されてしまったと推定できる。渡来銭通用禁止例は遵守されていたということであろう。つまり、徳川幕府の発行した寛永通寶の流通量がそれだけ多く、渡来銭を駆逐できたということである。このセリエーション図からも、六道銭として使用されている寛永通寶鉄銭が少ないことが読み取れる。近世後期資料の調査例が少ない可能性と、鉄銭が嫌われた可能性のいずれかである。

文銭の鑄造量は一説では約197万貫であるといわれており(新井白石『折りたく柴の記』)、この数値が正しいとすれば、古寛永通寶と新寛永通寶の鑄造量を逆にこの図から推定できると考えられる。セリエーション図に表れた銭貨は6枚×135=810枚である。(渡来銭38枚・古寛永通寶208枚・文銭96枚・新寛永通寶407枚・寛永通寶鉄銭61枚)寛永通寶銅銭だけをこの比率で推定すると、古寛永通寶は約428万貫、新寛永通寶は約835万貫ということになる。文献記録等から古寛永通寶の鑄造量を推定し325万貫としたものもあるが(日本銀行調査局1973)、あくまで推定値であり、出土品から推定すると上記の数値となる。新寛永通寶にいたっては実際の鑄造量の把握は困難であり、835万貫というのは目安になると考える。

最後に、本遺跡の六道銭には含まれていなかったが、南無阿彌陀仏の文字が鑄出された念仏



第127図 出土六道銭写真(拡大)

銭や南無妙法蓮華經の文字を有する廻日銭とよばれる銭形製品、土で作った銭貨を模した製品などが出土する場合もあるので注意を要する(第129図)。九州地域では、これらは北九州市京町遺跡と福岡市天福寺など数例しか出土例が知られておらず、全国的にもこれらの銭形製品の出土例はまだ少ない(鈴木1994b)。都市部の遺跡から出土する可能性が高いので注意を要する。また、大規模な調査が進められるようになってきたので、今後の調査についての留意点を二三述べてまとめとする。まず、出土状態の確認と出土位置も把握すべきである。紙や布が付着しているものも多く、孔に紐を通したものも存在する。現在までの調査経験から銭貨の重ね方は無作為であることは確認できているが、付着物については注意を要する。出土位置は、六道銭を頭陀袋にいれて首から懸けたのか、手に持たせたのか、傍らに置いたものかなど当時の習俗を復元する上で重要である。六道銭の他にも、備・ハサミ・ケヌキ・数珠・キセル・茶碗などが副葬されていることがあるが、それぞれの遺物の編年だけでなく、そのセット関係の研究も今後の課題であると考えられる。墓墳の形態や棺材、改葬の有無の確認など、さまざまな視点をもって調査にあたるべきであると考えられる。調査される墓を学際的に総合研究することが、



開元通寶
18号墓



太平通寶
63号墓



聖宋通寶
77-B号墓



新寬永通寶 背「佐」
36-C号墓



古寬永通寶
55号墓



文錢
55号墓



新寬永通寶(▽頭通)
55号墓



新寬永通寶(▽頭通)
55号墓



新寬永通寶
55号墓



新寬永通寶
55号墓



古寬永通寶
62号墓



古寬永通寶
62号墓



古寬永通寶
62号墓



古寬永通寶
62号墓



文錢
62号墓



文錢
62号墓



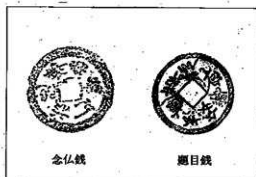
新寬永通寶 背「長」
77-B号墓



新寬永通寶 背「元」
80号墓



第128圖 鶴先遺跡出土六道錢拓影 (1/1)



第129図 銭形製品拓影(1/1)

今後の研究方向であるとする。

本研究は、平成六年度学術研究振興資金ならびに平成六年度文部省科学研究費補助金（一般研究C）「西日本における銭貨流通史の研究——出土銭貨からの復元——」（課題番号06630067）による研究成果の一部である。

注

- ①「賈」字の貝部分最後の三画がスにみえるものをス貨銭、同じく最後の二画が開いてハにみえるものをハ貨銭とよんでいる。
- ②銭貨のX線撮影は、歯科医師松尾健氏ならびに福岡大学付属病院整形外科医師緑川孝二氏と放射線科のスタッフ一同の御協力にて実施できた。ここに深謝する次第である。（撮影条件は100Kv600mAs90cmである）
- ③表中番号1・4・6・8・10・11・12・13・14・16・18・19・20・24・30の各遺跡の分類可能な6枚組の資料を使用している。21の京町遺跡は、北九州市が現在報告書を作成中であり、多数の良好な資料を含んでいるが、報告書の刊行までその使用は差し控えた。

文 献

- 芦辺町 1978 『芦辺町史』
- 新井白石 1974 『折りたく柴の記』 中公文書版
- 櫻木晋一 1990a 『十七・八世紀における寛永通宝の流通状況』 『史学』 第59巻第1号

- 櫻木晋一 1990b 「前畑遺跡の出土銭貨と鹿児島県下の六道銭」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書52 「前畑遺跡」
- 櫻木晋一 1994 「九州における中世墓出土の六道銭」『出土銭貨』第2号
- 佐々木四十臣 1989 「葬送儀礼と六道思想」瀬高町文化財調査報告書第5集 「藤の尾垣添遺跡II」
- 鈴木公雄 1988 「出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銅銭流通」『社会経済史学』第53巻第6号
- 鈴木公雄 1993a 「渡来銭から古寛永通宝へ」『論苑考古学』天山舎
- 鈴木公雄 1993b 「多数の銭貨を有する六道銭について」『史学』第62巻第3号
- 鈴木公雄 1994a 「社会経済史学会第63回全国大会配布資料」これによると東京都では11遺跡631墓から六道銭が出土しているが、95墓は中世墓である。従って、近世墓は536墓から六道銭が出土している。
- 鈴木公雄 1994b 「念仏銭・題目銭と六道銭」『史学』第63巻第3号
- 長崎県教育委員会 1991 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅳ」小園城跡出土の朝鮮通貨などのX線写真が掲載されている。
- 日本銀行調査局 1973 「凶録日本の貨幣2」東洋経済新報社
- 直方市教育委員会 1984 「関車田遺跡」
- 福岡県教育委員会 1978 「山陽新幹線関係第9集」
- 福岡県教育委員会 1990 「犬鳴I」
- 福岡市教育委員会 1982 「有田・小田部」第2集
- 松浦秀光 1969 「禅家の葬法と追善供養の研究」山喜房
- 港区教育委員会 1988 「増上寺子院群」
- 横浜市埋蔵文化財センター 1992 「上の山遺跡」

(3) 徳永遺跡群の中の^{スサギ}鋤先遺跡について

前章までが、鋤先遺跡の発掘調査の記録である。

多くの新しい、また確実な事実が明らかになった。その中には、いままでの考えられていた事柄と異なった事実や将来さらに検討を必要とする問題を提起することとなった。

前章までのことを踏まえながら若干の考えを述べて、まとめとしたい。

1. 鋤先遺跡の背景

鋤先遺跡は川の上遺跡と谷間を挟んだ対岸にあって、呼べば答えることができる指呼間にあつて、往來は簡単であつたと考える。しかしながら遺跡の内容は相違する。川の上遺跡は弥生終末期の墓地群が中心である。鋤先遺跡は古墳時代が中心である。

当該遺跡の鋤先遺跡は非常に興味深い側面をもっている。

第130図に図示した通り、0区に横穴墓群と3区の高塚古墳群である。

0区の横穴墓は居屋敷横穴群の南支群のもので、田中渡橋への道を挟んだ丘陵地の賦川寄の西崖面に掘られている20~30基前後からなるものが居屋敷横穴群である。その上に須恵器を焼いた最古級の窯跡が検出されている。この居屋敷横穴群と窯跡の調査報告書については、次年度に作製するつもりである。

3区には7基の古墳が群集していた。これが盛土をもった高塚古墳である。

古墳がつくられた時期と横穴墓がつくられた時期は、年代的にはほぼ同時期であつた。約100m離れた場所がこれで、北側が横穴墓で、同一丘陵上の南端に高塚古墳があり、谷を挟んで、弥生終末期の生活面と墓地群、その中でも弥生時代の墳丘墓が検出された川の上遺跡が、この200mの間に存在している。興味深い事実である(註1)。このことについては、川の上遺跡の報告書によって、その概要がつかめた段階に論及してみたい。これも今後の課題としたい。

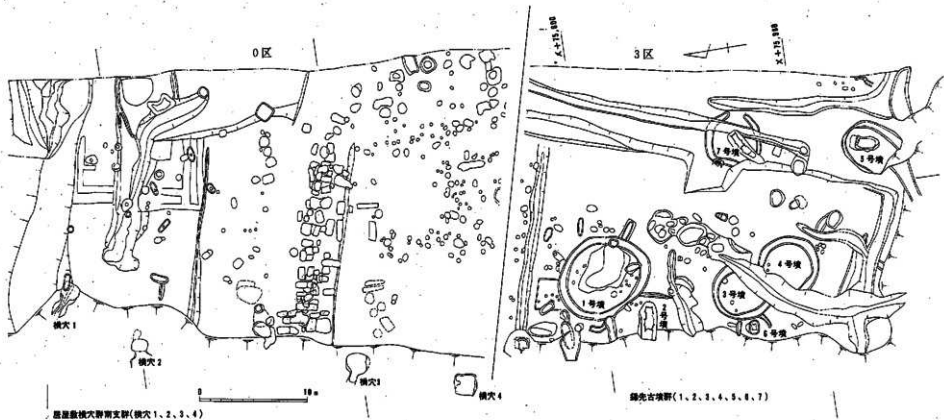
2. 鋤先遺跡の土塁について

鋤先遺跡の発掘調査では2区の土塁遺構について、その構築状況が判明している。

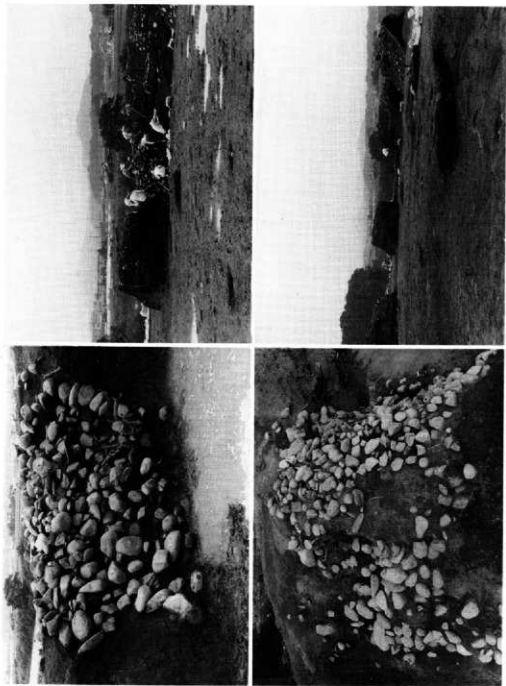
土塁は居屋敷とスサギ(鋤先)との字境である。賦川に沿って丘陵上を隔離するために土塁を築いたわけである。

その南西コーナーに第131図の様に河原石をもつてつくった面が検出されている。これは3区の横穴式石室の石材であり、土塁をもった土は墳丘の土でつくられていた。古墳の墳丘盛土を焼して土塁に転用していることが理解できた。この土塁から出土した遺物からも証明された。

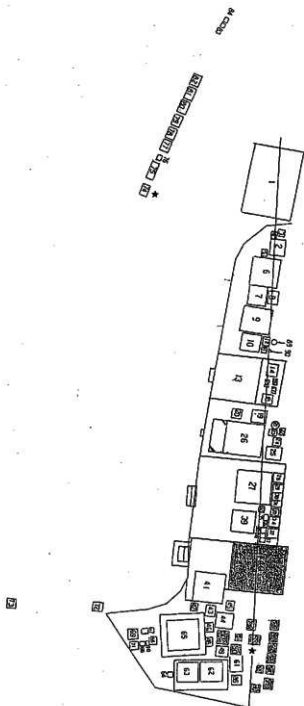
この土塁は何のために築かれたかが問題である。



第130図 高塚古墳と横穴古墳配置図(1/350)



第131圖 土原南西口一十一號況



第132図 果願寺墓地配図(平成元年 建設省提供).
★印位置が経塚の位置

この小字名のササギ（鋤先）はその地名の由来が鋤の先で、鋤は耕作を意味し、小倉藩では鋤先は新田開発に労力を提供して、その土地に特別の権利を保証された農民、あるいはその農民の住地を意味する（註2）。

これは天保年間の飢饉対策の一つである。新しく開拓した田圃に、この鋤先の小字をつけたもので、特典としてこの土地には税金の対象からはずされていた。いわゆる耕作者の取り分であった。

税金の対象となる土地とならない土地の境界にこの土塁が存在したわけである。隠田（かくしだ）にならないという形のものである。その折りに古墳群は壊されたものである。これが土地に刻みこまれた歴史の証である。

3. 鋤先遺跡の近世墓について

旧栗原寺の境内で、享保と天保の一字一石経塚を検出することができた。第132図は境内墓地の配置図である（註3）。74と53がそれにあたる。この2号の一字一石経塚をおさえて第93図の近世墓遺構配置図を重ねれば、被葬者まで特定できるわけである。今回は仏様を御守りしているご家族がおられるために深く追求することを控えたわけである。

以上をもって調査担当者としての義務をはたした。

註

註1 徳永川の上遺跡は本年度から3年間にわたり、調査報告書が作製される。

註2 『角川日本地名大辞典 40 福岡県』1989 角川書店

註3 建設省九州地方建設局・北九州国道事務所 調査より

V. おわりに

今回の発掘調査の成果を箇条書にして述べる。

1. 鶴先遺跡の特徴を一口で言えば、古墳時代のほぼ同時期に北端の蔵川の側面に横穴墓を4基検出した、道を挟んで対面に居屋敷横穴群が20基以上群集している。その南限である。これと3区で出土した7基の古墳群である。これをどう考えたらよいのだろうか？今後の宿題とする。
2. 近世後期に至って鶴先と居屋敷との字境に土塁を築いている。これを築くために、高塚古墳を破壊して盛土として使用している。南西コーナーには、この古墳群の石を使用して、コーナーを築いていたことが理解できた。
3. 旧果願寺の境内地の調査では近世墓群を検出したが、仏様として埋葬された人々がこんなに多く、残っておられるとは、残念である。
4. 御守をしている人々がいるのに、改葬の手続きとは上部の墓石だけとは、何を物語っているのかである。そのためにも深く追及することは控える。誰の墓まで特定できるためである。
5. 人骨がたくさん残っていたので、江戸期の農村部の形質が理解できる資料を提供した。また、副葬された六道銭の分析を可能にしたわけである。
6. 鶴先遺跡の遺構のあり方を把握することが、江戸期の開拓・開墾が実証できる資料を提供した。天保の食糧危機のおりである。

以上が、鶴先遺跡のまとめである。発掘調査・整理報告作業に協力された方々に感謝する。

特に、県立美術館の濱地館長・平副館長・菊川総務課長・普及課の森主査・西本、吉村学芸員そして坪田嬢には感謝の念にたえない。(H7. 1. 15)

椎田道路鶴先遺跡で、野幌より

1次調査の折

初霜に

コスモス
秋櫻寒し

霜の月 (久仁) H.元.11

2次調査では

風涼し

無縁でおわす

墓の群 (久仁) H.2.10

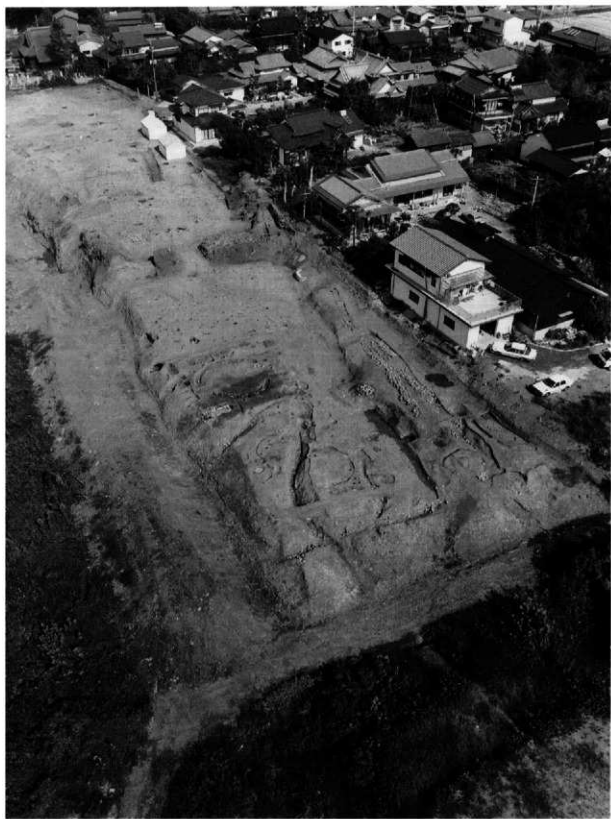
图 版



1. 鑄先遺跡周辺航空写真 ○ 鑄先遺跡



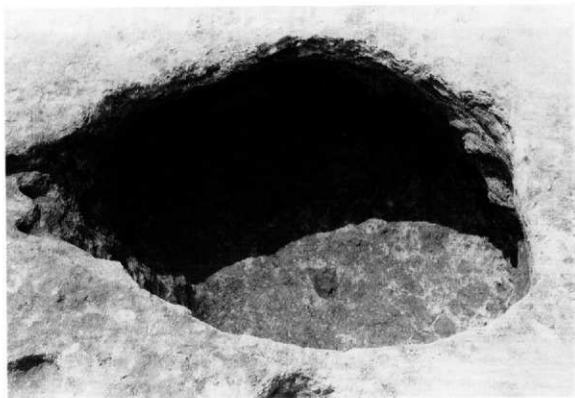
2. 調査前の鑄先遺跡（北から）



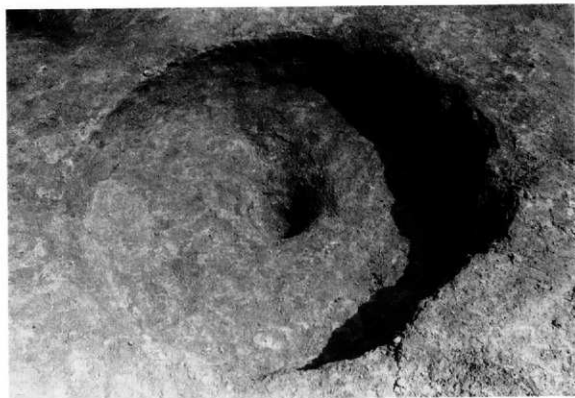
御先遺跡調査区全景（1～3区）



1区全景空中写真



1. 1区1号土倉



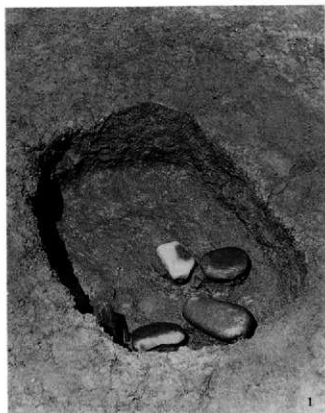
2. 1区1号土塚



1. 1区3号土坑



2. 1区4·5号土坑



1. 1区4号土壇 2. 5号土壇遺物出土状況
3. 5号土壇 4. 完掘後の5号土壇



1. 1区1~3号溜



2. 1区1号溜



D1-2



表1



D1-3



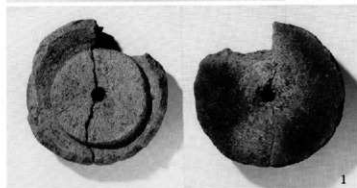
表2



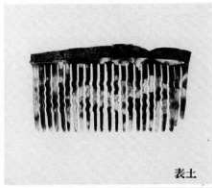
D5-9



表3



1



表土



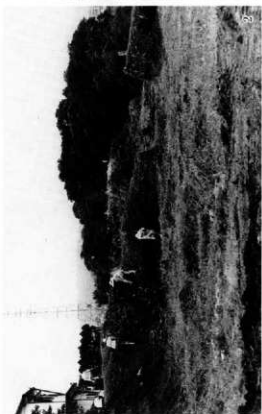
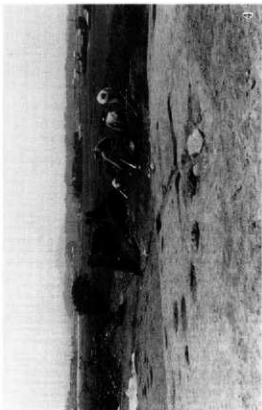
2



表土11



2区全景空中写真



3. 完備後の2区
4. 土層の調査風景

1. 調査前の2区
2. 調査前の土層



1. 2区1号住居跡



2. 2区2号住居跡



1. 2区土塁(1)



2. 2区土塁(発掘前)



1. 2区土塁の石積(1)



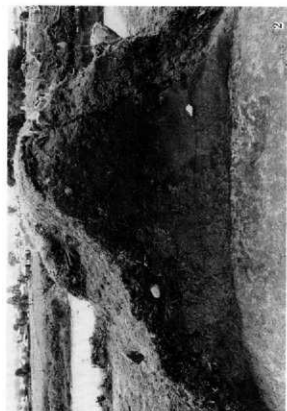
2. 2区土塁の石積(2)



3・4、土壁の石積(5・6)



1・2、2区土壁の石積(3・4)



1～4、2区土塁の盛土状況(1～4)



1・2. 2区土塁下のピット群 (1・2)



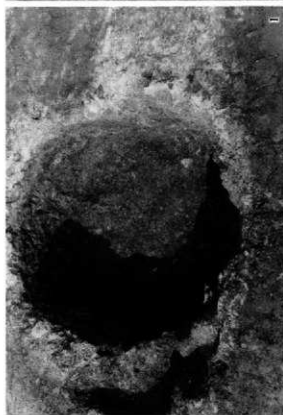
3. 土塁下で発見された1号住居跡



1. 2区土塁下で発見された土壇(1)



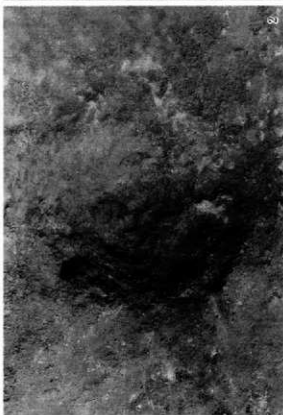
2. 土塁下で発見された土壇(2)



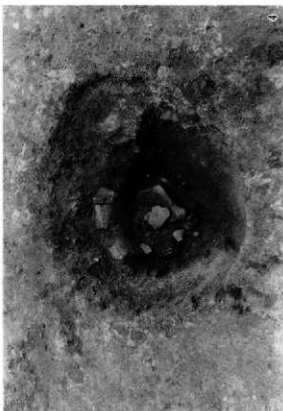
1・2. 2区ピット (1・2)



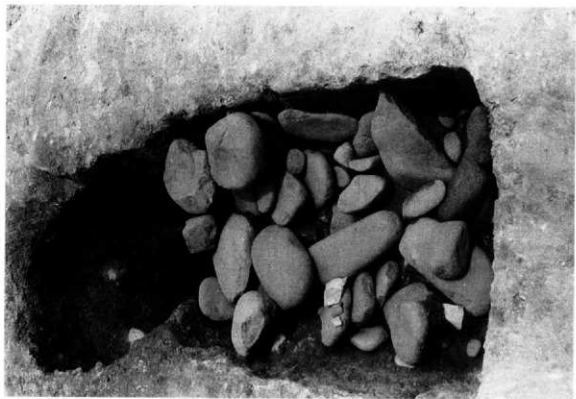
3・4. 2区大甕使用の溜坑型 (1・2)



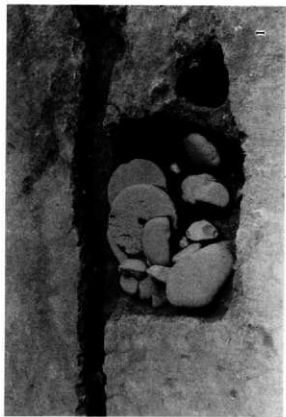
1・2. 2区ピット (1・2)



3・4. 2区大甕使用の溜坑型 (1・2)



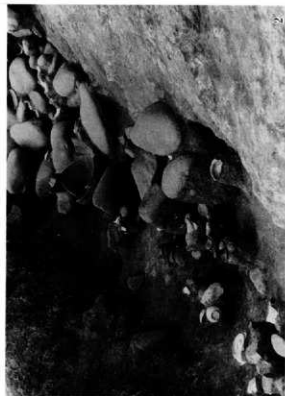
3. 2区基础



2. 石臼等取上付後基礎6

1. 2区基礎6状態





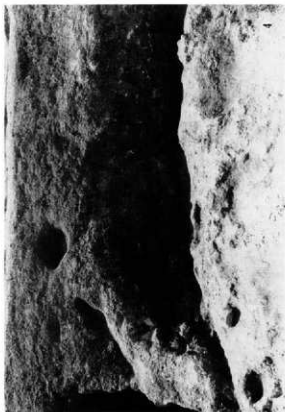
2・3. 2区大正溝遺物の出土状況



1. 2区大正溝



1~4, 2区大正溝遺物出土状況



3. 2号中世墓 4. 3号中世墓

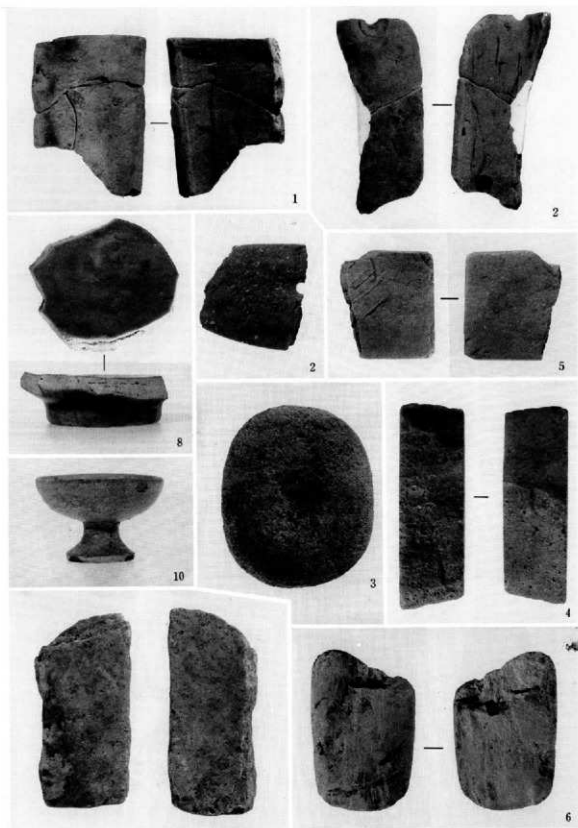
1·2. 2区1号中世墓



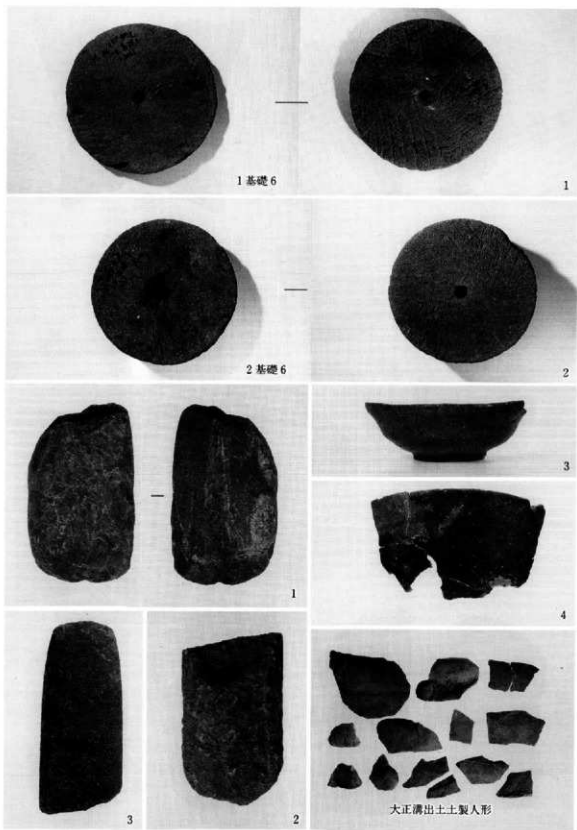
1、2区1号配石道槽



2·3、1号配石道槽状况



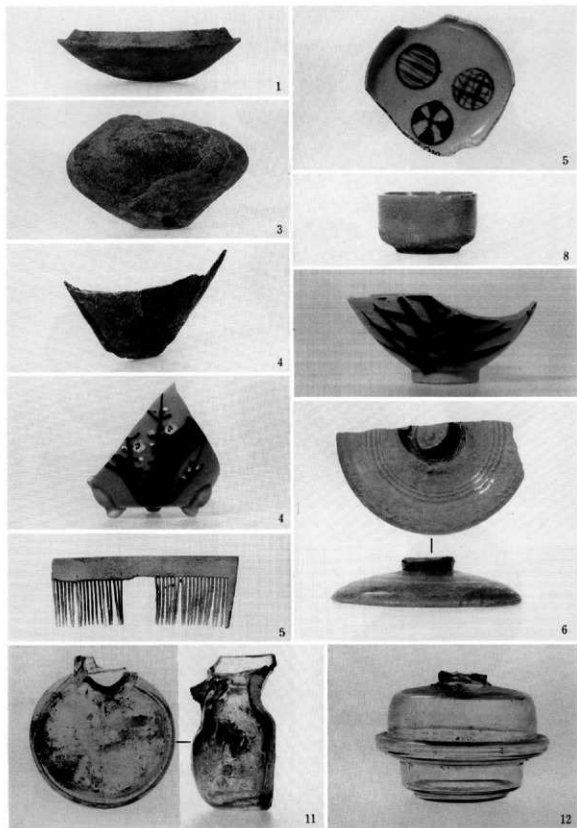
2区土壘等出土遺物



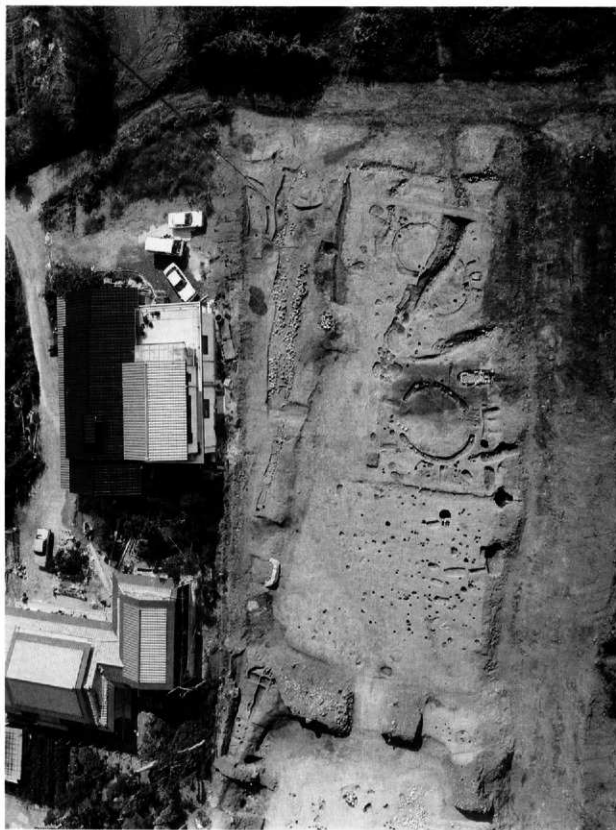
2区基礎・大正清出土遺物



2区大正溝出土遺物



2区大正清等出土遺物



3区全景空中写真



1. 3区1·2号墳全景



2. 3区1号墳全景



1. 3区1号墳周溝と2号墳



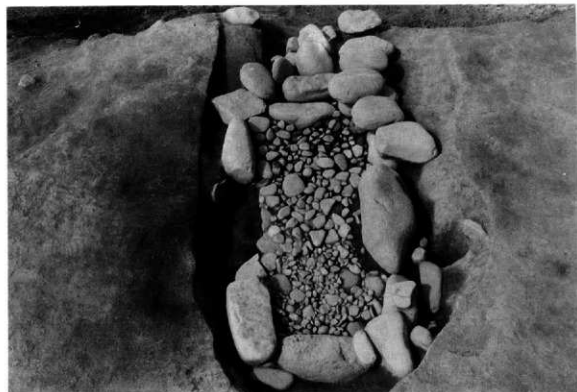
2. 3区1号墳周溝内遺物出土状況



3. 馬具の出土状況



1. 3区2号墳全景



2. 3区2号墳石室



1. 3区2号填石室闭塞状况



2. 3区2号填石室仕切部



2. 3区2号墳石室除去後の圓方



1. 3区2号墳石室下部床面



1. 3区3・4・6号墳と5・7号溝



2. 3区4号墳と5号溝



3. 3区5号墳周溝遺物出土状況



1. 3区3·6号坑



2. 3区6号石室



1. 3区7号墳全景1



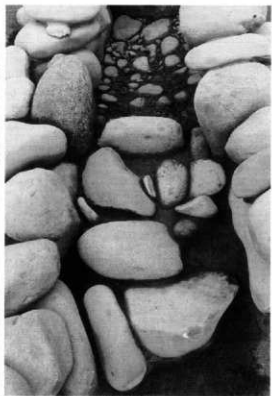
2. 3区7号墳全景2 (側面)



1. 3区7号墳墳丘と周溝



2. 3区7号墳石室



3. 3区7号墳石室閉塞状況



1. 3区7号墳石室左側壁
 2. 3区7号墳石室仕切部分
 3. 3区7号墳石室基底部
 4. 3区7号墳石室除去後の掘方



1. 3区20号土坑墓 全景



2. 3区20号土坑墓遗物出土状况



1. 3区1号土倉と1号土墳墓



2. 3区1号土倉内部と1号土墳墓



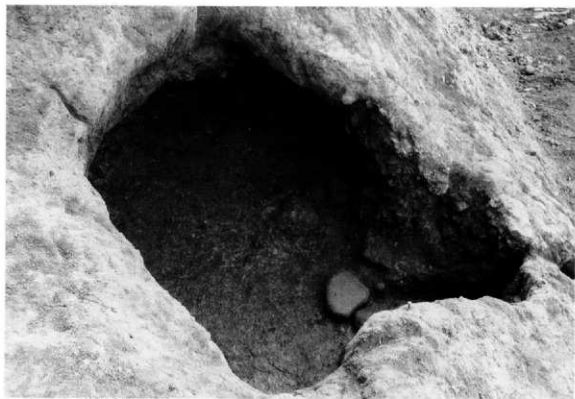
1. 3区2号土台全景



2. 3区2号土台閉塞部



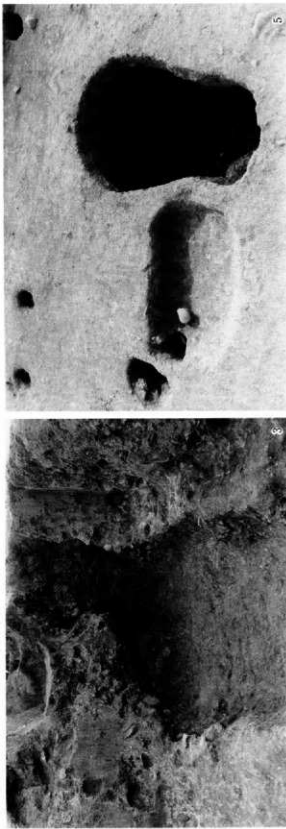
3. 3区2号土台閉塞部断面



1. 3区2号土倉内部



2. 3区2号土倉内部と排水溝



1. 3区3号土倉全貌 2. 3区3号土倉(完掘後) 3. 3区4号土倉全貌 4. 3区5号土倉全貌 5. 3区3号土倉と8号土倉墓



1. 3区2·3号土墩墓



2. 3区7号土墩墓



3. 3区8号土墩墓



1. 3区9号土坑墓



2. 3区13号土坑墓



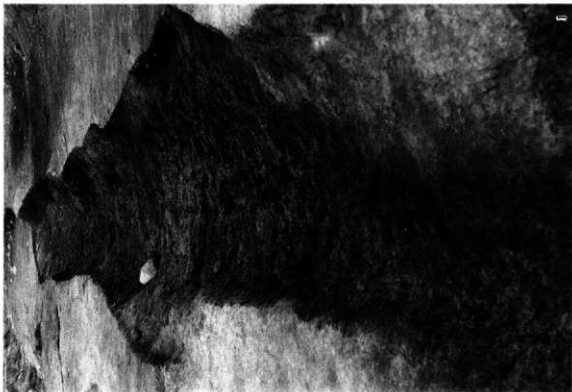
3. 3区2号配石道槽



2·3, 3区大漂集石状况(2·3)



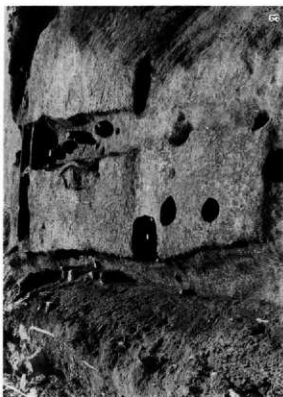
1, 3区大漂集石状况(1)



1. 3区完掘後の大溝

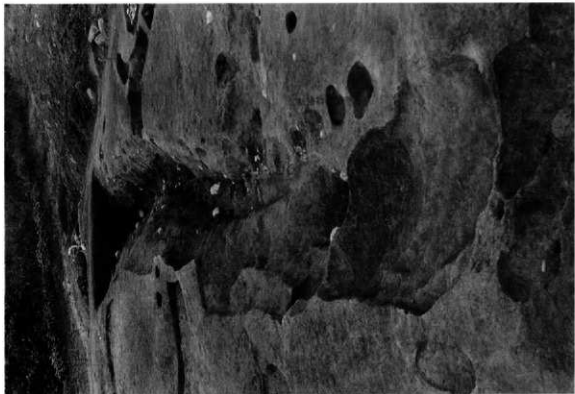


2

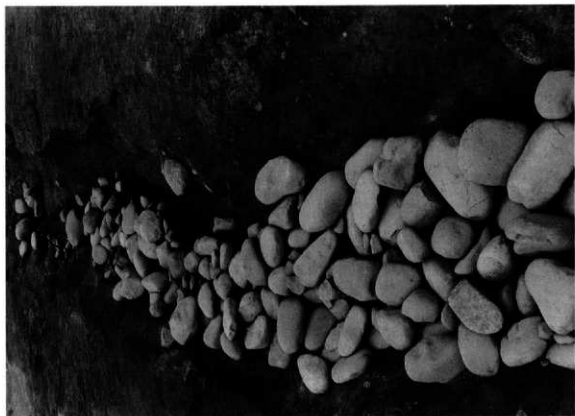


3

2. 完掘後の大溝 3. 大溝の東北端部



2. 3区完壁後の5号溝（北東から）



1. 3区5号溝（南西から）



2. 3区9号溝 (西から)



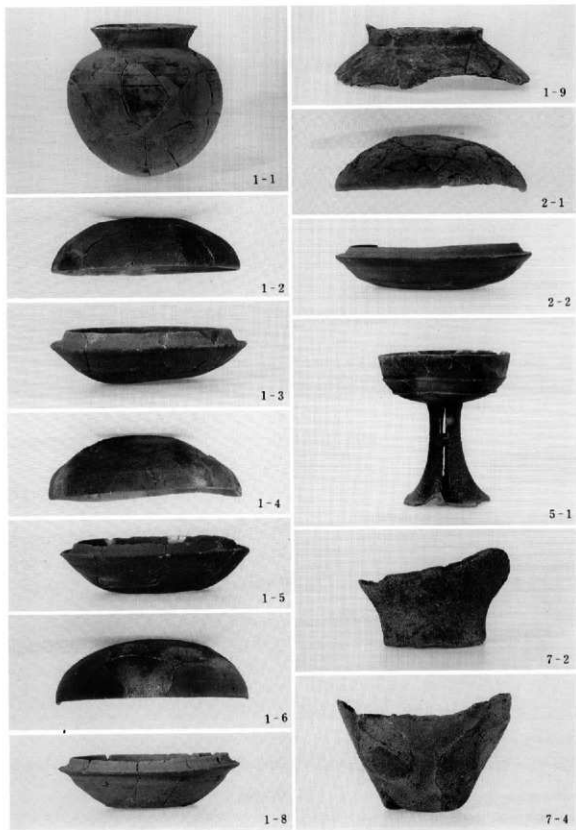
1. 3区7号溝 (東から)



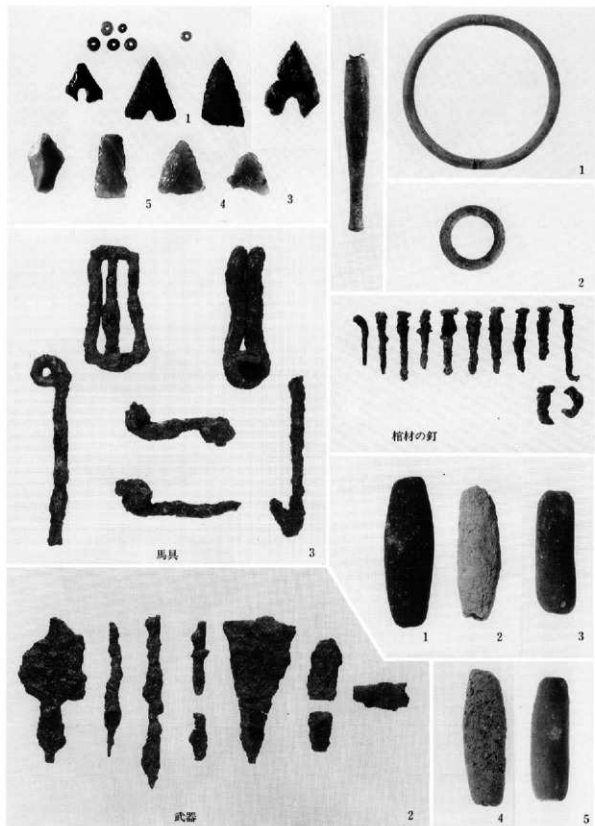
1. 3区近世建物跡



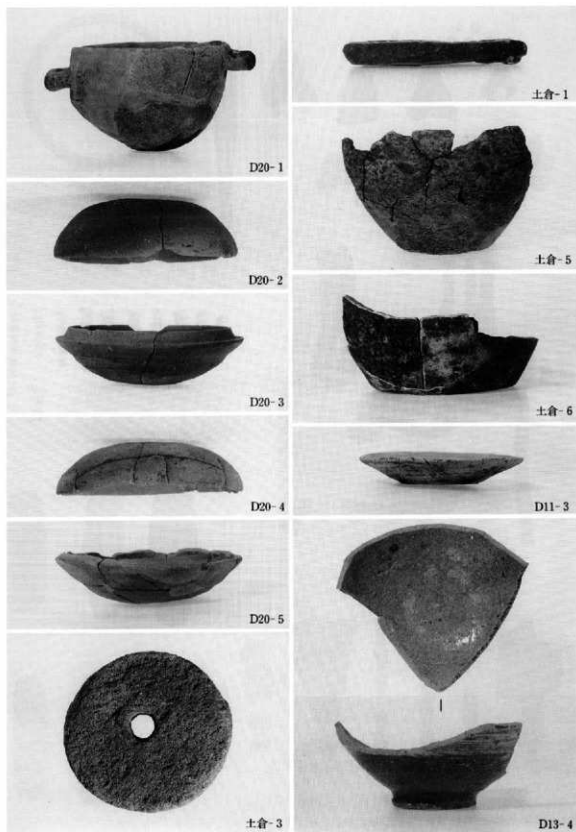
2. 3区調査風景 (左奥は川の上遺跡)



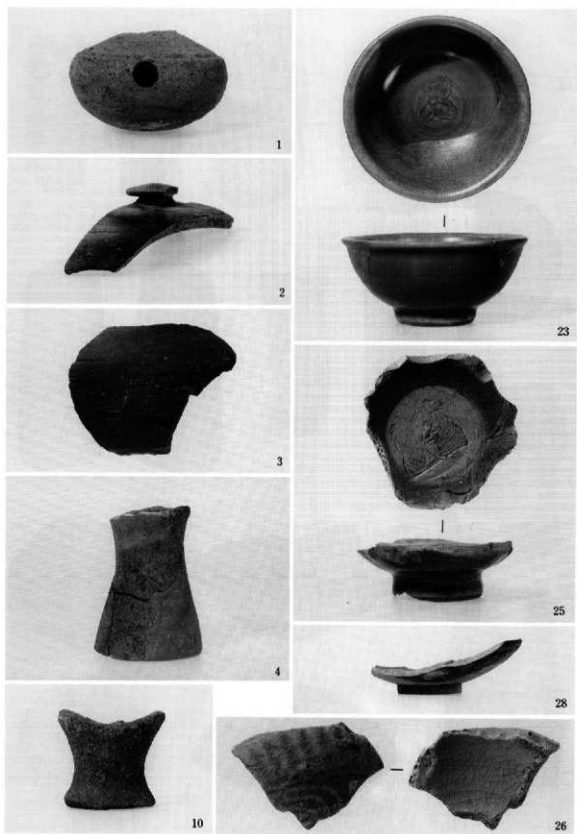
3区1・2・5・7号墳出土遺物



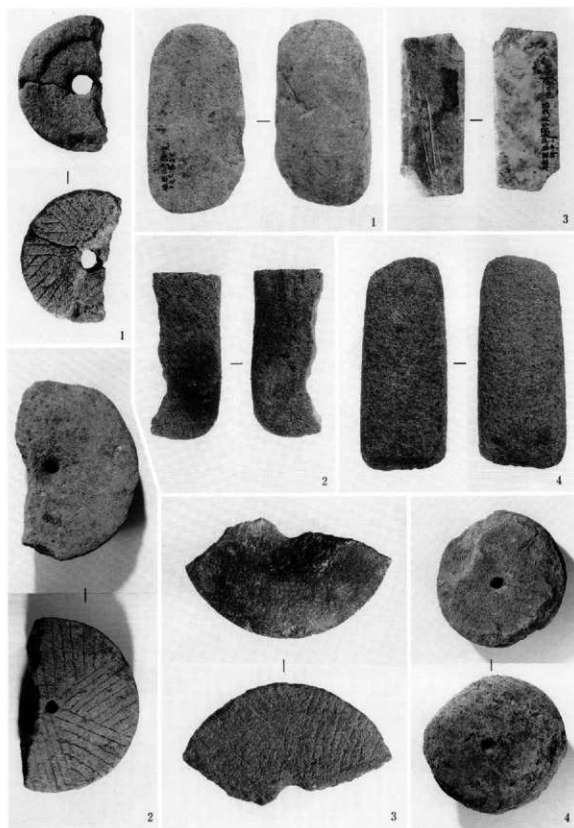
1. 0区・2区・3区出土遺物



3区11・13・20号土壇と土倉出土遺物



3区大清出土遗物



3区大溝等出土遺物



鶴先遺跡0区全景空中写真



1. 0区全景（西上空から）



2. 表土除法後の0区（南から）



1

1. 0区1号落し穴



2

2. 0区6号落し穴



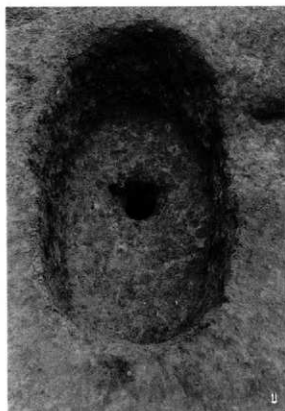
3

3. 0区3号落し穴



4

4. 0区3号落し穴 (完備扶設)



1. 0区2号落し穴 2. 0区4号落し穴 3. 0区5号落し穴 4. 0区20号近世墓下の7号落し穴



1. 0区1号横穴墓



2. 0区1号横穴墓閉塞状況



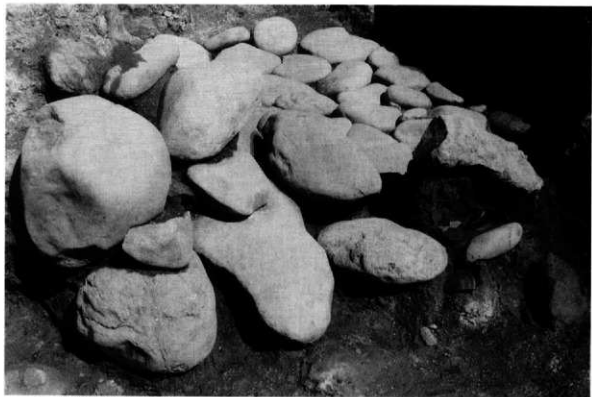
1. 0区1号横穴墓内部



2. 0区完掘後の1号横穴墓



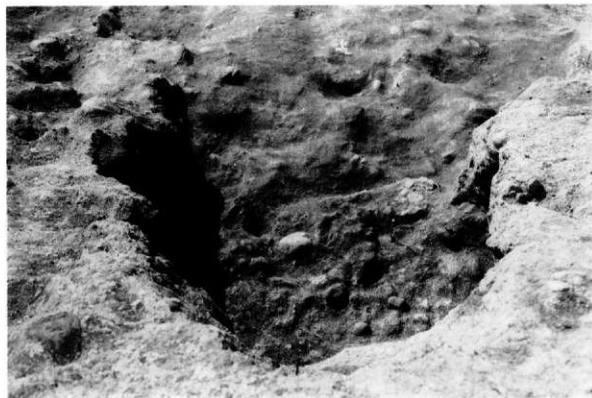
1. 0区2号横穴墓



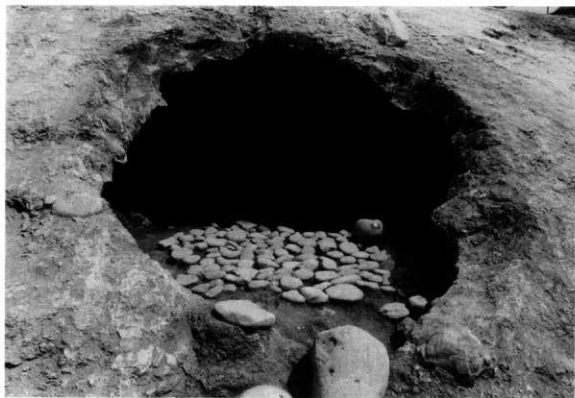
2. 0区2号横穴墓閉塞状況



1. 0区2号横穴墓内部



2. 0区完掘後の2号横穴墓



1. 0区3号横穴墓



2. 0区3号横穴墓堵塞状况



1・2, 0区3号横穴墓内部(1・2)



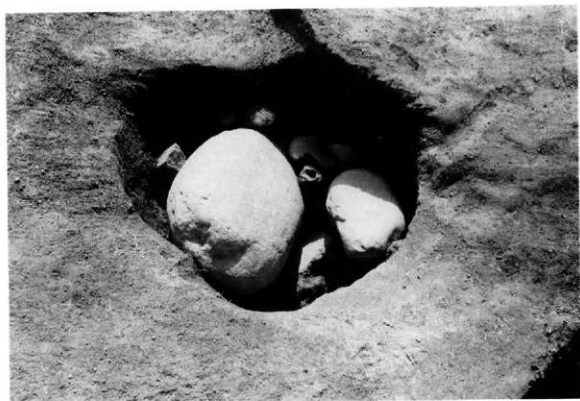
3・4, 0区完掘後の3号横穴墓(3・4)



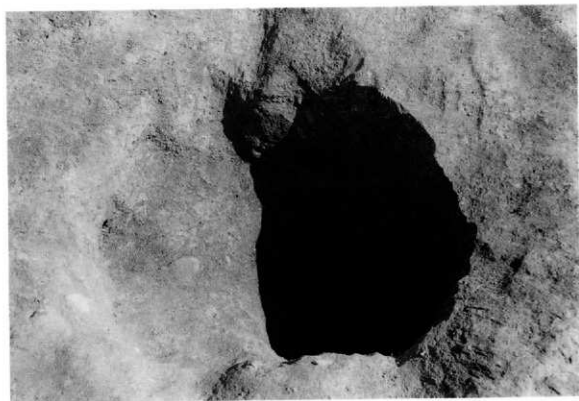
1. 0区4号横穴墓内部



2. 0区完掘後の4号横穴墓



1. 0区土倉の上面



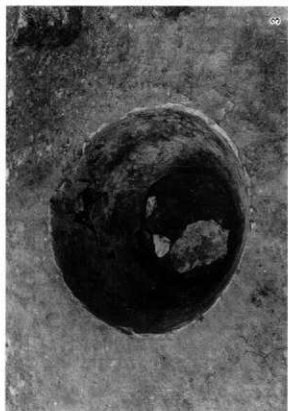
2. 土倉の内部



3. 石組遺構内の要出土状況



1



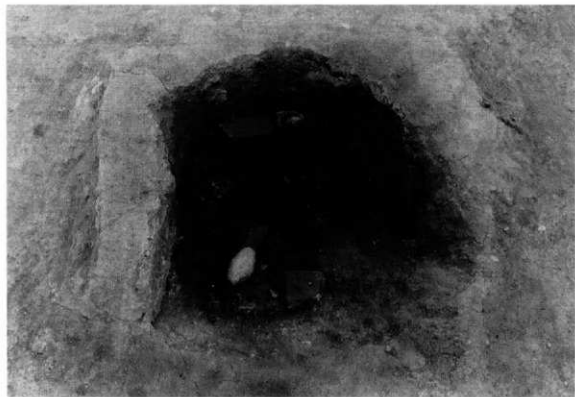
2

1. 0区3号土溝

2. 0区石組遺構全景 (西から)



1. 0区大溝



2. 0区カマド遺構



0 区近世墓群空中写真



2. 0区完掘後の近世島群全景 (東から)



1. 0区近世島群全景 (東から)



1. 0区14·15·27·29·30·32~34号近世墓付近



2. 25·26·36号近世墓付近



1. 0区4·8号近世墓 2. 0区13号近世墓 3. 0区14号近世墓付近



1. 0区93号近世墓 2. 0区61号近世墓
3. 0区96·81·91·95近世墓付近



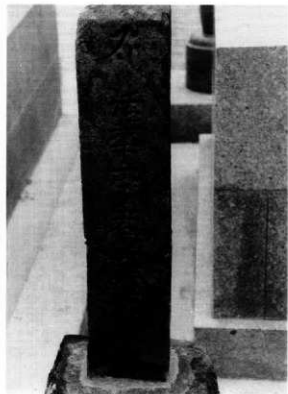
1. 0区27号近世墓数珠玉出土状况
2. 5号近世墓六道瓦出土状况
3. 54号近世墓穿出土状况
4. 0区近世墓群突圍風致口



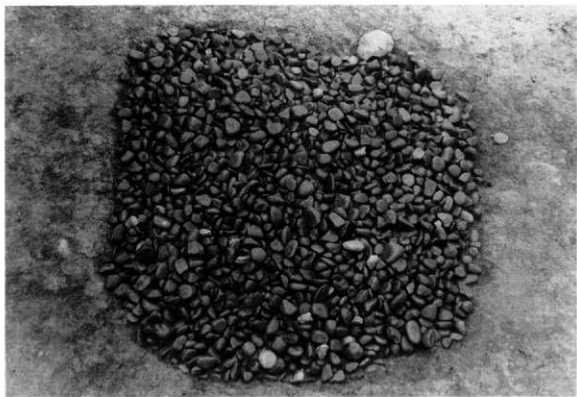
1. 0区近世墓群発掘風景(2)



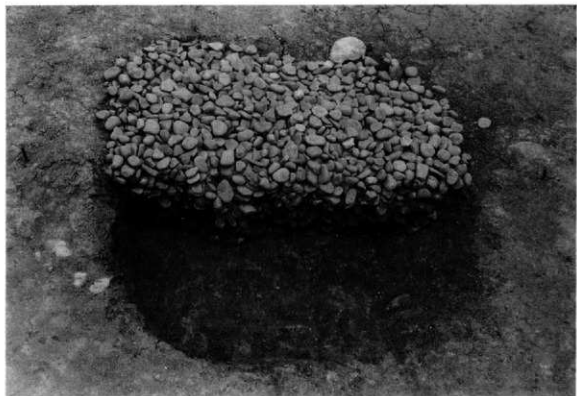
2. 0区1号経塚供養塔(現在 果願寺中)



3. 0区2号経塚供養塔(現在 果願寺中)



1. 0区1号経塚一字一石経出土状況



2. 0区1号経塚一字一石経堆積状況



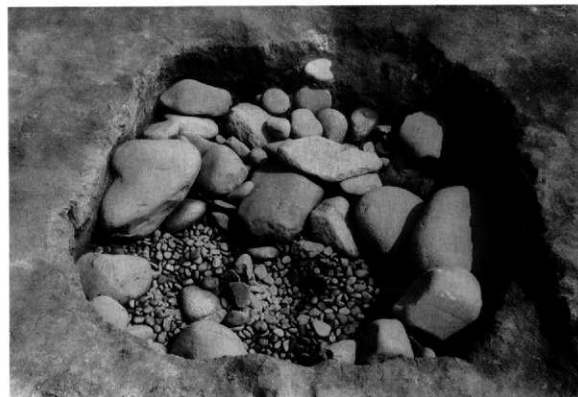
1. 0区完掘後の1号経塚



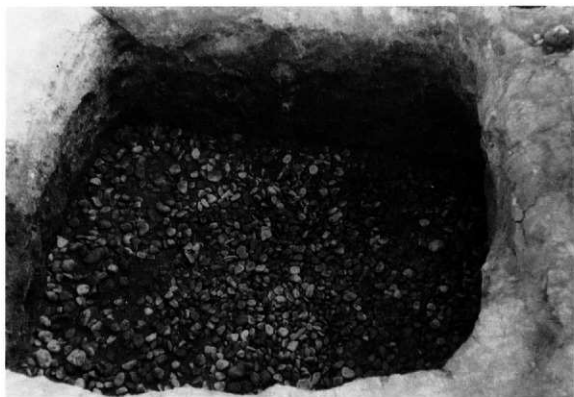
2. 0区2号経塚盛土



1. 0区2号経塚内部の石積



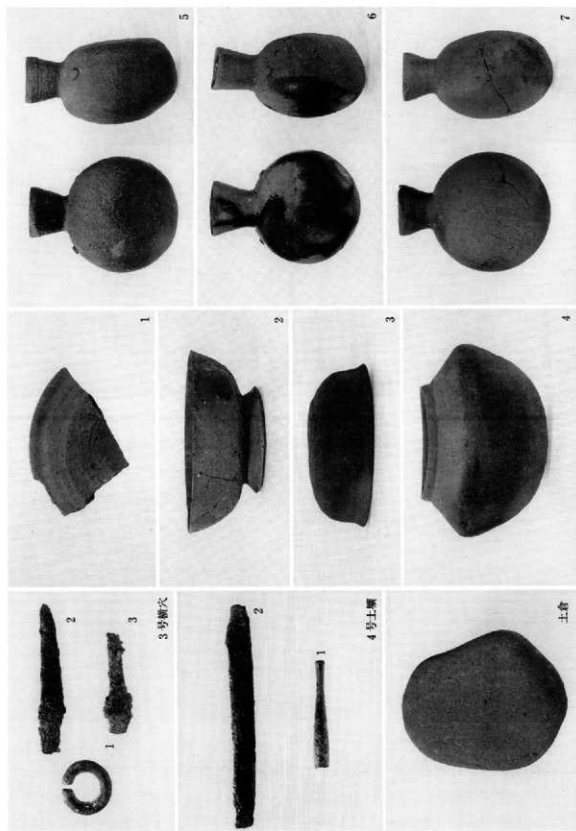
2. 0区2号経塚一字一石経出土状況(1)

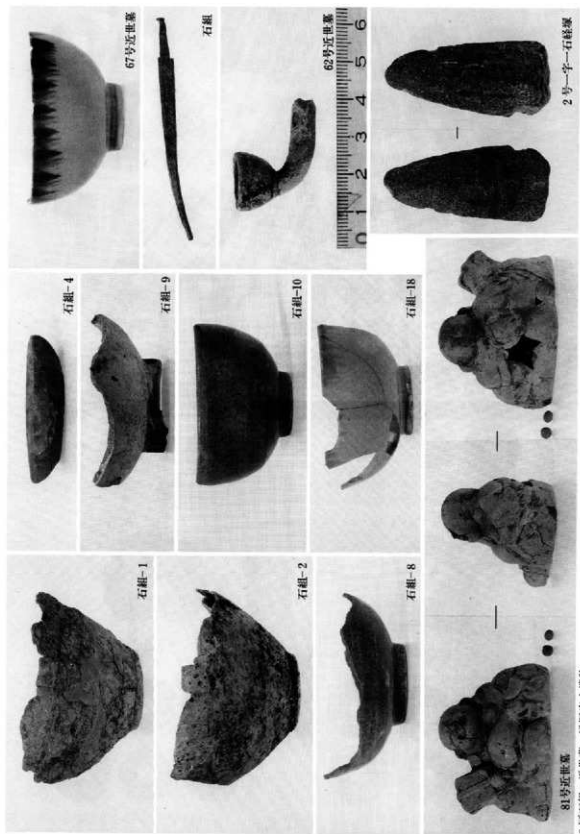


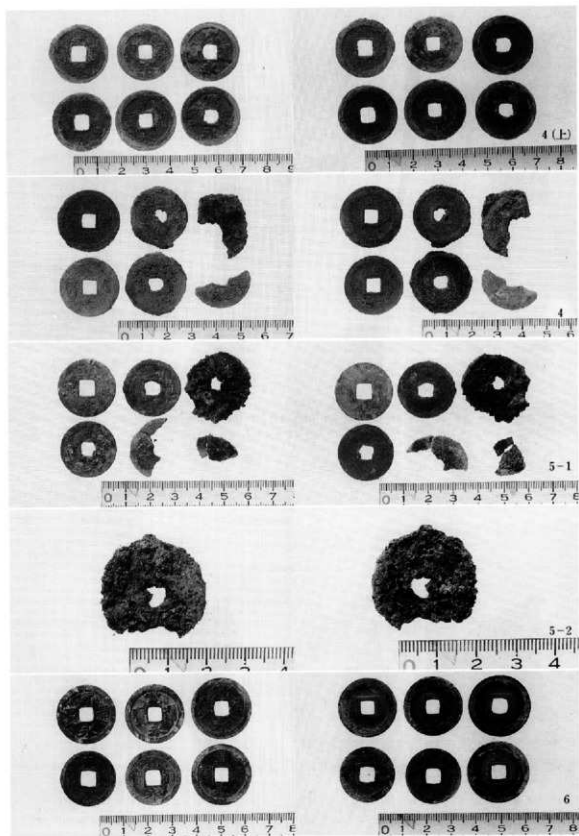
1. 0区2号経塚一字一石経出土状況(2)



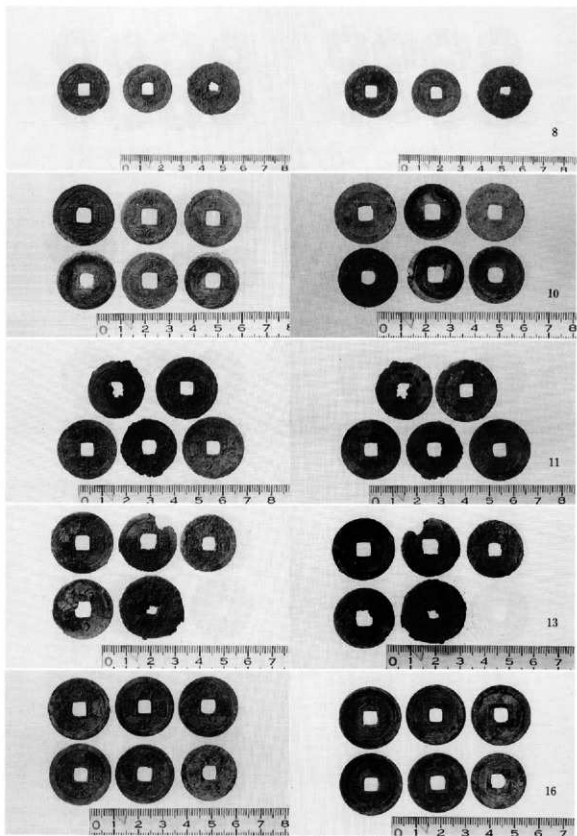
2. 0区完掘後の2号経塚



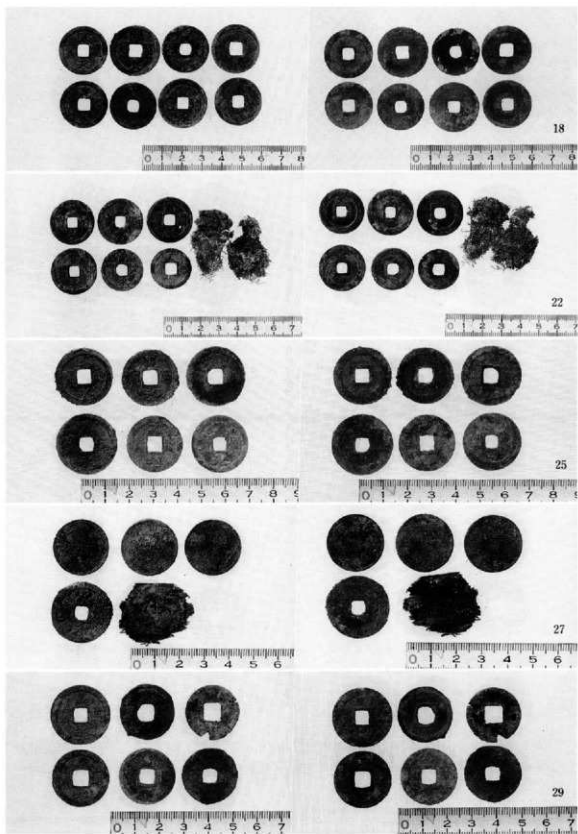




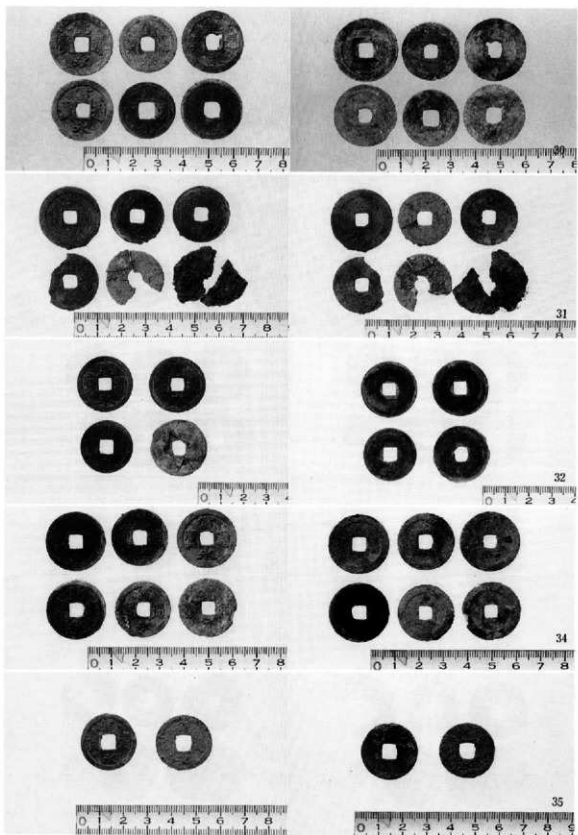
0区4(上)·4·5·6号墓出土六道钱



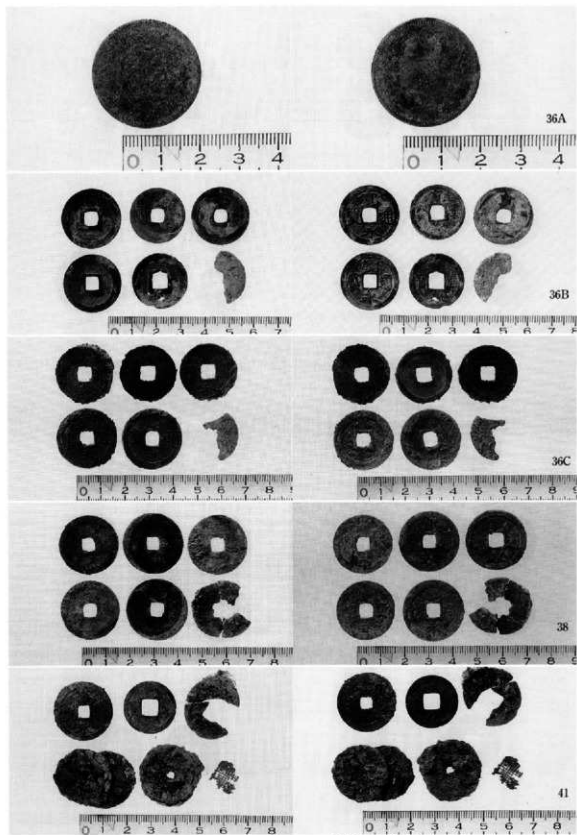
0区8·10·11·13·16号墓出土六道钱



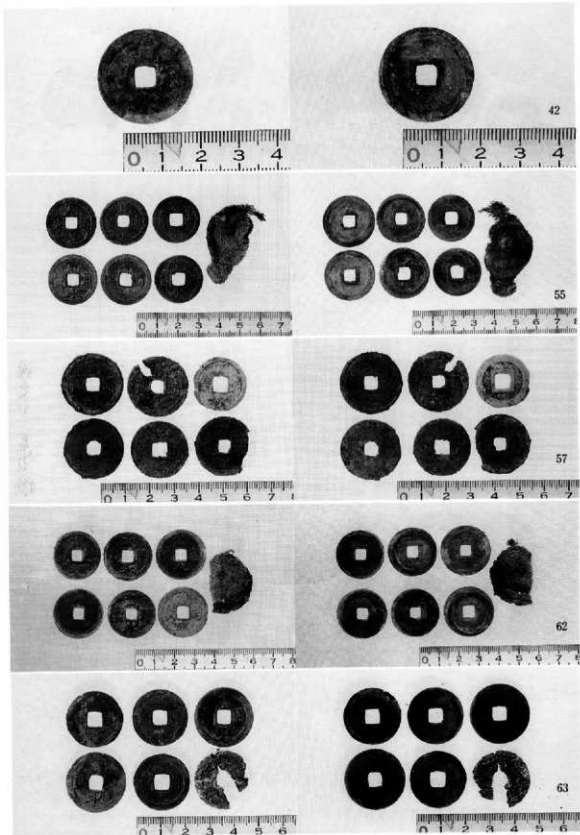
0区18·22·25·27·29号墓出土六道钱等



0 区30・31・32・34・35号墓出土六道銭



0区36A·36B·36C·38·41号墓出土六道钱等



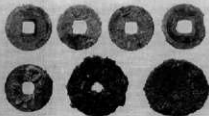
0区42·55·57·62·63号墓出土六道钱等



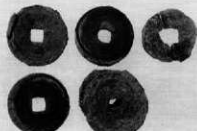
65



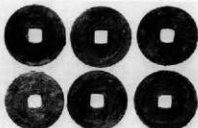
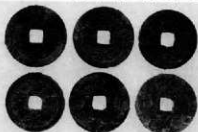
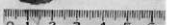
66



69



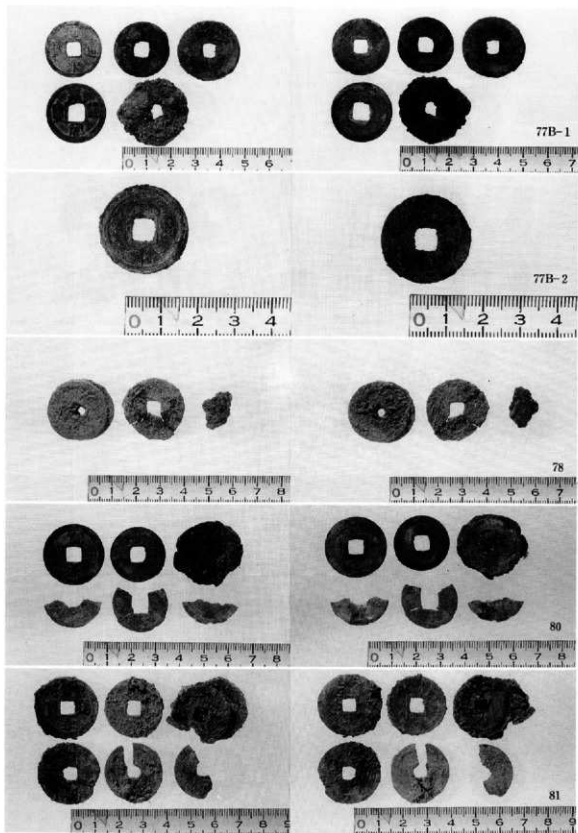
74



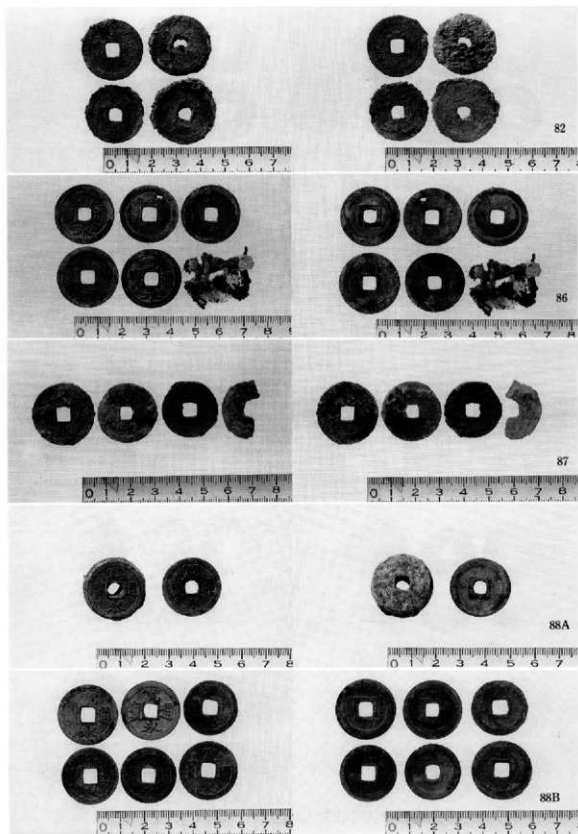
77A



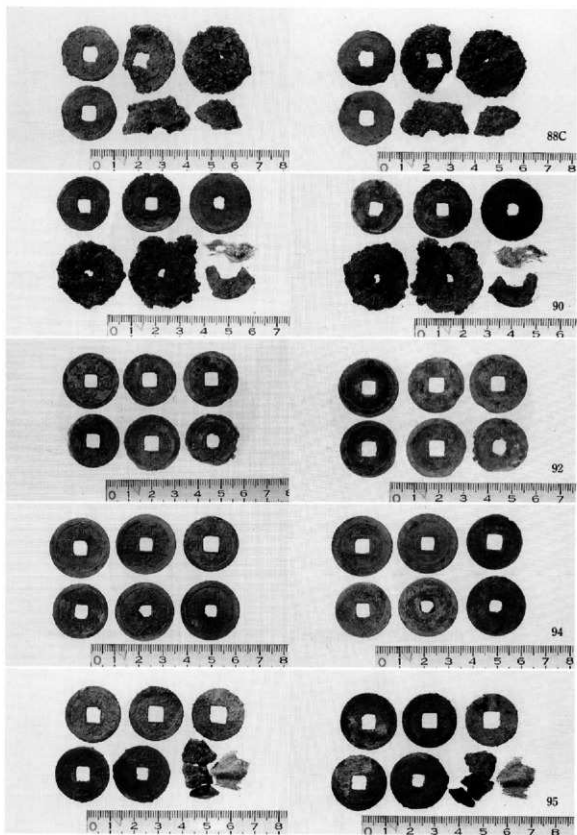
0区65・66・69・74・77A号墓出土六道銭



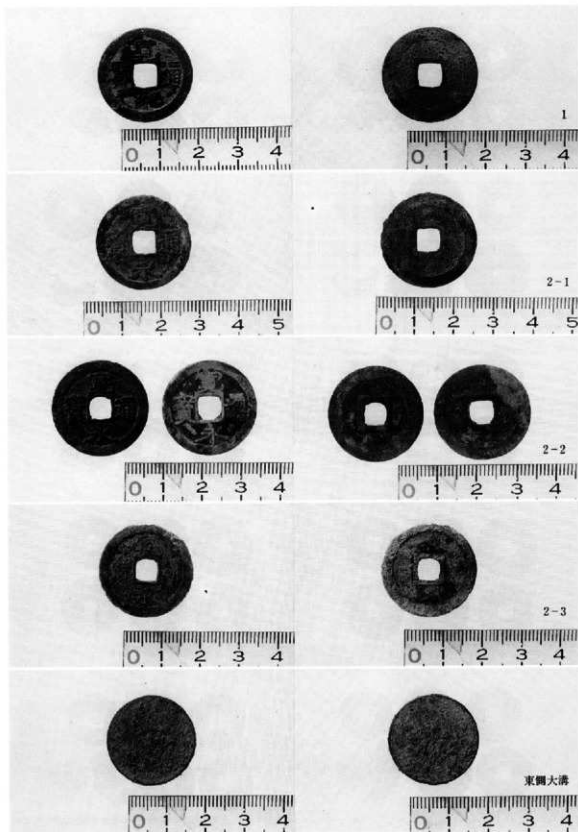
0区77B·78·80·81号墓出土六道钱



0 区82·86·87·88A·88B号墓出土六道钱等



0区88C·90·92·94·95号墓出土六道銭等



0区1・2号一字一石経塚・東側大溝出土六道銭

報告書抄録

ふりがな	すさぎいせき						
書名	鍋先遺跡						
副書名	福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡の調査						
巻次							
シリーズ名	一般国道10号線横田道路関係埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第5集						
編著者名	副島邦弘 櫻木晋一 中橋孝博						
編集機関	福岡県教育委員会						
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7番7号 (092-651-1111)						
発行年月日	平成7(1995)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村: 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
すさぎ 鍋先	福岡県京都郡 豊津町大字徳永 字鍋先 字居屋敷	406244: 920179	33° 41' 10"	131° 00' 00"	19890717 ↓ 19891030 ↓ 19900801 ↓ 19901006	5700㎡	一般国道10号線 横田道路の建設 に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
鍋先遺跡		旧石器時代			旧石器		
		縄文時代			石鏃などの石器		
		弥生時代	住居跡	2	弥生式土器・石斧		
		古墳時代	横穴式石室古墳	7	須恵器 鉄器		
			横穴墓	4	耳飾		
			住居跡	1	馬具		
			土壌墓	2			
		中世	土 屋		貿易陶磁器		
			土壌墓	13	陶磁器		
			土 倉	8	土師質土器等		
		近世	近世墓	95	六道銭		
			溝	7	人形		
			家屋基礎		日常雑器		

一般道路 10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第5集

鋤先遺跡

1995年3月31日

発行 福岡県教育委員会
〒812 福岡市博多区東公園7番7号
電話(092)651-1111

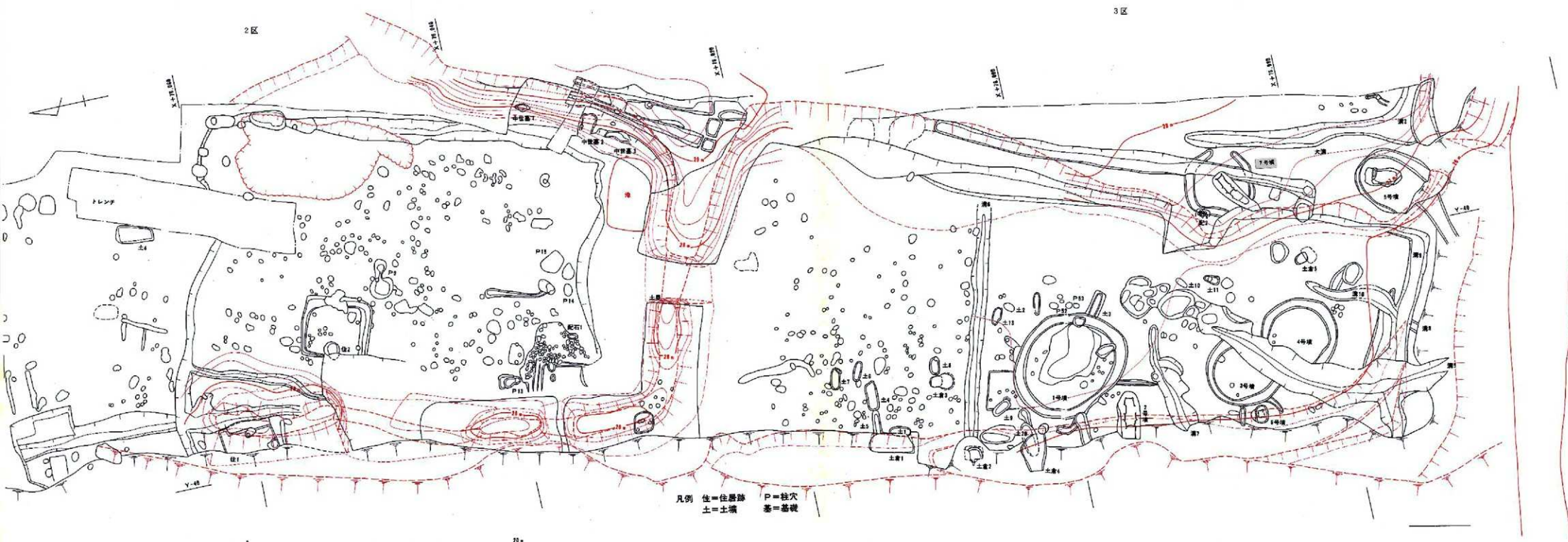
印刷 株式会社西日本新聞印刷
〒812 福岡市博多区吉塚8丁目2番15号
電話(092)611-4431

福岡行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133061
登録年度 6	登録番号 8

椎田 B.P

鋤先遺跡 第5集

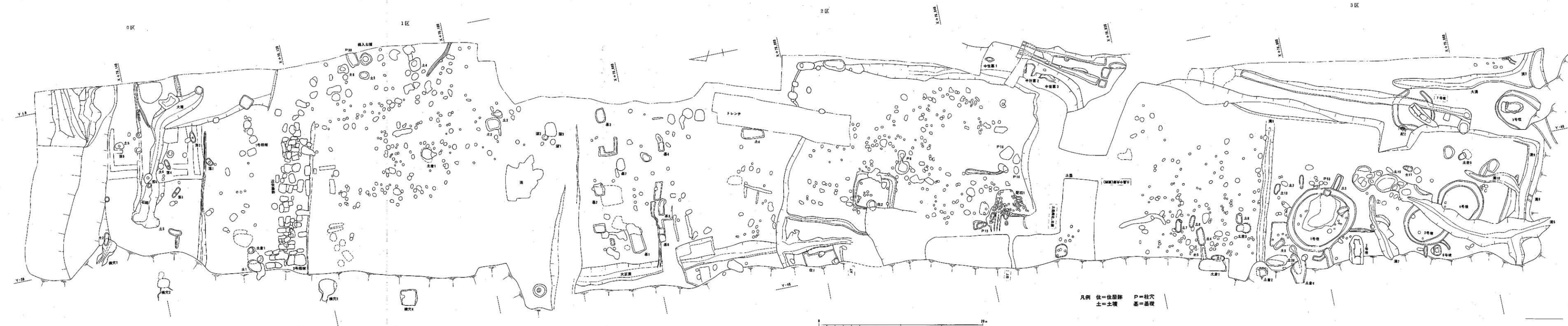
(75-6-P3 [2])



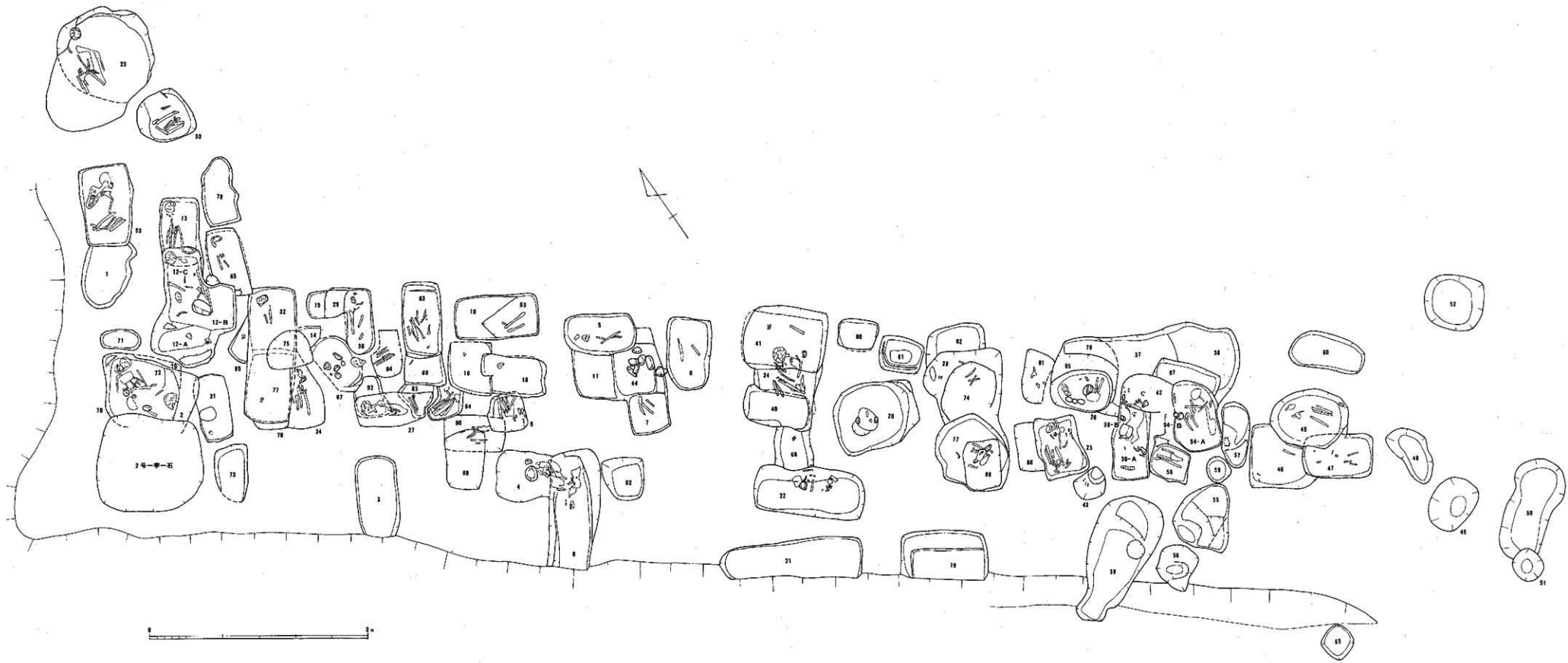
凡例 住=住居跡 P=柱穴
 土=土境 基=基礎



第5図 縄文遺跡地形測量図 (1/200)



第6図 銅光遺跡遺構配置図(1/200)



第93图 0区近世墓坑配置图(1/40)